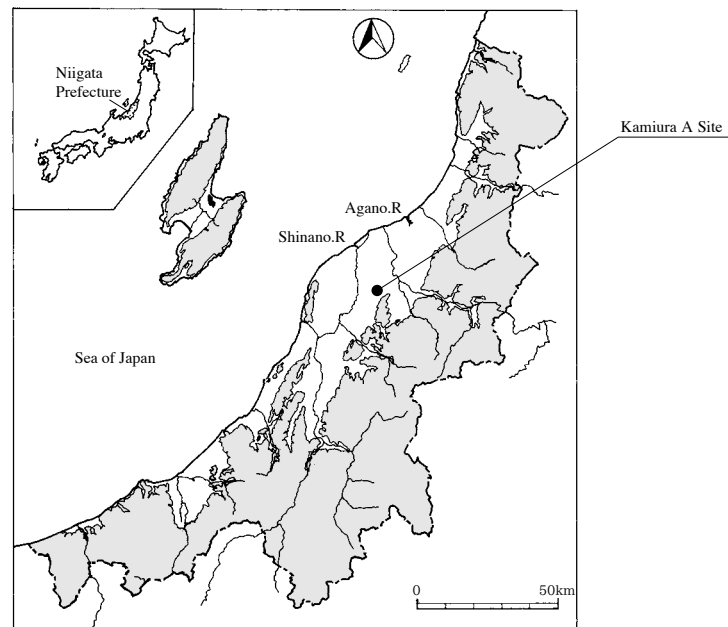


かみうら
上浦 A 遺跡 第14次調査

— 市道結第6号市之瀬線改良工事に伴う発掘調査報告書 —



2010

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は市道結第6号市之瀬線改良工事に伴い実施した新潟県新潟市秋葉区荻島479番地1ほか所在の上浦A遺跡の発掘調査報告書である。上浦A遺跡の発掘調査は過去13回にわたって実施されている。今回は14回目の調査にあたり、平成20年10月15日から11月6日にかけて実施したものである。なお、出土遺物に関連性が認められることから、同事業における工事立会（平成20年1月～8月にかけて実施）により出土した遺物も併せて掲載している。
- 2 調査は市道結第6号市之瀬線改良工事に伴い、新潟市長（秋葉区建設課）から新潟市教育委員会（以下、市教委という）が執行委任を受け、市教委を調査主体とし、新潟市埋蔵文化財センター（以下、市埋文センターという）が調査を実施した。
- 3 発掘調査のうち現場作業を平成20年度に実施し、報告書刊行にかかる整理作業を平成20年度及び平成21年度に行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。
- 4 出土遺物および発掘調査・整理作業に係る記録類は、一括して市埋蔵文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の執筆は潮田憲幸（市埋蔵文化財センター学芸員）と早田勉（株式会社火山灰考古学研究所）が分担して行い、潮田が第I章～V章およびVII章第1・2・4節を、早田が第VI章および第VII章第3節を執筆した。
- 6 本書の編集は、潮田が行った。
- 7 本書で用いた写真は、遺構写真については潮田が撮影したが、空中写真の撮影は株式会社オリスによる。遺物写真は佐藤俊英氏（ビッグヘッド）に依頼した。
- 8 各種図版作成および編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタル図化およびデータ編集を行った。
- 9 出土資料の自然科学分析は、株式会社火山灰考古学研究所に委託した。
- 10 本報告中で述べられる市内遺跡の情報は、全て平成20（2008）年12月31日時点のものである。
- 11 当遺跡の調査成果は、以下の刊行物で内容の一部が紹介されているが、本書の記載内容をもって正式な報告とする。内容に齟齬がある場合は、本書の記述をとるものとする。
新潟市埋蔵文化財センター（編）2009『新潟市遺跡発掘調査速報会資料』新潟市埋蔵文化財センター
新潟市教育委員会（編）2009『平成20年度新潟市文化財調査概要』新潟市教育委員会
- 12 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・諸機関よりご指導・ご協力を賜った。
伊藤秀和、小田由美子、春日真実、坂上有紀、新津郷土地改良区（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者および製作年を示した。
- 4 本文中の註は各章末尾に記した。引用・参考文献は編著者と発行年を西暦で示し、巻末に一括して掲載した。
- 5 遺構・遺物は通し番号とし、本文および観察表・図版の番号は共通する。
- 6 土壌・遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局発行の『新版標準土色帖』に拠り、その記号を記載した。
- 7 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、須恵器以外を白抜きとした。この他タールと被熱範囲をトーンで表現しているが、凡例はその都度提示する。
- 8 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差を考慮し中軸線の両側に空白を設けた。
- 9 遺物の注記は「08 上浦 A」とし、出土位置・層位等を併記した。
- 10 遺構・遺物観察表中における（ ）付きの値は、推定値を意味する。

目 次

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 調査に至る経緯	1
第3節 調査履歴	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
A 越後平野の地形環境	4
B 荻川地区の地形環境	4
C 遺跡周辺の微地形	6
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	11
第1節 試掘調査と工事立会	11
A 試掘調査	11
B 工事立会	11
第2節 本発掘調査	11
A 調査方法	11
B 調査経過	12
C 調査体制	14
第3節 整理作業	14
A 整理方法	14
B 整理経過	14
C 整理体制	14
第Ⅳ章 遺 跡	15
第1節 概 要	15
第2節 層 序	15
第3節 遺 構	16
A 平安時代の遺構	16
B 近代の遺構	17
第Ⅴ章 遺 物	18
第1節 遺物の概要	18
A 第14次調査出土分	18
B 工事立会の遺物	18
第2節 分類および用語の説明	18
第3節 出土遺物	19
A 遺構出土土器	19
B 包含層出土土器	20

C 搬入礫	21
D 有機遺物	22
E 工事立会出土遺物	22
第VI章 自然科学分析	23
第1節 プラントオパール分析	23
A 試料	23
B 分析方法	23
C 分析結果	24
第2節 花粉分析	24
A 試料	24
B 分析方法	24
C 分析結果	25
第3節 種実同定	27
A 試料	27
B 分析方法	27
C 結果	27
第4節 樹種同定	28
A 試料	28
B 分析方法	28
C 結果	28
第VII章 総括	31
第1節 土器	31
第2節 遺構	32
A 遺構の年代	32
B SE7について	32
第3節 自然科学分析結果	36
A 水田耕作（プラントオパール分析結果より）	36
B 遺跡周辺の植生と環境（花粉分析結果より）	36
C SE7出土の種子・炭化材（種子・樹種同定結果より）	37
第4節 まとめ	37
引用・参考文献	38
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第1図 上浦A・B遺跡本調査位置図	3	第8図 上浦A遺跡における花粉ダイアグラム	26
第2図 周辺地形分類図	5	第9図 顕微鏡写真(1)	29
第3図 上浦A遺跡と周辺の古代遺跡分布	8	第10図 顕微鏡写真(2)	30
第4図 秋葉区の時代別遺跡分布および近世地形絵図	9	第11図 遺構別器種構成比率(口残値)	32
第5図 旧集落および周辺の主な小字名(現在)	10	第12図 器高指数と底径指数	32
第6図 試掘坑位置図および土層柱状図	13	第13図 上浦A遺跡周辺のVI～VII期の井戸出土遺物と覆土の堆積状況	34
第7図 上浦A遺跡におけるプラントオパール分析結果	24	第14図 遺物の廃棄例	34

表 目 次

第 1 表 上浦 A・B 遺跡 調査次数……………2	第 4 表 上浦 A 遺跡における種実同定結果……………27
第 2 表 上浦 A 遺跡におけるプラントオパール分析結果……………23	第 5 表 上浦 A 遺跡における樹種同定結果……………28
第 3 表 上浦 A 遺跡における花粉分析結果……………26	第 6 表 上浦 A 遺跡周辺のVI～VII期の井戸……………33

別 表 目 次

別表 1 上浦 A 遺跡 遺構計測表……………41	別表 3 上浦 A 遺跡 遺物観察表（土器）……………42
別表 2 上浦 A 遺跡 遺構出土古代土器器種構成率……………41	別表 4 上浦 A 遺跡 搬入礫観察表……………42

図 版 目 次

図版 1 周辺の旧地形図（1 / 25,000）	図版 9 遺構個別実測図 1 SK2・4,SX3・5,SE7(1/40)
図版 2 周辺地形図および遺跡分布（1 / 10,000）	図版 10 遺構個別実測図 2 SX8～11（1 / 40）
図版 3 遺跡周辺現況図（1 / 5,000）	図版 11 遺構個別実測図 3 SD12・13（1 / 40）
図版 4 遺跡周辺の旧地割（1 / 5,000）	図版 12 出土遺物 1 SE7（1～6）、SX8（9）、SD12（7・8）、SD13（10）、包含層（11～26）
図版 5 グリッド設定図（1 / 2,000）	図版 13 出土遺物 2 SE7(27～30)、工事立会(31～42)
図版 6 上浦 A 遺跡遺構分布図（1 / 200）	図版 14 上浦 A 遺跡 第 14 次調査及び平成 19・20 年度工事立会出土古代土器分布状況
図版 7 包含層出土古代土器重量分布図（1 / 200）	
図版 8 基本層序（1 / 40、1 / 80）	

写真図版目次

写真図版 1 上浦 A 遺跡空中写真	SD13 ベルト（AA'）西から
写真図版 2 空中写真（1948 年）	SD13 完掘 西から
写真図版 3 着手前 西から 完掘状態 西から	土師器無台椀（16）出土状態 西から
写真図版 4 基本層序①、基本層序⑥、SK2 断面 北から SK2 完掘 北から、SX3 断面 北から SX3 完掘 北から、SK4 断面 北から SK4 完掘 北から	写真図版 8 遺構出土遺物（1～10） 包含層出土遺物（11～26）
写真図版 5 SX5 断面 西から、SX5 完掘 西から SE7 断面 西から SE7 遺物出土状態（上部）西から SE7 遺物出土詳細（上部）西から SE7 遺物出土状態（下部）西から SE7 遺物出土詳細（下部）西から SE7 完掘 西から	写真図版 9 SE7 搬入礫（27～30） 工事立会出土遺物（31～42）
写真図版 6 SX8 断面 北から、SX8 完掘 北から SX9 断面 西から、SX9 完掘 西から SX10 断面 AA' 南から SX10 断面 BB' 南から SX10 完掘 南から、SX11 断面 南から	写真図版 10 3（SE7）、4（SE7）、16（7G2） 17（7F9）、31（7J7）、32（6M14） 須恵器無台杯 12（6J25）ヘラ切痕 須恵器無台杯 34（5Q21）ヘラ切痕 土師器無台椀 3（SE7）糸切痕 土師器無台椀 4（SE7）糸切痕
写真図版 7 SX11 完掘 南から SD12 ベルト（BB'）及び北壁断面 南から SD12 完掘 南から、SD12 完掘 北から SD13 南壁断面 北から	写真図版 11 須恵器大甕 2（SE7）あて具・指頭痕 横瓶側面閉塞部 15（6I23）内面あて具痕および指頭痕 須恵器大甕 1（SE7）外面タタキメ 須恵器大甕 1（SE7）内面あて具痕 須恵器甕 37（表採品）外面タタキメ 須恵器甕 37（表採品）内面あて具痕 土師器鍋 6（SE7）内面あて具痕 土師器無台椀 16（7G2）底面ケズリ痕
	写真図版 12 墨書 拡大写真（宅） SE7 10 層出土 ヒョウタン

第 I 章 序 章

第 1 節 遺 跡 概 観

上浦 A 遺跡は新潟市秋葉区福島字上浦 479 番地ほかを中心に広がり、遺跡中心部分の標高は海拔約 2.5m、面積 4.93km² を測る。現況は遺跡中央部を横断する磐越自動車道を境に、北側が水田、南側が工業団地となっている。昭和 62 年度に実施された磐越自動車道建設に伴う遺跡分布調査によって発見され、発掘調査は今回を含め都合 14 回にわたって実施されており、調査の結果から奈良・平安時代の集落的要素を有する遺跡と位置付けられている。

遺跡は沖積地に立地し、古い地籍図からは、広大な低湿地の中に、旧河川によって形成された自然堤防が島状に点在している様が見て取れる(図版 4)。遺跡周辺は古くから人間の活動の舞台となっていたようで、中田遺跡(古墳時代)・結七島遺跡(古墳・平安時代)・結遺跡・上浦 B 遺跡・長沼遺跡(奈良・平安時代)など古墳時代から古代にかけての遺跡が比較的濃密・広範囲に分布する。

今回の調査地は上浦 A 遺跡の最北端に位置し、周辺の標高は海拔 2.5m 前後、調査面積は 442m² である。

第 2 節 調査に至る経緯

今次調査の原因である市道結第 6 号市之瀬線改良工事は、旧新津市時代に計画された国庫補助事業である。新津市は平成 17 年 3 月に新潟市と合併したが、事業自体は「合併建設計画」として新潟市に引き継がれている。合併前後に新潟市歴史文化課により実施された公共事業の事前調査により把握され、平成 17 年 1 月および 4 月に、計画の詳細について直接聴取している。歴史文化課では、周知の遺跡ではないものの、付近に周知の遺跡が存在するため、事前の試掘調査が必要と判断し、用地買収の終了にあわせて調査を実施することとした。

事業担当課である秋葉区建設課からの試掘依頼は用地買収終了後の平成 19 年 9 月 19 日付でなされ、歴史文化課ではそれを受けて平成 19 年 10 月 10 日～16 日まで調査(第 13 次調査)を実施した。調査の結果、わずかな遺物が出土したものの、遺構は発見されず、この時点では本調査の必要は認められないと判断し、平成 19 年 10 月 18 日付で遺跡の範囲変更(範囲拡大)をした上で、工事立会で対応することとした。

工事は 19 年度にパイプ灌漑の移設、20 年度に道路改良を行う計画であり、前者に関連して新潟市長より県教育長宛に、平成 19 年 12 月 25 日付(新秋建第 1073 号)で文化財保護法第 94 条に基づく通知がなされた。これを受けて県教育委員会(以下県教委という)では平成 20 年 1 月 18 日付で工事立会が必要の旨回答し、平成 20 年 1 月 18 日～2 月 29 日にかけて新潟市埋蔵文化財センター(以下市埋文センターという)が工事立会を実施している。

工事立会中に試掘坑 8・9T 周辺(第 1 図)で古代の遺物が約 70 点出土し、この付近に遺構・遺物の集中分布が予想されたため、平成 20 年 4 月に立会結果の報告および今後の対応について県教委と協議した結果、本調査で対応するべきとの指導を受けた。これを踏まえ、歴史文化課と秋葉区建設課で協議を行い、立会時に遺物が集中して出土した部分を中心として約 430m² の範囲を稲刈り後に調査すること、それ以外の部分は工事立会で対応し、当初の予定通り道路改良を実施することで合意した。本件に関する 94 条通知は、平成 20 年 4 月 21 日付(新秋建第 114 号)でなされ、本調査部分を除いて道路の本体工事に着手している。この間、市埋文センターでは、協議に基づき断続的に工事立会を実施している(第 6 図、図版 14)。

第3節 調査履歴

秋葉区建設課からは平成20年7月25日付で本調査の依頼を受け、機材・人員等の準備を開始した。9月以降調査支援・測量等の入札・契約を行い、刈入れを待って平成20年10月2日付で文化財保護法第99条に基づき発掘調査の着手について県教委に通知し、上浦A遺跡第14次調査を実施することとなった。

第3節 調査履歴 (第1表 第1図)

上浦A遺跡は平成2(1990)年以降、新潟県教育委員会(以下、県教委という)、新津市教育委員会(以下、新津市教委という)、新潟市教育委員会(以下、市教委という)がそれぞれ発掘調査を実施しており、報告書によって書名が異なること、のちに遺跡が上浦AとBに分割されたことなどから、調査履歴の把握が複雑になっている。本節では、今後の調査を考慮し、これまで実施された調査履歴を整理しておく。

県遺跡台帳では、当遺跡は昭和60(1985)年に「上浦遺跡」として登録されている。その後、平成2(1990)年から磐越自動車道建設にともない県教委が数度にわたる確認調査・本調査(第1～4次・7次)を実施し、平成3(1991)年から新津市教委が高速道路南側の工業団地造成に係る確認調査・本調査(第5～9次)を順次実施している。上浦B遺跡はこの過程で発見されている(上浦B第1次調査)が、当初は飛び地として扱われている。両者が正式に分割されるのは平成15(2003)年度である。新津市が新潟市に合併した平成17(2005)年以降は、上浦A遺跡の範囲内において、今回を含め都合4度の確認調査・本調査が実施されている。

刊行済みの報告書は、県教委実施の調査については第1次～4次・7次調査をまとめて『上浦遺跡』として平成15(2003)年に刊行され(坂上2003)、新津市教委による調査については、現上浦A遺跡該当部分の調査結果(第9次)が『上浦A遺跡』として平成9(1997)年に刊行されている(川上1997)が、両者とも刊行時点での県台帳に登録された遺跡名称は上浦遺跡であり、調査次数の呼称や書名に差異がある。

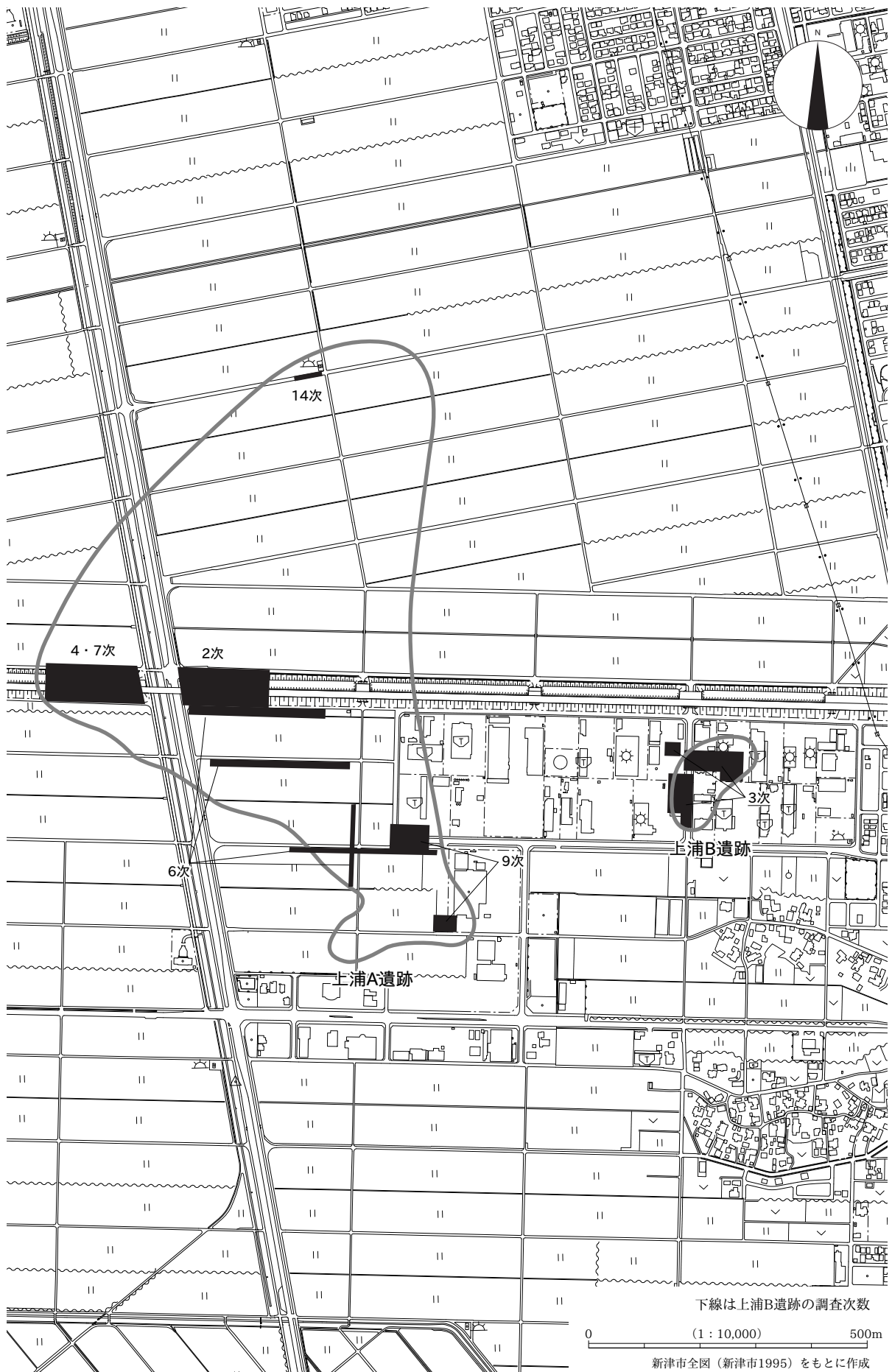
今回の報告にあたり、これまでの調査を踏まえて書名および調査履歴を検討した結果、分割前の調査履歴は現上浦A・B両遺跡の調査履歴に振り分けることが可能であり、分割前後の両遺跡の調査履歴に一貫性が保てることがわかった。よって現上浦A遺跡の範囲内において実施された発掘調査については、そのまま上浦A遺跡の調査履歴として扱うこととした。これに基づいて両遺跡ごとの調査次数を記入したのが第1表である。本表中では、上浦A遺跡は14回、上浦B遺跡は3回の発掘調査が行われていることになる。

以上を踏まえ、今次調査は、「上浦A遺跡 第14次調査」と呼称する。

第1表 上浦A・B遺跡 調査次数

遺跡名	上浦A 調査次数	上浦B 調査次数	調査種別	調査期間	調査主体	調査面積 (m ²)	調査原因	文献
上浦遺跡			分布調査	1985.8.5	新潟県教育委員会	—	詳細分布調査	川上1997
上浦遺跡			分布調査	1987.4	新潟県教育委員会	—	高速道路建設	坂上2003
上浦遺跡	1		試掘調査	1990.2.26～3.3	新潟県教育委員会	353	高速道路建設	坂上2003
上浦遺跡	2		本調査	1990.5.9～11.9	新潟県教育委員会	7,630	高速道路建設	坂上2003
上浦遺跡	3		試掘調査	1990.6.11～16	新潟県教育委員会	370	高速道路建設	坂上2003
上浦遺跡	4		本調査	1991.9.2～11.30	新潟県教育委員会	6,910	高速道路建設	坂上2003
上浦遺跡	5		試掘調査	1991.12.2～7	新津市教育委員会	280	灌漑排水事業	渡邊1992
上浦遺跡	6		本調査	1991.12.24～1992.1.20	新津市教育委員会	800	灌漑排水事業	渡邊1992
上浦遺跡		1	確認調査	1992.3.16～27	新津市教育委員会	752	工業団地造成	川上1997
上浦遺跡		2	確認調査	1992.4.21～24	新津市教育委員会	890	工業団地造成	川上1997
上浦遺跡		3	本調査	1992.5.11～12.3	新潟市教育委員会	7,700	工業団地造成	新潟市2007・黒崎町2002
上浦遺跡	7		本調査	1992.7.16～9.4	新潟県教育委員会	3,510	高速道路建設	坂上2003
上浦遺跡	8		確認調査	1992.7.20～31	新津市教育委員会	632	工業団地造成	川上1997
上浦遺跡	9		本調査	1992.8.20～12.5	新津市教育委員会	3,900	工業団地造成	川上1997
上浦遺跡	10		確認調査	1998.11.2～18,1999.1.11	新津市教育委員会	428	工業団地予定地	
平成15(2003)年度範囲変更 上浦A・Bに分割								
上浦A遺跡	11		確認調査	2005.10.22	新潟市教育委員会	5	農舎建設	
上浦A遺跡	12		確認調査	2007.7.5, 6	新潟市教育委員会	120	市道建設	
上浦A遺跡	13		試掘調査	2007.10.10～16	新潟市教育委員会	162	市道改良	
上浦A遺跡	14		本調査	2008.10.15～11.6	新潟市教育委員会	442.8	市道改良	本書
調査面積合計						34,884.8		

*調査次数は、着手日時の早い順から数えた。



第1図 上浦A・B遺跡本調査位置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 (第2図 図版1～4 写真図版1・2)

A 越後平野の地形環境

越後平野は、長さ約100km、最大幅約25km、面積約2,040km²を測る日本海側最大の平野である。平野中には日本有数の大河である信濃川・阿賀野川が貫流し、途中で多くの中・小河川の水を集めながら日本海へ注いでいる。両河川の河口部に位置する新潟市は、人口約81万人を数える政令指定都市であり、位置・面積ともに越後平野の中核である(註1)。

新潟地域の地形は、海岸部の砂丘、西の角田山塊、南東の新津丘陵と、その間の沖積面に大別される。

海岸線後退にともなう風汐作用により形成された砂丘は、海岸線と平行に弧状に連なって分布している。これらの砂丘は全て完新世第四期以降の形成とされ、更新世由来の「古砂丘」と対比して、「新砂丘」と呼ばれている(新潟古砂丘グループ1979)。砂丘列は海岸部から内陸へと10列に分かれ、最も内陸の列(いわゆる亀田砂丘)は海岸から約11km離れている。砂丘列は新潟市中央区鳥屋野および江南区茅野山付近で一旦途切れ、角田山麓で再び表れるが、この間の沖積面にも埋没した砂丘列が存在することが明らかになっている(註2)。

市の西縁を海岸線に沿って連なる弥彦・角田山塊および南東部に位置する新津丘陵は、第3期中新世(2500万～500万年前)の火山活動を起源とし、海底噴出した溶岩が更新世前期(170万年前～70万年前)に隆起して形成された地形で、山麓に更新世起源の段丘を有している。段丘裾部は山地から流れ出る河川により侵食され、小規模な扇状地や谷底平野を形成する。豊かな自然環境を有するが、古くから薪炭や木材の供給・製鉄・製陶場としての利用など人間の積極的な介入を受けており、植生のかかなりの部分に人為的な改変が見られる。

地域の大部分を占める沖積面は、完新世以後、海岸部を砂丘に仕切られた内海状の環境下において、河川の沖積作用により形成されたものである。地層は主に粘土やシルト・いわゆるガツボと呼ばれる未分解の植物遺体から成り、河川や湖沼跡の地盤は非常に軟弱である。平野中には、旧河道に沿って自然堤防が数多く分布しており、地形図や空中写真を見ると、かつては多くの河川が平野を縦横に乱流していたことがわかる。これらの旧河道や潟湖は、近代以降も沼地や潟として残っていたが、戦中～昭和30年代の耕地整理と乾田化により、ほとんどが姿を消している。

B 荻川地区の地形環境

上浦A遺跡の所在する秋葉区荻川地区は、東を能代川・北を小阿賀野川に囲まれ、南・西部に広大な水田を有する田園地帯である。域内を貫く国道403号線と信越本線は、新潟と三条・加茂方面を接続する主要路線でもある。新潟市街地に近いこともあり、荻川駅周辺は昭和50年代後半から新潟市のベッドタウン化が進み、磐越自動車道の開通にあわせた区画整理等のインフラ整備により信越線沿いに市街地が拡大し、近年は南部の福島・川口地区でも新興住宅地が造成され、人口が増加している。

表層地質はほぼ全域が河川堆積物から成る沖積地で、粘土・砂・シルトを主な土壌成分とし、地形は自然堤防と後背低地に分けられる。自然堤防の標高は秋葉区荻島・中野付近でおよそ海拔4～5m、後背低地は調査地付近で海拔2～2.5mを測り、能代川左岸では東から西へ、小阿賀野川左岸では北から南へと傾斜している。最も標高が低いと思われるのは遺跡から北西に数十メートル地点であるが、この付近には八丁潟と呼ばれる沼が存在していたことが、18世紀初頭の絵図に記載されている(木下1993 第4図)。



新潟県発行『土地分類基本調査 新潟・新津』1972・1974をもとに作成 [1/150,000]

第2図 周辺地形分類図

自然堤防は能代川と小阿賀野川沿いに大きく発達するが、福島・川口・北潟などには能代川から西に向かって伸びる例も見られ、この2河川以外にも複数の旧流路が想定される。明治44年測量の2万5,000分の1地形図および戦前の地籍図には能代川から導水される水路が幾本も描かれており（図版1・4）、遺跡範囲を重ね合わせると、自然堤防・水路と遺跡が対応しつつ分布していることがわかる（図版3 写真図版2）。これらの水路は元々は自然河川であった可能性もあろう。

C 遺跡周辺の微地形

現況では南から北に向かって非常に緩やかな傾斜がある。遺跡の北側が水田、南側が高速道路と工業団地となっているが、かつては一面の田地であった。旧地籍図においても、この付近は自然堤防と思われる畑はほとんど存在せず、近世末からこの一帯の土地利用形態は大きな変化がない様に思われる。遺跡範囲内には幾本かの水路がかかっているが、前述のとおりこれらの水路が河川の名残とすれば、上浦A遺跡は、これら中・小河川沿いの自然堤防に立地していたと言えよう。巨視的に見れば、隣接する結遺跡・長沼遺跡などを含め、この一帯の微高地に営まれた遺跡の一部と捉えることができる。

第2節 歴史的環境（第4図）

秋葉区内の遺跡数は平成20年12月31日現在、112箇所を数える。この地域は平野の背後に新津丘陵をかえ、豊かな自然環境と良好な居住性を有する地域であるため、様々な時代の遺跡が存在する。

遺跡は、古い時代ほど丘陵部に多く、時代が下るにつれて丘陵縁辺から平野部に分布を広げていく。旧石器時代から古墳時代までの遺跡の多くは丘陵・段丘上に多く分布しているが、奈良・平安時代になると、水田耕作を背景として平野部の開発が進み、自然堤防を中心に遺跡の増加が見られる一方で、製鉄遺跡や須恵器窯跡などの生産遺跡は、燃料材の入手が容易な丘陵の麓に営まれる。中世以降、圃場や灌漑施設の整備などを通じて、中・長期的な居住がなされるようになり、近世初期には現集落の大部分が成立している。

以下に時代ごとに遺跡の分布とその背景を述べる。

旧石器時代

人々は丘陵・山地を主な生活の舞台とし、定期的な移動を繰り返しながら狩猟・採集で生計を立てていたと想像される。市内で確認されている旧石器時代の遺跡は3箇所、弥彦・角田山麓と新津丘陵にのみ分布しているが、数は少なく、資料も断片的である。

秋葉区内で確認されているのは草水町2丁目窯跡と古津八幡山遺跡の2箇所のみで、前者は段丘上に、後者は丘陵の尾根に立地している。いずれも遺構は発見されず、ナイフ形石器と石刃がわずかに出土しているのみで、両遺跡における旧石器時代の様相は不明である。

縄文時代

西蒲区・秋葉区・江南区・北区など、丘陵・砂丘のある地域に多く分布する。後期までは丘陵部に生活の基盤を置いていたようだが、晩期になると沖積地に進出する遺跡もあらわれる。

秋葉区では愛宕澤遺跡（草創期）・平遺跡（中・後期）・秋葉遺跡（中・後期）・原遺跡（中・晩期）など、縄文草創期から後期までの遺跡が丘陵・段丘部に分布する。平野部では大沢谷内遺跡（晩期中葉～終末）が微高地上に立地している。平成20（2008）年に阿賀野川・能代川間の沖積地で発見された大野中遺跡（中期）は、遺物が地表下2mを超える深さで出土しており、沖積低地中の縄文遺跡の分布について、一考を要する事例である。

弥生時代

緒立遺跡（西区）・西郷遺跡（江南区）など、内陸部に残る砂丘縁辺で中期前葉の生活痕跡が見られるが、秋葉区内で確認されている遺跡は弥生後期を主体とする。丘陵部では古津八幡山遺跡・居村C遺跡等が主な遺跡とし

て知られ、特に古津八幡山遺跡は環濠・竪穴住居・前方後方形周溝墓などを有する拠点集落で、東北系・北陸系両系統の土器が出土するなど、この時代の地域間交流を考える上で注目される。平野部では丘陵西麓の微高地に立地する舟戸遺跡、丘陵東側の能代川自然堤防上に立地する五泉市箕下遺跡で若干の出土報告がなされているが、いずれもまとまった量ではない。社会は狩猟・採集を基盤とする経済からイネなどの農業生産を主体とする経済に転換しつつあり、遺跡の分布もこうした背景を反映し、水田耕作に有利な平野寄りの立地傾向を示す。

古墳時代

前期に各地で造営される古墳と、終末期に信濃川・阿賀野川河口部に設置される淳足柵がこの時代を特徴づける要素である。大和王権の勢力は、4世紀後半に新潟平野に及んだとされ〔石崎1993〕、市内では角田山麓の山谷古墳（西蒲区：前方後方墳）・菖蒲塚古墳（西蒲区：前方後円墳）、砂丘上に立地する緒立八幡神社古墳（西区：円墳）、新津丘陵の古津八幡山古墳（秋葉区：円墳）がそれぞれ前期の造営とされている。

淳足柵は647年に北方経営と対蝦夷政策の拠点として、当時の信濃川・阿賀野川河口付近に設置されているが、その位置については諸説あり、新潟市東区山ノ下〔小林2005〕、同市北区内〔金子2007〕などが近年主流になりつつある。

古津八幡山古墳は新津丘陵東縁の尾根上に造られた直径約60mの円墳で、北側に小規模な造出を有している。また、同古墳の南約1.5kmの段丘上にも、三沢塚（円塚古墳）と呼ばれる直径19mほどの円形を呈する塚状の遺構が存在する〔新潟市2007〕が、詳細は不明である。

水田耕作が生業の中で大きな割合を占めるに至った結果、日常生活の舞台は徐々に平野部に移っていったと考えられる。高矢C遺跡・舟戸遺跡などの集落的性格を有する遺跡が丘陵麓部に分布するほか、中田遺跡・沖ノ羽遺跡・上浦B遺跡・結遺跡など平野部に立地する遺跡も増えてくる。

上浦A遺跡の周辺では上述の中田遺跡・結七島遺跡が近接し、当遺跡周辺が人間の活動領域であったことをうかがわせるが、今回の調査ではこの時代の遺構・遺物は発見されていない。

奈良・平安時代

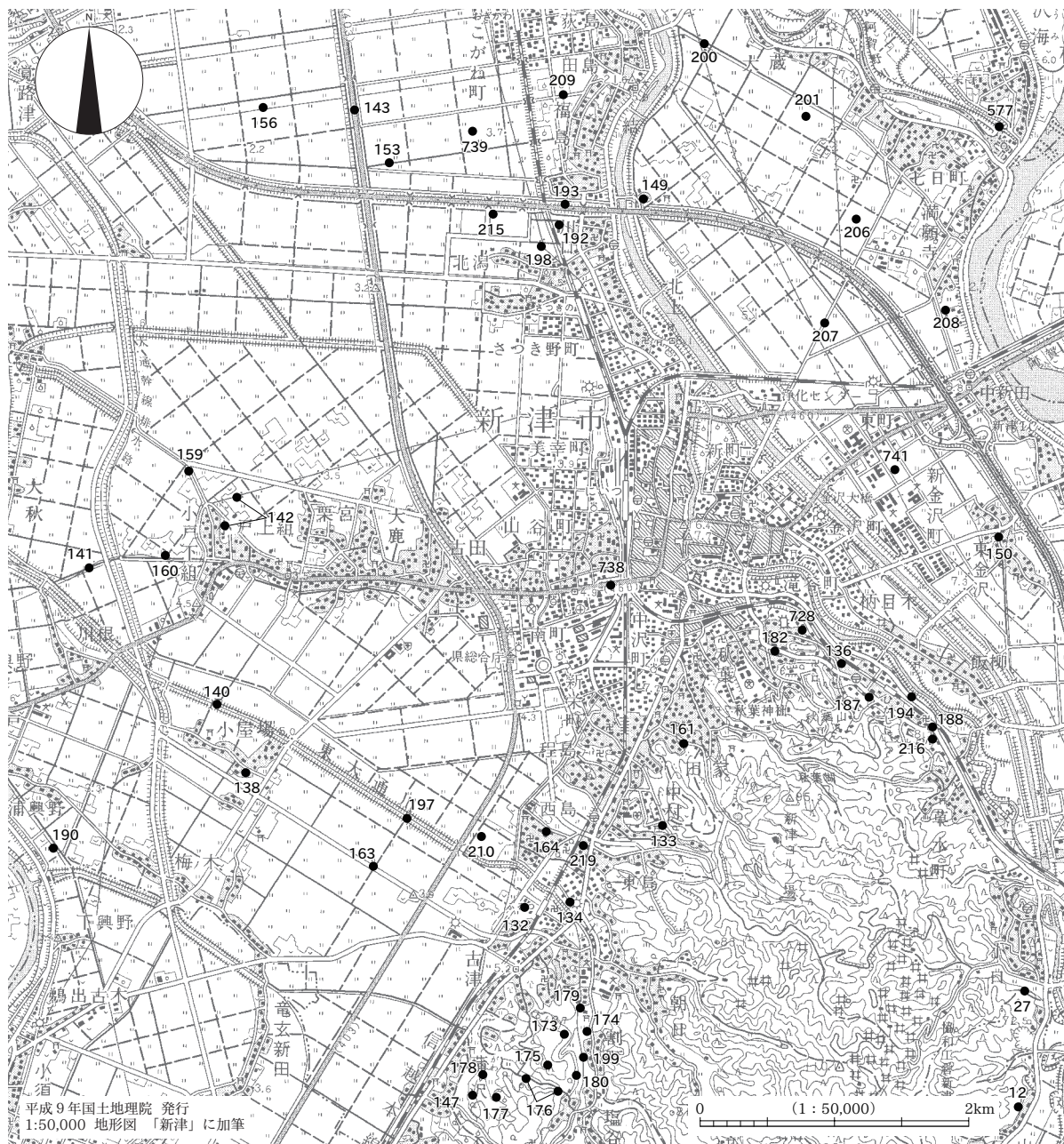
9世紀成立の『和名類聚抄』には越後国蒲原郡に日置・勇礼・桜井・青海・小伏の郷名が記載されている。新津・五泉地域には日置郷が所在したとされる〔井上^{ほか}2002〕が、決定的な証拠は見つかっていない。8世紀半ばに懇田永年私財法が制定されると、国衙や寺院・土豪などが農地開発に乗り出し、やがて初期荘園に発展していく。このような時代背景を反映してか、新潟平野全域で9世紀後半以降遺跡数が飛躍的に増加し始める。

新津丘陵周辺も状況は同じで、遺跡の分布は、丘陵縁辺から平野部の自然堤防が主体となってくる。これまでの調査例から、平野部の遺跡は水田耕作のほか、畑作や周辺の河川・湖沼での漁撈などを組み合わせた食料獲得手段を有していたようである。多くの遺跡は1世代程度で廃絶したと考えられるが、上浦A遺跡や沖ノ羽遺跡のような、複数の時期にわたり存続した遺跡も散見される。

丘陵部は生産活動の場として利用されるようになり、製鉄・製陶に関連する遺跡が丘陵の縁辺部に営まれる。製鉄関連遺跡は丘陵の西側縁辺に分布し、居村A～C遺跡・大入遺跡などから鉄の製錬炉および多数の木炭窯を検出している。また山崎窯跡・草水町2丁目窯跡・秋葉2丁目窯跡・七本松窯跡などの在り須恵器窯が8世紀後半から9世紀前半にかけて新津丘陵北東麓一帯で操業し、周辺地域に須恵器を供給している。丘陵部は、これら生産活動に伴う燃料や日常生活に使用する薪炭材の供給源の役割を果たしていたと思われ、この時期に丘陵の里山化が進んだと思われる。これまでの上浦A遺跡における調査で確認されている遺構・遺物の多くはこの時期である。

中世

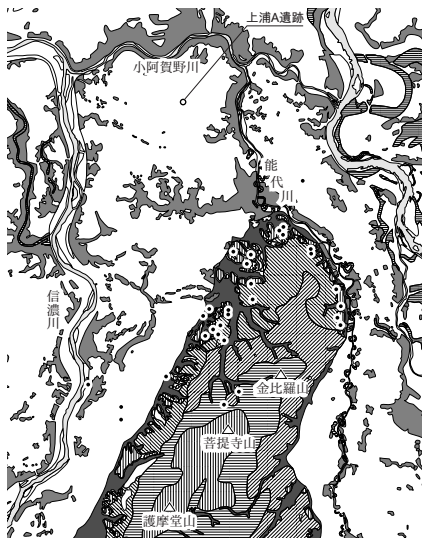
平安中期ごろから国・郡を単位とする支配体制が崩れ、荘園や国衙領による支配体制が成立する。新潟市周辺では弥彦荘・青海荘・菅名荘・金津保などの荘園・国衙領の存在が知られており、秋葉区は大部分が金津保に属していたとされる〔木村1989、井上^{ほか}2002〕。現在の地名が文献上で確認されるのもこの時期からで、12世紀



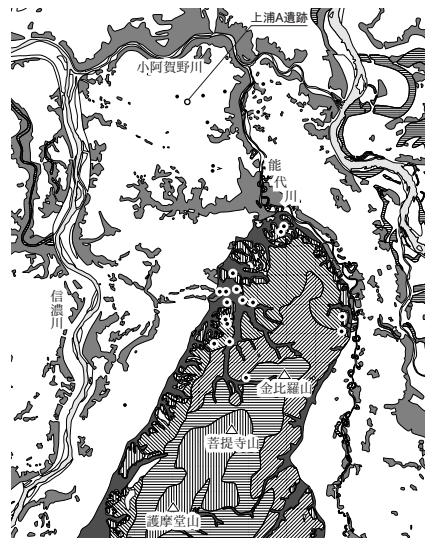
No.	名称	市町村	時代	種別	No.	名称	市町村	時代	種別
132	舟戸	新潟市	弥生・古墳・古代	遺物包含地	182	秋葉	新潟市	縄文・弥生・奈良・平安	遺物包含地
133	大坪	新潟市	古代	遺物包含地	187	滝谷窯跡	新潟市	平安	窯跡
134	塩辛	新潟市	弥生・古墳・古代・中世	遺物包含地	188	草水町2丁目窯跡	新潟市	旧石器・縄文・平安	窯跡
136	七本松窯跡群	新潟市	平安	窯跡	190	浦興野	新潟市	古代	遺物包含地
138	曾根	新潟市	平安・鎌倉	遺物包含地	192	川口甲	新潟市	平安	遺物包含地
140	下梅ノ木	新潟市	平安・鎌倉・南北朝	集落跡	193	江内	新潟市	平安・中世・江戸	遺物包含地
141	川根	新潟市	古代・中世	遺物包含地	194	草水町1丁目窯跡	新潟市	平安	窯跡
142	小戸下組	新潟市	平安・鎌倉・室町	遺物包含地	197	古通	新潟市	平安	遺物包含地
143	結	新潟市	古墳・奈良	遺物包含地	198	川口乙	新潟市	平安	遺物包含地
147	居村A	新潟市	平安	製鉄跡	199	金津初越B	新潟市	古代	遺物包含地
149	沖ノ羽	新潟市	古墳・古代・中世	集落跡	200	中谷内	新潟市	古墳・平安・中世	遺物包含地
150	西江浦	新潟市	平安	遺物包含地	201	内野	新潟市	平安・中世	遺物包含地
153	上浦A	新潟市	古代	遺物包含地	206	無頭	新潟市	平安	遺物包含地
156	長沼	新潟市	平安・鎌倉	遺物包含地	207	天下	新潟市	平安	遺物包含地
159	西沼	新潟市	平安	遺物包含地	208	中新田久保	新潟市	平安	遺物包含地
160	長左エ門沼	新潟市	平安	遺物包含地	209	結七島	新潟市	古墳・古代	遺物包含地
161	城見山	新潟市	縄文・古代・中世	遺物包含地	210	西島中谷内	新潟市	古代	遺物包含地
163	中郷	新潟市	平安	遺物包含地	215	上浦B	新潟市	古墳・古代	集落跡
164	桜大門	新潟市	平安	遺物包含地	216	愛宕澤	新潟市	縄文・平安・中世	遺物包含地
173	古津八幡山	新潟市	縄文・弥生・古墳・平安	集落跡	219	東島大道下	新潟市	古墳・古代・鎌倉・室町	遺物包含地
174	古津初越A	新潟市	古代	製鉄跡	577	居屋敷跡	新潟市	古墳・平安・鎌倉・室町・近世	集落跡
175	大入	新潟市	古代	製鉄跡	728	秋葉2丁目窯跡	新潟市	平安	窯跡
176	居村C	新潟市	縄文・弥生・古代	製鉄跡	738	菅免	新潟市	古代	遺物包含地
177	居村B	新潟市	弥生・古代	製鉄跡	739	中田	新潟市	古墳	遺物包含地
178	神田	新潟市	縄文・古代	遺物包含地	741	大野中	新潟市	縄文・平安	遺物包含地
179	古津初越B	新潟市	古代	製鉄跡	12	山崎窯跡	五泉市	奈良	窯跡
180	金津初越A	新潟市	古代	製鉄跡	27	小実山	五泉市	縄文・弥生・古代	遺物包含地

(新潟市・五泉市とも遺跡Noは新潟県遺跡台帳にもとづく)

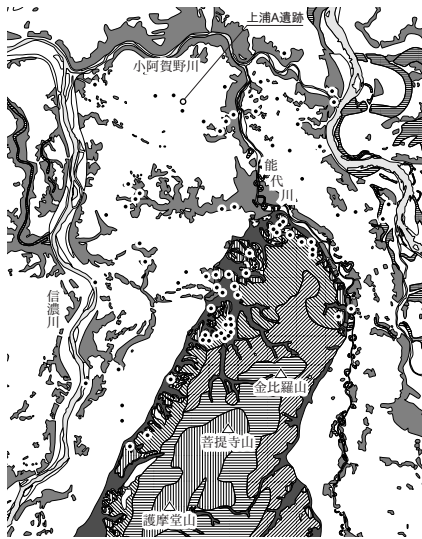
第3図 上浦A遺跡と周辺の古代遺跡分布(平成20年12月31日現在)



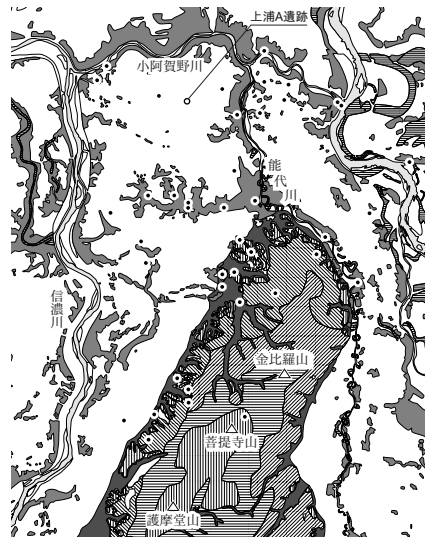
1. 旧石器・縄文時代



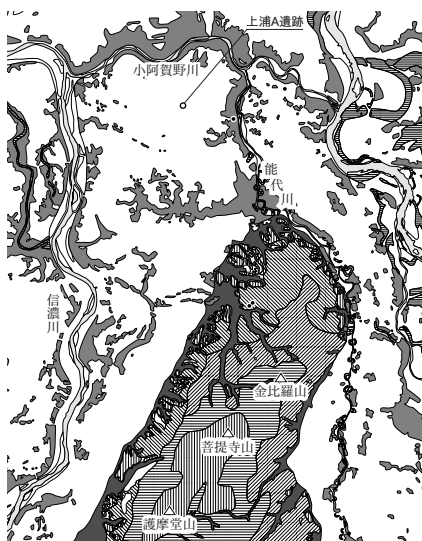
2. 弥生・古墳時代



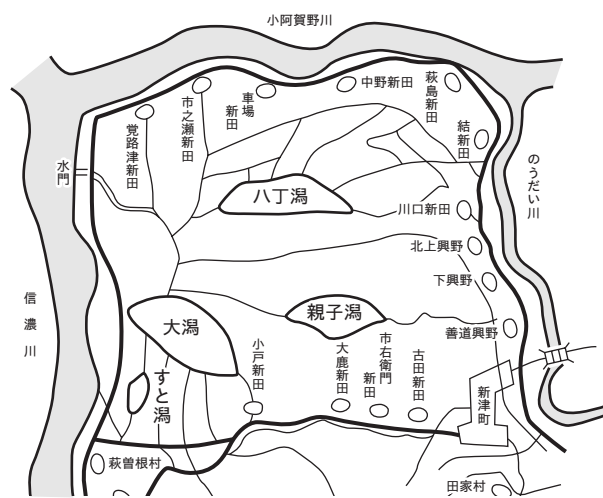
3. 古代 (奈良・平安)



4. 中世 (鎌倉～安土桃山)



5. 近世 (江戸)



6. 17世紀末～18世紀初頭の秋葉区北部

1～5 新潟県1975『土地分類基本調査 新潟・新津』をもとに作成 [1/200,000]
 6 元禄年間「新津・小須戸組絵図」〔木下1993〕をもとに作成。縮尺不同

第4図 秋葉区の時代別遺跡分布および近世地形絵図

には新津・金津、16世紀には新保・大沢・田家など現集落に通じる姓を名乗る人物が記録にあらわれている。

集落遺跡の多くは平野部の自然堤防もしくは砂丘に立地する。古代遺跡と複相をなすことも多く、古代から本格化した平野部での生活が完全に定着したことを物語る。秋葉区内では沖ノ羽遺跡・江内遺跡・内野遺跡などが集落跡と考えられている。また、阿賀野川左岸に位置する細池寺道上遺跡では縦横に走る大規模な溝や、圃場跡と思われる広範囲にわたる浅い掘り込みが確認されており、古代と比べ、より積極的に地形改変が見て取れる。

在地領主の勢力振興にともない城館や山城が出現するのもこの時期の特徴で、秋葉区内では新津城（山谷町）・大関館（大関）などが平野部の自然堤防上に、程島館（程島）・五本田館跡（矢代田）などが丘陵末端に立地している。山城跡とされる遺跡は金津城（金津）・東島城（東島）・西紙屋山城跡（天ヶ沢新田）であるが、いずれも本格的な調査はなされておらず、実態は不明である。戦時の籠城や街道の監視拠点としての機能があったとされる〔木村前掲〕。

上浦A遺跡における中世遺物の出土は少量であるが、第6次調査時に磐越自動車道北側で中世の遺物がまとめて採取されており、古代とは別の場所に中世集落の中心域が存在する可能性が指摘されている〔渡邊1992〕。

近世

中世末から近世初期にかけて低湿地の開拓が本格化し、元禄年間（1688～1704年）成立とされる「新津組・小須戸組絵図」には結・川口・荻島などの集落が記載されている（第5図）。また、村立ての時期は不明であるが、調査地西方の結遺跡周辺にはかつて七島集落・蓮田集落が存在したという〔木下前掲〕。

秋葉区は当初大半が新発田藩領で、それに幕府領・高田藩領・旗本領などが混在する状況にあった。領地替えにより新津市街が幕府領となるなど数回の領域変動を経ているが、遺跡周辺は近世を通じて新発田藩領に終始したようである。

16世紀半ば以降、能代川下流域では、取水のために複数の堰が設けられている。

これら利水設備の整備に伴って低湿地の開発が進められた結果、近世末には現在と大差ない景観となっていたと思われる（註3）。

新潟市内では中央区の近世新潟町跡（17～19世紀）・秋葉区の江内遺跡（17世紀）などが発掘調査され、近世集落が現市街地・集落と重複して存在することが判明している。また、先の七島・蓮田集落のように、災害や開発などで移転した集落も文献上で確認できることがあり、旧地形の復元や遺跡分布を推定する上での資料となり得る。



第5図 旧集落および周辺の主な小字名（現在）

1) 平成17年3月21日に周辺の12市町村と合併した新潟市は、同年10月に西蒲原郡巻町との合併を経て、平成19年4月1日より区制を敷き、政令指定都市に移行した。この結果人口約81万、市域は南北約34.9km、東西約42.4km、面積約726.1km²と、越後平野の3分の1強を占める市域を有するに至った。
 2) 緒立遺跡・的場遺跡〔渡邊ますみ1994、小池邦明ほか1993〕の調査により、新砂丘Ⅱについては、沖積面下に埋没していることが部分的ながら証明されている。
 3) 明治44年陸地測量部測図1/25,000地形図より

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘調査と工事立会

A 試掘調査(第6図)

調査地は当初遺跡の範囲外であったため、試掘調査として実施した(第13次調査)。調査は平成19年9月19日付けで新潟市長(秋葉区建設課)の依頼を受け、平成19年10月10日～16日までの6日間にわたって行った。掘削面積は工事予定面積11,000m²のうち162m²(全体の1.5%)である。改良予定の現道の北側は用水管が埋設されており調査不能であったため、南側のみに約20～40mおきに試掘坑36箇所を設定し、重機により深さ2mを目安に掘削して遺構・遺物の有無を調べた。

調査の結果9・13Tで平安時代の遺物(須恵器)が1点ずつ出土したものの、遺構は確認されず、遺跡が存在するとしてもきわめて希薄と思われたため、取扱いとしては、上浦A遺跡の範囲拡大の手続きをとり、工事立会に対応することとした。

B 工事立会(第6図 図版14)

試掘調査による範囲拡大にともない、工事区域の一部が周知の遺跡にかかることとなったため、文化財保護法94条に基づき新潟市長より通知されたものである。平成19年度にパイプ灌漑移設に係る通知(平成19年12月25日)、平成20年度に現道の改良工事に伴う通知(平成20年4月21日)がなされている。

工事の際に市職員が立会い、必要に応じて層位の記録および遺物の採取を行った。層位については記録場所および記録日時を、遺物については出土日時・地点・深さを記録している。遺物の出土は8～14T間に集中し、西半分については今回の本調査範囲と概ね一致していることから、遺物の分布は遺跡範囲をほぼ反映しているものと思われる。以下に、立会の概要を述べる。

1) 平成19年度

パイプ灌漑の移設にともなうもので、パイプ灌漑の移設後、コンクリートU字溝を設置する工事をあわせて行っている。立会は平成20年1月18日～2月29日まで実施した。古代の土師器・須恵器等あわせて71点が出土している。8・9Tおよび12～14T周辺で遺物の出土が集中している。出土した深さは地表面から90cm前後で、本調査における遺物包含層の深度に概ね該当することから、遺物の多くは包含層(Ⅲ層)出土と見てよい。本立会の結果により、本発掘調査を要する部分があることが判明し、今次調査の直接の発端となった。

2) 平成20年度

道路本体工事にともなうもので、6月24日～8月27日まで実施した。古代の土師器・須恵器等あわせて37点が出土している。分布は10～13T周辺に集中している。遺物の出土深度は地表面から概ね90cm前後と、平成19年度と共通し、遺物包含層であるⅢ層からの出土と推定される。

第2節 本発掘調査

A 調査方法

1) 現況(写真図版3)

現況は田面に盛土して路盤材を充填し、アスファルトで舗装した道路(市道)で、田面と50～70cm程度の

比高差がある。また、調査区の南北にはコンクリートU字溝による開渠が平成19年度に施工されている。なお、遺跡調査開始時までに表層のアスファルトは除去されており、着手前写真はこの状態で撮影している。標高は道路上面で海拔約3m、田面で海拔2.5m前後を測り、南東から北西方向にわずかな傾斜が見られる。

2) グリッドの設定 (図版5)

基準杭の打設は測量業者に委託した。世界測地系に基づきX座標202820.000、Y座標52900.00地点に設置した1A杭(北緯37度49分34秒5045、東経139度6分3秒3317)を基点に10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は1A杭から短軸(南北)をアラビア数字、長軸(東西)をアルファベットとし、この組合せにより表示した。大グリッドはさらに2m方眼の小グリッドに25分割され、大・小あわせて呼称される(例:4B7)。

3) 調査方法

①表土除去 試掘調査および工事立会結果により把握された層序と遺構確認面までの深さから、地表から遺構確認面までの深さはおおむね80～100cm程度で、包含層中の遺物量はかなり少ないことが予測された。そのため、遺物包含層を含めて除去し、遺構確認面まで一挙に掘り下げることとした。表土除去作業には0.25m³級の法面バケット装備の重機を用い、遺構確認面を露出させた後、その面を追って表土を除去していった。地表から1m近く深度をとるため、安全を考慮して外周壁面に10～20%の勾配をつけた。また、表土除去と平行して調査区内縁に沿って土側溝を設け、水中ポンプを設置して雨水・湧水の強制排水を行っている。

②遺構確認・掘削 遺構・遺物の検出は、人力によった。検出された遺構はプラン確認後、番号を付し、部分的に掘削して土層断面を記録後、完掘している。排土は調査区西端部に仮置きし、ある程度溜まった時点で重機により調査区外へ排出した。

③遺構実測 平・断面図・地形測量等は測量業者(株式会社トップライズ)に委託した。平面図と地形測量はトータルステーションを用いて作成したが、断面図は手取りによる。断面図の縮尺は1/20である。

④写真撮影 調査写真は主に35mmおよび6×7版のフィルムカメラで撮影し、適宜デジタルカメラを併用している。撮影対象は調査着手前・基本層序・遺構の断面および完掘状態を基本とし、状況に応じて作業風景・周辺地形など資料として必要と思われるものを撮影している。なお、全ての遺構が掘りあがった段階で調査区西側より高所作業車を用いて、遺跡全体の俯瞰写真を撮影した。

⑤遺物取上げ 遺構・包含層とも基本的に小グリッド単位で取上げている。取上げの際には遺構名・層位(もしくは出土した深さ)・日付等を併記している。なお、井戸出土の遺物については1点ごとに番号を付し、トータルステーションで出土位置を押さえた上で取上げている。

⑥自然科学分析 プラントオパール分析・花粉分析・樹種同定・種子同定を行った。

B 調査経過

平成20年10月15日より準備工を開始し、プレハブ・機材庫・発電機等を設置する。測量関係では基準点を打設した。翌16日に調査機材を搬入、17日から作業員を投入し、表土除去開始。並行して法面の仕上げと土側溝の掘削をおこない、要所に水中ポンプを設置して排水を始めた。表土の除去は23日に終了し、同日より遺構精査および大グリッド杭の打設を開始するが、この日以降雨天が続き、28日まで作業は中止となった。

遺構の掘削は作業が再開された28日より順次開始し、必要な記録を取りつつ、11月4日に全ての遺構を完掘した。全景写真は5日に撮影し、土壌サンプルを採取して撤収準備を始め、6日に撤収作業と並行して6箇所を試掘坑を設定して(図版8)下層の有無を調査し(確認されず)、遺構の掘り残しと測量もれをチェックした。同日中に全ての作業が終了し、諸事確認を終え、撤収を完了した。実働日数13.5日、最終調査面積は442.8m²であった。

C 調査体制

発掘調査体制は、以下のとおりである。

平成19年度 第13次調査（試掘調査）

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長 倉地一則）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 学芸員 相田泰臣
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長 山田光行）

平成20年度 第14次調査（本発掘調査）

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長 倉地一則）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 学芸員 潮田憲幸
調査員	新潟市埋蔵文化財センター 専門臨時職員 高野裕子
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長 山田光行）
整理補助	岩寄真由美 大倉智子 山田明美

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ（縦54.5cm×横33.6cm×高さ10.0cm）換算で9箱である。内訳は古代の土器が7箱、搬入礫1箱、炭化物・植物遺体等1箱である。

遺物整理は①洗浄、②注記、③器種分類、④グリッド・種別毎の重量計測、⑤遺構出土遺物の器種別重量・個体数計測、⑥接合、⑦報告書掲載遺物の抽出、⑧実測図・観察表の作成、⑨トレース、⑩版下作成の段階を経ている。このうち⑧遺物実測図までは整理補助員が作成し、⑨トレースおよび⑩版下作成は、業者に委託してデジタル編集した。

2) 遺構

平面図作成にあたっては、測量業者に委託した遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。遺構図版は測量業者が作成したものをデジタル編集した。

B 整理経過

遺物量が少ないため、洗浄・注記は発掘作業中に終了している。遺物計測・集計は撤収後の平成20年11月中旬から実施し、11月下旬から12月上旬にかけて接合・復元作業、12月中旬から平成21年1月にかけて遺物の実測を行っている。この間、測量業者に委託した図面類の校正作業も行いつつ、2月に報告書掲載用の遺物写真を撮影し、図版レイアウト・原稿執筆等を経て平成21年3月に編集作業を終了、平成21年度に報告書を刊行し、全ての業務を終了した。

C 整理体制

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長 倉地一則）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター 学芸員 潮田憲幸
調査員	新潟市埋蔵文化財センター 専門臨時職員 高野裕子
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長 山田光行）
整理補助	岩寄真由美 大倉智子 山田明美

第Ⅳ章 遺 跡

第 1 節 概 要

遺構は、11 基検出されており、時期は平安時代と近代以降のものがある。

遺物は、平安時代の須恵器・土師器と遺構出土の礫・有機物からなる。須恵器は新津産・佐渡産・阿賀北産が混在するが、遺構からは佐渡産と阿賀北産のみが出土している。

第 2 節 層 序 (図版 8 写真図版 4)

遺跡の土壌はシルトを基質とする水成堆積土である。表層部分は盛土や水田耕作による攪乱・変質が激しいが、Ⅲ層以下は上部を攪乱されつつも概ねプライマリーな状態を保っている。洪水砂の貫入やラミナ状堆積は見られず、一定の厚さを有する腐植層(Ⅲ層)が形成されているため、遺跡周辺は元々自然堤防のような陸化した沖積地形の一部で、冠水頻度の少ない安定した環境にあったと思われる。

基本層序は 7 層に分類した。分層にあたっては、土質(構成粒子・粘性・しまり)・色調および混入物を主な比較項目としている。Ⅰ層は砂利・碎石を主体とする盛土、Ⅱ層は旧水田耕作土、Ⅲ層が平安時代の遺物包含層、Ⅳ層が平安時代の遺構確認面である。基本層序の詳細について、以下に述べる。

- Ⅰ層 碎石および山砂の混層で、道路造成による盛土。
- Ⅱ層 灰・黒褐色系の粘質シルトで、粘性・しまりが強い。Ⅱ a 層が現代水田の耕土である。SD12 のみ本層から掘り込まれる。
- Ⅱ a 層 黄灰色粘質シルト (2.5Y4/1)。水田耕作土で、粘性・しまり共に強い。人工土壌であるが本来の土質はⅡ b 層に近いものと思われ、色調・混入物も共通する。長く水田として利用されていたこともあり、やや還元質である。炭化粒と褐鉄鉱を含む。
- Ⅱ b 層 黒褐色粘質シルト(N2/0)。7H・7I グリッドで確認される。粘性の強いシルト層。炭化粒を多く含み、Ⅱ a 層による削平・攪乱を受けている。Ⅱ a 層は本層と質的にほぼ同一である。遺物の出土はない。
- Ⅲ層 腐植質シルト層で、灰褐色～黒色を呈する。土質・色調の違いにより 2 層に分かれる。両者とも平安時代の遺物包含層だが、遺物の多くはⅢ b 層から出土する。
- Ⅲ a 層 黄灰色粘質シルト (2.5Y4/1)。粘性・しまりの強い腐植性の土壌。場所によって攪乱されていることがある。Ⅱ層と同様炭化物・褐鉄鉱を含むが、炭化物の量が多くなっている。平安時代の遺物を若干含む。イネ花粉を多量に含み、水田耕作面であった可能性が高い。
- Ⅲ b 層 黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1)。粘性・しまりの強い腐植性土壌。基本層序④～⑥では上部が削平されている。土質はⅢ a 層と同様だが、未分解の植物遺体をより多く含む。炭化粒・褐鉄鉱を含むが、Ⅲ a 層に比べ炭化物は少なくなる。層厚は薄く、不安定で、Ⅳ層との境界は植生もしくは耕作により荒れており、判然としない。イネ花粉を含むが、Ⅲ a 層と比べ量は少ない。平安時代の遺物包含層である。
- Ⅳ層 黄灰色の細砂 (2.5Y5/1) からなるが、調査区中央部ではシルト質となる。比較的安定しており、30～40cm の厚さがある。上部はⅢ b 層が斑状に入り込むなど、層の荒れが見られる。平安時代の遺構確認面である。

V層 試掘調査およびサブトレンチで確認された層。灰白色の細砂(7.5Y7/1)からなる。所々に細砂・シルトの貫入が見られ、湧水が激しい。井戸は本層まで掘削される。

第3節 遺 構 (図版6・9～11 写真図版4～7)

遺構は井戸1基、土坑2基、溝2条、性格不明遺構6基の計11基が確認されている(別表1)。全体として平面形状が不整形なものが多い。遺構配置に目立った偏りはないが、調査面積が狭小であるため、遺構の粗密云々について判断できる状況にない。遺構確認面はⅡ層、Ⅲb層、Ⅳ層があるが、古代の遺構はⅢb層以下で確認される(註1)。

遺構の覆土については、自然堆積によるもの(A類)と、意図的な埋め戻しによるもの(B類)に分類し、観察表に記載している。

遺物は、SE7でまとまった量の出土があるが、それ以外は多くが破片である。

A 平安時代の遺構

1) 井 戸 (SE)

地下水を利用する目的で掘削されたと思われる竪穴を井戸とした。1基検出されている。

SE7 (図版9 写真図版5)

6I11・12・16・17に位置する。検出面はⅣ層上面である。平面は楕円形を呈し、上端で長軸277cm×短軸210cm、断面は漏斗形で確認面からの深さ95cmを測る。覆土は10層に分かれる。9層までは播鉢状を呈しており、その下に水溜と思われる筒形の掘込みがある。透水層はⅤ層下部で、砂質土壌と湧水により側壁の支持力が非常に弱い。形状から水溜部に曲物が設置されていたと思われ、廃棄時に引き抜いた際に周囲より流出した土砂で10層が一気に埋没したと思われる。その上部の堆積はレンズ状を呈するが、覆土には炭化物やⅣ層が粒状に混入し、埋堆積に人為性が窺われる。覆土はB類である。

覆土中からは平安時代の遺物(図版12 1～6)が出土している。

2) 溝状遺構 (SD)

用排水・区画等を目的とした溝と思われる遺構を、溝状遺構とした。1条検出されている。

SD13 (図版11 写真図版7)

7F15・7G11～13に位置し、Ⅲb層上面で検出される。主軸は概ね北を向き、幅は上端で推定134cmである。断面は皿状を呈する。確認面からの深さは23cmだが、掘込みからの深さは32cmである。覆土はA類で、4層に分かれ、自然堆積の様相を呈する。土師器無台椀(10)・小甕の破片が出土している。1・2・4層から土壌サンプルを採取している。

3) 土 坑 (SK)

SK2 (図版9 写真図版4)

6J21に位置する。検出面はⅣ層上面である。平面は楕円形を呈し、上端で長軸46cm×短軸38cmを測る。断面は皿形で確認面からの深さは6cm、覆土は単層でB類である。遺物は出土していない。

SK4 (図版9 写真図版4)

6I13・18に位置し、Ⅳ層上面で検出される。北端部が暗渠工事により攪乱されている。平面は不整な楕円形を呈し、上端で長軸62cm×短軸推定54cm、断面形は皿形で確認面からの深さ9cmを測る。覆土はB類・単層である。遺物の出土はない。

4) 性格不明遺構 (SX)

平面・断面形が不整形なものを一括した。

SX3 (図版9 写真図版4)

6I20・25、6J16・21に位置する。検出面はIV層上面である。南側がヒューム管により攪乱されている。平・断面とも不整形で、長・短軸は計測不能である。確認面からの深さは48cmを測る。覆土は単層でB類、ヒューム管による攪乱が見られる。掘り方を含め全体に不整形で、植生痕の可能性もある。遺物は出土していない。

SX5 (図版9 写真図版5)

6I13・14に位置し、IV層上面で確認される。平・断面ともに不整形で、上端で長軸104cm×短軸94cm、確認面からの深さ10cmを測る。覆土は単層・B類である。遺物は出土していない。

SX8 (図版10 写真図版6)

7I2・3・7・8に位置する。確認面はIV層上面である。調査区外にかかるため、正確な平面形状は不明である。断面は皿形を呈し、確認面からの深さ12cmを測る(遺構掘込みからの本来の深さは16cm)。覆土はA類で、3層に分かれる。1層から土師器無台碗(9)が出土している。

SX9 (図版10 写真図版6)

6H13・18・23に位置し、中央部を暗渠管に攪乱されている。確認面はIV層である。平面は不整な楕円形を呈し、長軸224cm×短軸144cm、断面は不整な皿形で、確認面からの深さは47cmである。覆土は単層・B類で、遺物は須恵器長頸壺、土師器無台碗および長甕の破片が出土している。

SX10 (図版10 写真図版6)

6H17・22・23、7H2・3に位置し、IV層上面で確認される。平面は不整形を呈し、長軸445cm×短軸166cm、断面は逆台形を呈し、底面は平坦化する。確認面からの深さは62cmである。覆土はB類で、7層に分かれる。遺物の出土はない。

SX11 (図版10 写真図版6・7)

6G20・25に位置し、SD12に隣接する。確認面はIV層上面である。平面は長軸168cm×短軸推定156cmの不整形である。断面は不整な皿形で凸凹に荒れており、確認面からの深さは9cmを測る。覆土はB類・単層で、遺物の出土はない。

B 近代の遺構

1基検出されている(SD12)。時期の判断は、昭和初期作成の地籍図、明治44年測量の1/25,000・1/50,000地形図で水路として記載されていること(図版1)を根拠とするが、新発田藩が元禄年間に作成した『新津・小須戸組絵図』には、能代川より導水して八丁潟に注ぐ水路が何本か描かれている(第4図6)。同絵図中にSD12に該当する水路は確認できないが、この付近の水路が近世より機能していた可能性は高い。これらは耕地整理にともない埋め戻されたと思われるが、航空写真では水路跡が現在でも明瞭に確認できる(写真図版1)。

SD12 (図版10・11 写真図版7)

6G17～19、23～25、6H21、7G4・5・9・10、7H1・2・6・7・11・12に位置する。II層中での掘込みが確認されており、下部で2条の溝に分かれる。幅は上端で324cmを測り、深さは確認面で49cmだが、掘込みからの深さは97cmである。底部の2条の溝はそれぞれ深さと水流方向に差異があり、東側は比較的平坦だが、西側は南から北に向かって30cm以上の傾斜がある。覆土はB類で、13層に分かれる。上部(1～4層)と下部(5～11層)で土質に違いがあり、前者は転圧を受けたように良くしまっているが、後者は湛水状態で直接埋め戻したと思われる、軟弱である。覆土中の混入品であるが、1層出土の須恵器有台杯2点を図示している(図版12-7,8)。

1) 多くの遺構はIV層上面で確認されるが、基本層序壁面にかかる遺構の観察から、掘込み自体はIII層中からなされているようである。

第V章 遺物

第1節 遺物の概要

A 第14次調査出土分（図版12・13 写真図版8～12）

出土遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）9箱である。うち7箱が平安時代の須恵器・土師器であり、搬入礫・有機遺物がそれぞれ1箱を数える。重量換算で土器が216点2,585.6g、搬入礫は12点4,234.7gである。土器はほとんどが破片で、遺構出土が19点1,137.5g（須恵器6点720.4g、土師器13点417.1g）、包含層178点1,448.1g（須恵器19点518.3g、土師器178点929.8g）となり、両者の重量比はおおむね44：56となる。須恵器には新津産・佐渡小泊産・阿賀北（笹神）産が存在する。

遺物は6H南東から6Kにかけて多く分布し、特に集中するのは6H・6I間と、6Jグリッドである。地形がやや低くなる6H・7Hグリッド西部から目立って少なくなる。

遺構での出土はSE7に集中し、他の遺構は少数の破片の出土にとどまる。また、SD12は近代の遺構であるため、本構出土の資料（7・8）は混入品である。

包含層の遺物量も希薄だが、7G2グリッドで完形の土師器無台椀1点が逆位で出土しているのが特筆される。

B 工事立会の遺物（図版13 写真図版9～11）

工事立会において出土した遺物を、参考資料として掲載した。出土地点は第6図および図版14に示したが、グリッドに反映しえるものについては重量を計測し、その合計をトーンで表現している。ただし、全点の出土を詳細には記録していないので、あくまで目安として捉えていただきたい。

工事立会遺物は平成19・20年度あわせて108点出土しているが（第Ⅲ章）、陶磁器等を除く古代の土器は土師器72点543g、須恵器11点350gの合計83点893gとなる。

出土層位は多くが地表下50～90cmの黒色土中であるが、これは基本層序Ⅲ層にあたるものと思われ、遺物の多くは包含層出土と推定される。遺物の分布は6I・6J・7I・7Jグリッド付近に多く、概ね調査区と対応して分布している。

第2節 分類および用語の説明

遺物の記述で使用する成形・調整技法および胎土の分類・用語について、以下のとおり規定する。なお、器種分類については、出土点数が少なく細かな器種分類をなしえないことから、分類図等は作成せず、観察表のみの記載とした。

1) 成形・調整

- 1：ロクロ・回転台を使った撫でを「ロクロナデ」、ロクロ・回転台を使わない撫でを「ナデ」とする。
- 2：ロクロ・回転台を使った削りを「ロクロケズリ」、ロクロ・回転台を使わない削りを「ケズリ」とする。
- 3：ロクロ・回転台を使ったハケ目を「カキメ」、ロクロ・回転台を使わないハケ目を「ハケメ」とする。
- 4：ロクロ・回転台等を使った磨きを「ロクロミガキ」、ロクロ・回転台を使わず磨いたものを「ミガキ」とする。
- 5：土器の外面に残る叩きの痕跡を「タタキメ」、内面に残る当て具の痕跡を「当て具痕」とする。当遺跡では同心円と平行線状のものが見られる。

6：底部切離しについて、糸によるものを「糸切り」、ヘラによるものを「ヘラ切り」とした。いずれもロクロの回転を利用したものである。

2) 胎土

肉眼観察の結果、質・混和材・色調等について共通するものをまとめ、類型化した。産地や器種・用途により質の違いが見られる。

A類：佐渡小泊産須恵器と思われる一群である。胎土の質と混入物の違いにより2分した。

A1：還元炎焼成され、灰色～青灰色を呈する。精良で白色小粒子を多く含み、黒色の斑点、吹き出しが見られる。食膳具に多い傾向がある。

A2：A1類と胎土の質を同じくするが、多量の石英・長石により砂質を呈するもの。貯蔵具に多い傾向がある。

B類：新津丘陵産と思われる須恵器群である。胎土は精良で粘土質が強く、石英・長石等の小粒子を含み、焼き上りは硬質感がある。還元炎焼成が一般的だが、無台杯を中心に酸化炎焼成品が定量ある。焼成状態で2分した。

B1：還元炎焼成のもの。独特の硬質感がある。

B2：酸化炎焼成のもの。土師器に近く、軟質である。

C類：阿賀北（笹神）産と思われるもの。酸化炎焼成で暗灰黄色を呈する。胎土はかなり粗く、粒の大きい石英・長石が混和材として入る。SE7および工事立会で出土しているが、土器全体に占める割合は少ない。焼成により2分した。

C1：還元炎焼成に近いもの。甕（1）、無台杯（34）がある。

C2：酸化炎焼成の「土師器」。鍋（6）がある。

D類：明褐色を呈する土師器である。非常に密で粘土質の胎土に特徴がある。混和材の量と大きさとで2分した。

D1：酸化炎焼成で明褐色系の色調を呈する。胎土は精良で粒子は非常に細かく、粘性がある。混和材として石英・長石・雲母等を含むが、粒は極小で、量も少ない。強度は弱く、風化により粉っぽくなる。土師器無台碗に多く見られる。

D2：酸化炎焼成で明灰白色系の色調を呈する。精良・粘質でD1類の胎土を基本とする。混和材もD1類と同様だが、粒が大きく、量も多いため、砂質でざらついた印象を受ける。比較的強度があり、風化もD1類ほど顕著でない。長甕・小甕等に多い傾向がある。

E類：酸化炎焼成で赤褐色系の色調を呈する。胎土はやや砂質であるが精良で、焼き上がりは硬質感がある。極小粒の角閃石を多く含むため、ざらつく触感がある。

F類：酸化炎焼成で橙褐色系の色調を呈するが、焼成はかなり悪い。胎土も粗く、雲母・角閃石・焼土粒の混入が目立ち、ざらざらした質感で風化が進む。食膳具・煮炊具ともに見られる。

第3節 出土遺物

遺構・包含層・立会の順で出土遺物の概要を述べる。詳細項目については別表3を参照されたい。

A 遺構出土土器（図版12 写真図版8・10・11）

SE7（図版12 写真図版8・10・11）

須恵器大甕（1・2）、土師器無台碗（3・4）、小甕（5）、鍋（6）が出土している。遺物は6・10層に集中し、6層では須恵器（1・2）が、10層では土師器がまとまって出土している。

1は大甕の頸部～胴部上半の破片で、口縁部が打ち欠かされている。出土層位は6層である。やや青みがかかった酸化炎焼成で、触感は土師器に近い。胎土はC1類でかなり粗く、混和材の粒度も大きい。外面には平行タタキ

目、内面には同心円当て具痕が残るが、明瞭でない。北陸系の須恵器製作技法によるが、全体的に粗雑な印象を受ける。阿賀北（笹神）産と思われる製品である。

2は須恵器大甕の胴部破片で、6層出土のものである。胎土はA2類である。外面は格子状の平行タタキ目と中央部のミガキ、内面の当て具痕は下半の平行当て具痕・上半の同心円状当て具痕に分かれる。やや焼成が粗いが、胎土の特徴から、佐渡小泊産と思われる。

3は墨書されたほぼ完形の土師器無台椀で、10層下部で4～6と共に出土した。体部中ほどに逆位で「宅」と墨書されている。「宅」の上にも墨書されているようにも見えるが判然としない。器高指数34.7、底径指数は44.4で、出土した無台椀の中では最も口径に比して器高があり、底径が小さい個体である。胎土はF類で、内外面の調整はロクロナデ、底部には糸切痕が残る。底部切離し時の回転方向は右である。

4は口縁～底部にかけての破片で、井戸底（10層）出土である。外面全体にタール状の物質が付着している。推定値であるが、器高指数30.0、底径指数47.6で、3と比べやや平べったい形状である。胎土はE類で、内外面ともロクロナデ調整され、底部に糸切痕が残る。切離し時の回転方向は左である。外面のタールは焼成後、製品となって以降に付着させたもので、黒色土器のように製作段階で黒色処理したものではない。

5は小甕の口縁部～胴部上半にかけての破片で、3・4・6同様10層出土のものである。胎土はE類で、内・外面ともロクロナデで調整される。

6は鍋の胴部下半で、10層最下部で出土している。外面はタタキ後にナデ調整され、内面は平行当て具痕が残る。タタキ具と当て具は同じものを使用しているようである。胎土はC2類で、阿賀北（笹神）産と思われる。

SX8（図版12 写真図版8）

1層から土師器無台椀（9）が出土している。9は口縁の破片で、口縁よりやや下に緩やかな稜を有する。胎土はE類、口径は13cm前後と思われる。

SD12（図版12 写真図版8）

1層から須恵器有台杯2点（7・8）が出土している。共に口縁部から胴部にかけての破片で、内・外面はロクロナデで調整されている。いずれも新津産と思われ、7は胎土B1類、口径は推定13cm、8は胎土B2類、口径推定13.5cmとなる。SD12が近代の遺構であるため、埋め戻しの際の混入品の可能性がある。

SD13（図版12 写真図版8）

2層から土師器無台椀（10）が出土している。胎土はE類で、内・外面はロクロナデで調整される。

B 包含層出土土器（図版12 写真図版8・10・11）

1) 須恵器

無台杯・杯蓋・広口壺・横瓶が出土しているが、全て破片である。いずれも佐渡小泊産と思われる。

無台杯（11・12）

11は口縁～底部にかけての破片で、Ⅲb層からの出土である。復元値であるが、器高指数は25.0、底径指数は58.3と、平べったく、口径に比して底径が大きい。胎土はB1類で、内・外面はロクロナデで調整される。底部の残存率が低いため、切離し技法は不明であるが、おそらくヘラ切りと思われる。

12はⅢb層出土の底部破片である。胎土はA1類で、ロクロナデで調整される。底部の切離しはヘラ切りだが、残存率が低く、回転方向は不明である。

杯蓋（13）

Ⅲb層から1点出土している。破片のみであり、正確な径は不明である。胎土はA1類で、内・外面はロクロナデされている。

広口壺（14）

Ⅲb層から1点出土している。頸部の根元の破片で、胎土はA2類である。内・外面はロクロナデで調整される。

横瓶 (15)

Ⅲ b 層出土である。胴部側面の閉塞部の破片で、外面と断面で閉塞円盤の一部が確認できる。外面は閉塞後に入念なナデ調整が行われたようで、成形痕である平行タタキメがわずかに残るに過ぎない。内面は、閉塞後に円盤部分を指で圧着させたと思われる放射状の指頭痕が見られ、同心円の当て具痕を切っている。胎土は A2 類である。

2) 土師器

無台椀 (16～19) 他の器種と比べて数量・残存状況は良い。完形品を含め 4 点を図示した。いずれもⅢ b 層からの出土である。16 はほぼ完形で、口縁部をⅣ層上面に接し、逆位で出土している。器高指数 29.6、底径指数 39.2 と、器高が低く、口径に比して底径が小さい。内・外面はロクロナデされるが、底部と縁辺がケズリにより調整される。切離し技法は不明。底部のケズリは左方向に回転させながら行っている。胎土は D1 類で、器壁は薄い。

17 は口縁の一部と底部下半の残存である。復元値を元にするが、器高指数 28.9、底径指数 51.4 と、口径に比し、底径が大きい。内外面ともロクロナデにより調整される。底面には糸切痕が残り、切離し時の回転方向は右、胎土は D1 類である。

18・19 はそれぞれ口縁と底部の破片である。18 の胎土は F 類で、土師器の椀にしてはかなり粗い。内・外面はロクロナデにより調整される。19 は底径推定 6cm で、底部はケズリ後にナデ調整されている。胎土は D2 類であるが、やや粗い印象を受ける。

長甕 (20～22) 破片が多い。辛うじて判別できる 3 点を図示した。いずれもⅢ b 層からの出土で、口径は 21cm 前後である。20・21 は、口縁部の破片で、口径は推定 21cm 前後になる。口縁端部がやや内傾し、頸部が「く」字状に屈曲するタイプと思われる。21 のみ口縁端部がつまみ上げられる。胎土は D2 類である。22 は口縁部が緩やかに開くタイプで、口径 22cm、胎土は D2 類である。

小甕 (23～25) 底部のみ出土している。Ⅲ b 層出土の 3 点を図示した。23 は推定底径 6.0cm で、体部は底面から緩やかに立ち上がる。体部外面と内面の調整はロクロナデ、底部はケズリ後にナデ調整を行っている。胎土は E 類で、形状を含め、他の個体と差異がある。24・25 は底径約 7cm で、胎土は D2 類である。25 のみ底部に糸切り痕が確認できる。胎土・底径・体部の立ち上がりの角度に共通点が見られるため、同一時期の可能性が考えられる。25 の内面は被熱により赤化している。

鍋 (26) 包含層出土遺物で鍋と判断しえたのは本品のみである。推定口径は 38cm で、口縁端部は有段の玉縁状になる。内・外面ともロクロナデで調整がなされるが、稜が明瞭に作出されるのが特徴的である。胎土は D2 類だが、混和材の粒度が大きく、粗雑な感じを受ける。出土層位はⅢ b 層である。

C 搬入礫 (図版 13 写真図版 9)

SE7・SE12 から合計 12 点出土しているが、古代の遺物は SE7 出土分のみである。土器と共に一括廃棄されたものを中心に 4 点を掲載した。27・29 が 6 層、30 が 10 層で、それぞれ土器と共伴している。28 は 2 層からの単独出土である。いずれも SE7 の廃棄と何らかの関係が想定されるものである。

27 は棒状の安山岩で、6 層から出土した。須恵器 (5・6) と共伴する。表面が被熱し、広範囲にススが付着する。裏面は一部破碎されるが、特に使用痕は観察されない。

28 は 2 層から単独で出土している。石材は黒色の頁岩で、周囲に剥離面を有し、残核状を呈する。

29 は棒状の流紋岩破片で、使用痕・被熱痕は見られないが、長軸中ほどから短軸方向に折断されているような印象を受ける。6 層出土で、須恵器 (5・6) と共伴している。

30 は被熱した流紋岩質凝灰岩で、10 層から出土した土師器 (1～4) と共伴する。被熱により全面が劣化し、剥落が激しい。使用痕等の有無は不明である。

D 有機遺物 (写真図版 12)

ヒョウタン (写真図版 12) SE7 の 10 層から出土しており、無台椀 1・2 等と共伴する。残存不良により図示していないが、釣瓶の可能性もある。

また、6 層では炭化したケヤキの破片が定量出土している。図示はしていないが、自然科学分析を行っている。

E 工事立会出土遺物 (図版 13 写真図版 9・10・11)

平成 19・20 年度出土分をまとめて掲載した。須恵器には新津産と佐渡小泊産があり、土師器にも比較的新しい様相が見られる等、複数の時期が混在する。

出土層位は多くが地表下 50～90cm の黒色土中であるが、これは基本層序Ⅲ層にあたるものと思われ、多くは包含層の出土と推定される。

1) 須恵器

無台杯 (31～34) 4 点を図示した。表採品の 33 以外はⅢ層出土である。31 は口縁～底部破片で、推定値を元にするが、器高指数 24.6、底径指数 67.2 と、器高が低く、口径に比し底径の割合が高い。器厚は薄く、体部は直線的に立ち上がる。胎土は A1 類である。底部の切離しはヘラ切りによるが、残存率が低く、切離し時の回転方向は不明である。32～33 は酸化炎焼成の須恵器で、胎土は B2 類である。32 は口縁から底部にかけての破片で、推定値を元にするが、器高指数 28.3、底径指数は 66.7 で、31 と比べ腰高な器形となる。器壁は 31 と比べ厚く、ぼつりとした印象がある。底部の切離しはヘラ切りによる。回転方向は左である。33 は表採品で、底部のみの残存である。底径・厚さ・焼成が共通するため、33 と同様の個体と思われるが、底部のヘラ切り痕は右回転と逆になる。34 は阿賀北 (笹神) 産と思われる製品 (胎土 C1) で、器壁が薄く、内外面ともロクロナデで調整される。底部ヘラ切り痕は左回転を示す。

杯蓋 (35)・長頸壺 (36)・大甕 (37) いずれも破片資料である。杯蓋 (36) は、破片が 1 点出土している。端部を欠損しており径は不明。胎土は A1 類である。36 は長頸壺の肩部破片で、胎土は A1 類である。37 は立会中に周辺の水田で表採された大甕の胴部破片である。外面に平行タタキメと沈線状に残るタタキメ跡、内面に同心円当て具痕が残る。胎土は A2 類である。

2) 土師器

無台椀 (38・39) 38 は口縁部破片で、胎土は D1 類である。器壁は薄く、復元径は 14cm を示す。39 は著しく粗雑なつくりの底部破片で、胎土が粗く (F 類)、器壁が非常に薄い。復元底径は 5cm で、掲載個体の中では最も径が小さい。底部をのぞく外面および内面はロクロナデで調整され、底部には風化しているが糸切り痕が観察される。切離し時の回転方向は不明である。

長甕 (40・41)・鍋 (42)

多くが破片状態で出土している。形状が判別可能な 3 点を図示した。40・41 は口縁部破片である。40 は口縁の開きが弱い。端部は球状になり、内面に稜を形成し、外面の口縁直下にカキメを有する。41 は頸部が「く」字状に開くもので、端部は上方につまみ上げられる。口径は、両個体とも約 20cm、胎土は D1 類である。

42 は復元値で 38cm の口径を有する鍋の口縁部破片である。口端部はわずかに上方につまみ上げられ、稜が明瞭である。胎土は D2 類である。

第VI章 自然科学分析

第1節 プラントオパール分析

土壌などに含まれる植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO₂）が蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラントオパール）となって土壌中に半永久的に残存する。プラントオパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡（稲作跡）の検証や探査が可能である〔杉山 2000〕。

A 試料

分析試料は、基本層序⑥のⅢ a 層（黄灰色粘質シルト）、Ⅲ b 層（黒褐色粘質シルト）、Ⅳ層（黄灰色粘質シルト）、および SD13 のⅢ b 層（黒褐色粘質シルト）、2 層（黒色粘質シルト）、4 層（黄灰色粘質シルト）から発掘調査担当者により採取された計 6 点である。

B 分析方法

プラントオパール分析は、ガラスビーズ法〔藤原 1976〕を用いて、次の手順で行った。

1. 試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）。
2. 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）。
3. 電気炉灰化法（550℃・6 時間）による脱有機物処理。
4. 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散。
5. 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去。
6. 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成。
7. 検鏡・計数。

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラントオパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラントオパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中のプラントオパール個数を求めた。

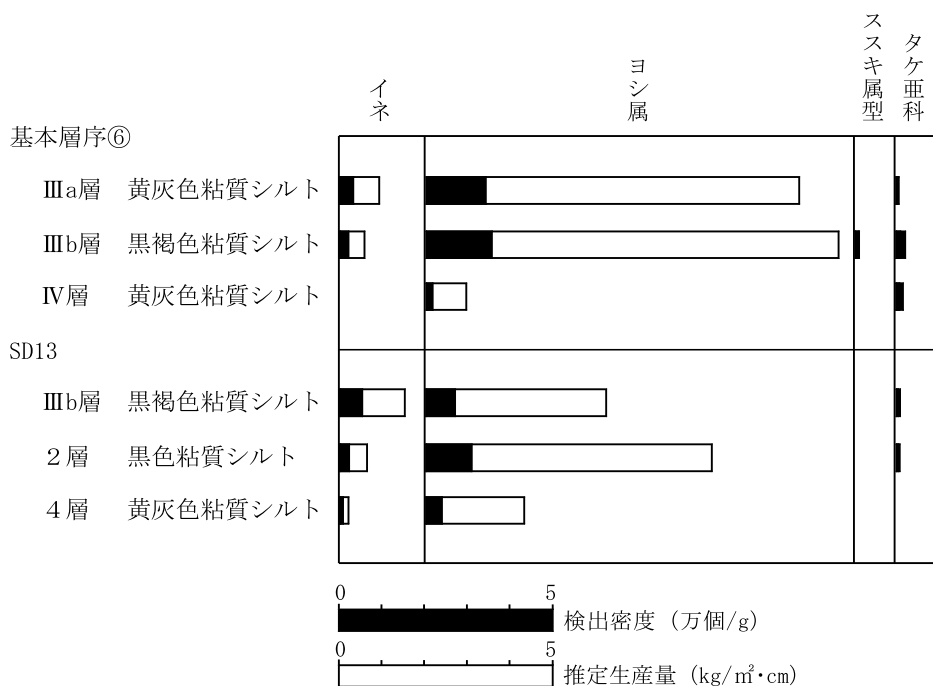
第 2 表 上浦 A 遺跡におけるプラントオパール分析結果

検出密度（単位：× 100 個 / g）

分類群	地点・試料 学名	基本層序⑥			SD13		
		Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ	Ⅲ b	2 層	4 層
イネ	<i>Oryza sativa</i>	32	20		53	22	8
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	141	156	15	68	108	37
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		7				
タケ亜科	Bambusoideae	6	20	15	8	7	

推定生産量（単位：kg / m²・cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.94	0.60		1.55	0.64	0.22
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	8.92	9.83	0.95	4.26	6.82	2.36
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		0.08				
タケ亜科	Bambusoideae	0.03	0.01	0.07	0.04	0.03	



第7図 上浦A遺跡におけるプラントオパール分析結果

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる〔杉山2000〕。

C 分析結果 (第2表 第7・9図)

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第2表および第7図に示した。また第9図に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

基本層序⑥ではIII a・III b層から、SD13覆土では2・4層およびその周辺のIII b層からイネが検出されている。

第2節 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

A 試料

分析試料は、基本層序⑥およびSD13の2地点から発掘調査担当者により採取された計6点である。

B 分析方法

花粉の分離抽出は、〔中村1973〕をもとに、以下の手順で行った。

1. 試料から1cm³を秤量。
2. 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎。
3. 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去。

4. 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置。
5. 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
6. 再び氷酢酸を加えて水洗処理。
7. 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作成。
8. 検鏡・計数。

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、〔島倉 1973〕および〔中村 1980〕をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、〔中村 1974・1977〕を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

C 分析結果 (第 3 表 第 7・9 図)

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 23、樹木花粉と草本花粉を含むもの 3、草本花粉 18、シダ植物孢子 2 形態の計 46 である。分析結果を第 3 表および第 7 図に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真（第 9 図）を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

基本層序⑥

IV層では、花粉がほとんど検出されなかった。III b 層と III a 層では、草本花粉の占める割合が約 70% である。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科が優勢で、ヨモギ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。また、樹木花粉では、ハンノキ属、スギが比較的多く、コナラ属コナラ亜属、マツ属複雑維管束亜属、ブナ属、ニレ属-ケヤキなどが低率に伴われる。

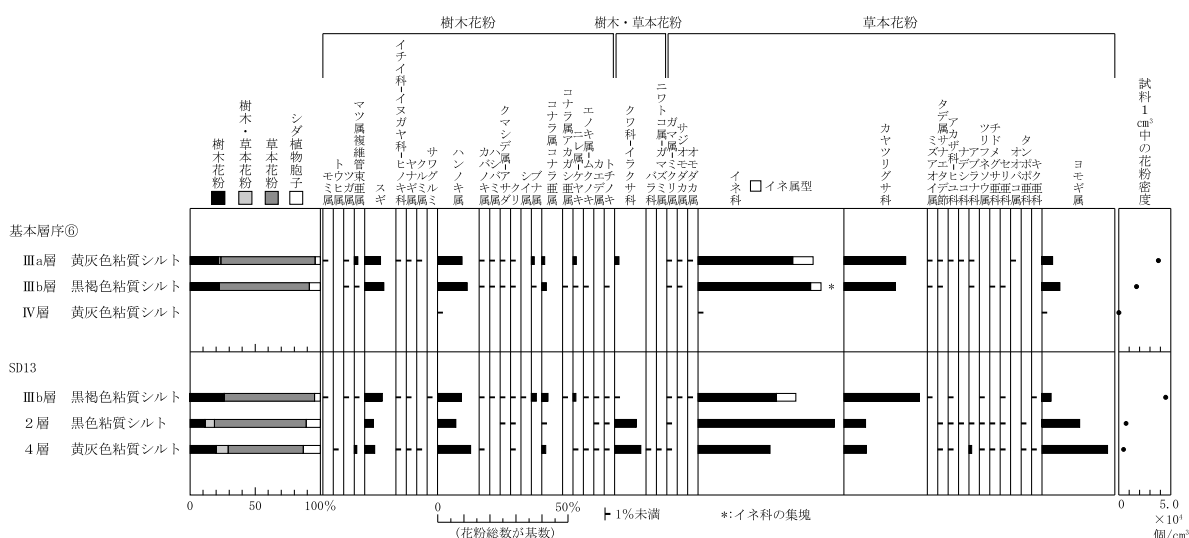
SD13

4層では、草本花粉の占める割合が約 60% である。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優勢で、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、ハンノキ属が比較的多く、スギ、コナラ属コナラ亜属、マツ属複雑維管束亜属などが低率に伴われる。また、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科も比較的多い。2層では、イネ科が増加し、ヨモギ属は減少している。III b 層では、イネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科が優勢で、ヨモギ属、オ

第3表 上浦A遺跡における花粉分析結果

分類群	学名	和名	基本層序⑥			SD13		
			III a層	III b層	IV層	III b層	2層	4層
Arboreal pollen	樹木花粉							
<i>Abies</i>		モミ属	1			1		
<i>Picea</i>		トウヒ属						1
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1	1		1		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	8	1		3		4
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>		マツ属単管束亜属				1		
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	34	33		42	13	16
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2			3		2
<i>Salix</i>		ヤナギ属	2			3		2
<i>Juglans</i>		クルミ属	1					1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ				1		
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	52	51	1	57	27	52
<i>Betula</i>		カバノキ属	2	1		5		1
<i>Corylus</i>		ハシバミ属	1	1		2		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	2	2		5	1	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	2	1		2	3	1
<i>Castanopsis</i>		シイ属						2
<i>Fagus</i>		ブナ属	6	3		12		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	6	8		15	2	6
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アガシ亜属		2		3		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	7	1		7		3
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		2		1		1
<i>Acer</i>		カエデ属				2	1	2
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ		2		1	2	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	9			2	32	41
Rosaceae		バラ科						1
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属						1
Nonarboreal pollen	草本花粉							
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	4	1		2	3	3
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属	2	1		2		
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	1			4		
Gramineae		イネ科	202	193*	1	187	202	113
<i>Oryza type</i>		イネ属型	44	18		46		
Cyperaceae		カヤツリグサ科	132	88		180	32	35
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	1	1		1		
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ属	1	1			2	2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	3			2	3	1
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1				2	
Cruciferae		アブラナ科	5	1			1	4
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属				1	1	2
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科		1			1	2
Apioidae		セリ亜科		2		1	1	3
<i>Plantago</i>		オオバコ属	1					
Lactucoideae		タンポポ亜科					1	2
Asteroidae		キク亜科				2		2
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	23	31	1	22	56	103
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore		単条溝胞子	21	40	1	27	45	57
Trilate type spore		三条溝胞子	2	1	2	1	2	4
Arboreal pollen	樹木花粉		127	109	1	169	49	94
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		9	0	0	2	32	43
Nonarboreal pollen	草本花粉		420	338	2	450	305	272
Total pollen	花粉総数		556	447	3	621	386	409
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度		3.8	1.7	2.8	4.5	7.0	4.6
			× 10 ⁻⁴	× 10 ⁻⁴	× 10 ⁻³	× 10 ⁻⁴	× 10 ⁻³	× 10 ⁻³
Unknown pollen	未同定花粉		2	3	1	3	2	12
Fern spore	シダ植物胞子		23	41	3	28	47	61
Helminth eggs	寄生虫卵		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかな消化残渣		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物		(++)	(+++)		(+)	(+++)	(+)

*: 集塊



モダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。樹木花粉では、ハンノキ属、スギが比較的多く、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、ニレ属-ケヤキなどが低率に伴われる。

第3節 種実同定

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

A 試料

平安時代とされる SE7 の埋土（6 層）から発掘調査担当者により採取された種実類である。

B 分析方法

肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

C 結果（第4表 第10図）

樹木 2、草本 2 の計 4 分類群が同定された。学名、和名および粒数を第 4 表に示し、主要な分類群を写真（第 10 図）に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

- ・オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核（破片）クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

- ・トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子（破片）トチノキ科

黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

〔草本〕

- ・アサ *Cannabis sativa* L. 種子（破片）クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。

- ・ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子・果皮（破片）ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に 2 本の低い稜が走る。果皮は木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。ヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

第4表 上浦A遺跡における種実同定結果

分類群		部位	SE7				出土層位
学名	和名		2	3	4	7	
Arbor	樹木						
<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr.	オニグルミ	核（破片）			1	6	
<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ	種子（破片）			1	6	
Herb	草本						
<i>Cannabis sativa</i> L.	アサ	種子（破片）		1		6	
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子	1			10	
		果皮（破片）				1	
			1	1	2	1	

第4節 樹種同定

セルロースを骨格とする木部細胞の集合体である木材は、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

A 試料

平安時代とされる SE7 の 6 層から発掘調査担当者により採取された炭化材 3 点である。なお、生材として取り上げられ、今回の分析対象となった試料は種実で、種実分析の結果ヒヨウタン類果皮と同定された（前述）。

B 分析方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

C 結果（第5表 第10図）

第5表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真（第10図）を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

・ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 図版1・2・3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上

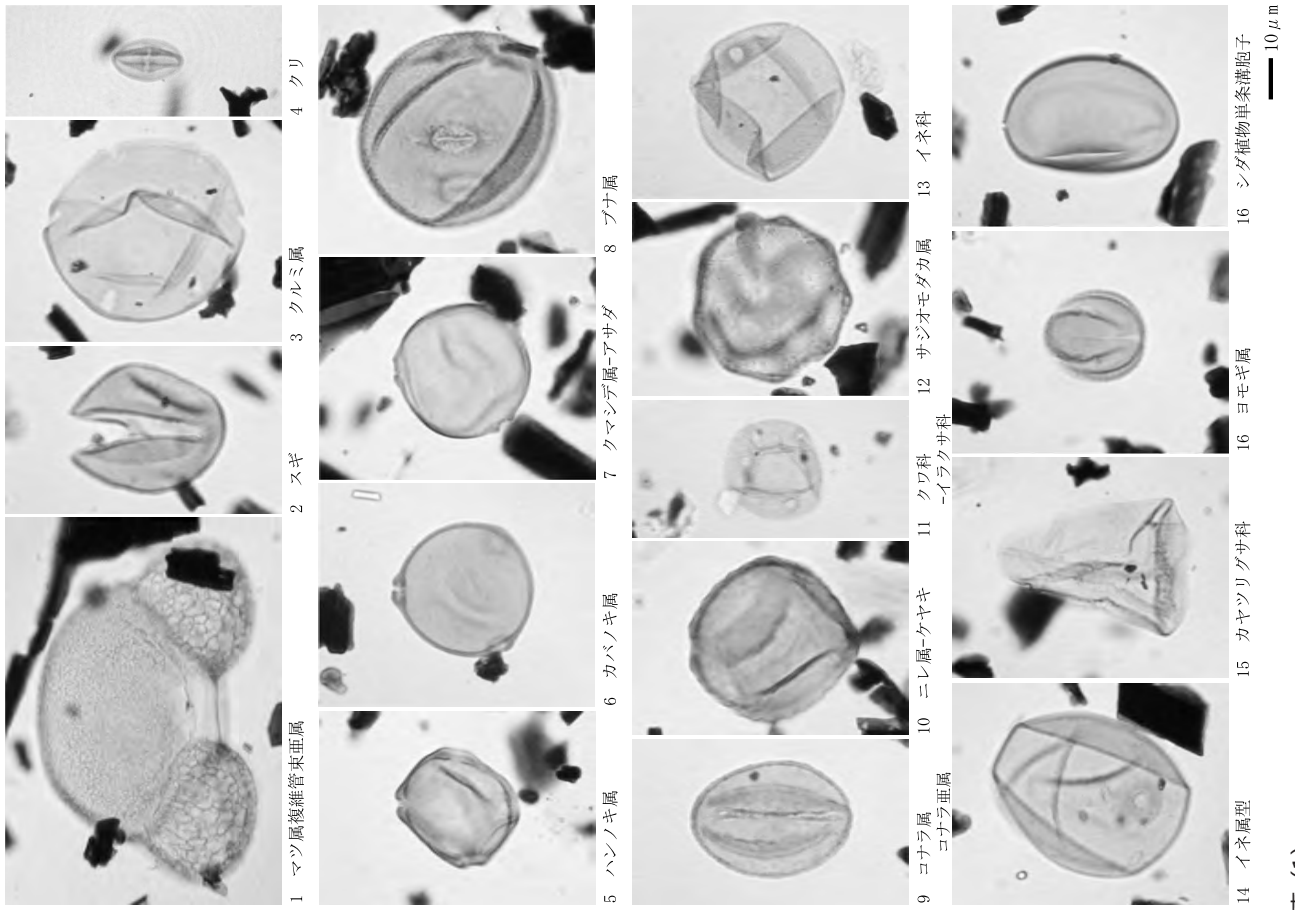
下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいるものが存在する。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

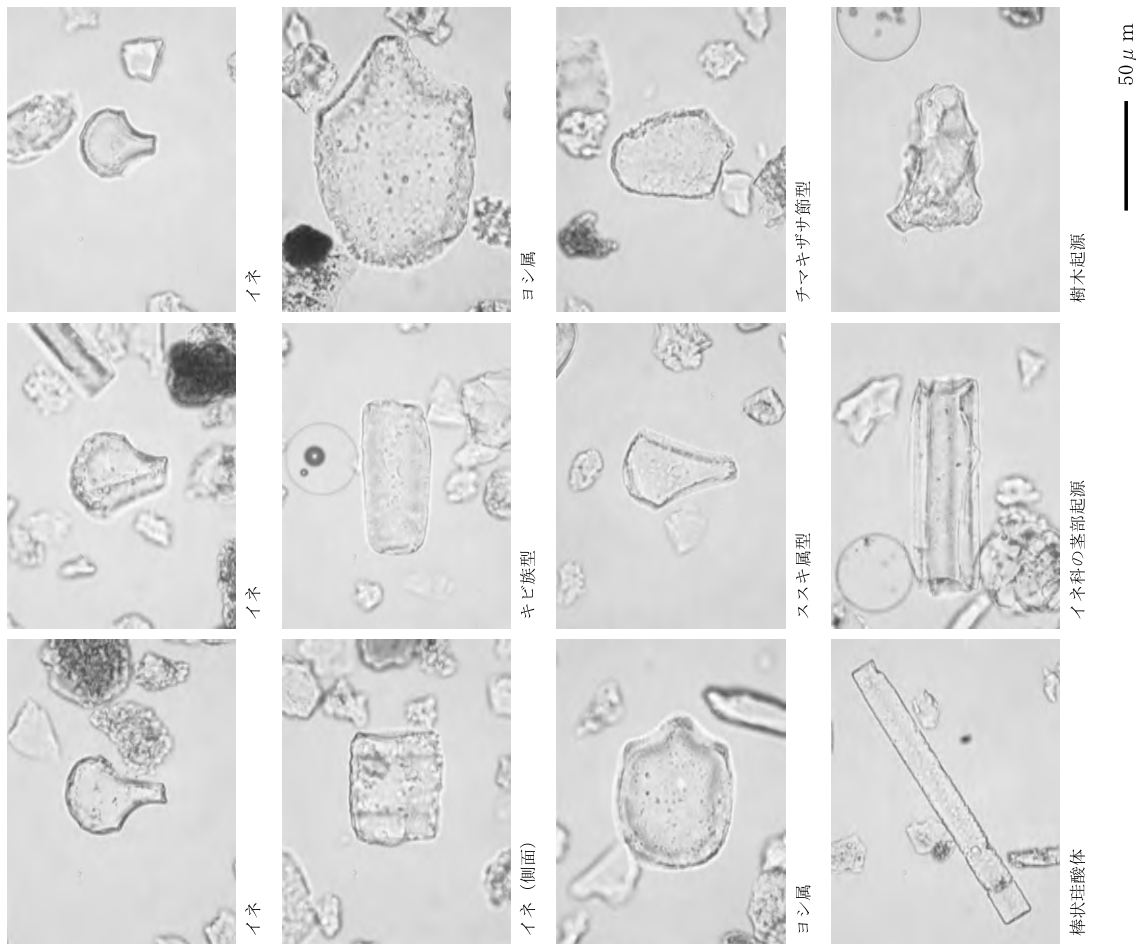
第5表 上浦A遺跡における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）	
試料1	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
試料5	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
試料6	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ

上浦A遺跡の花粉・孢子

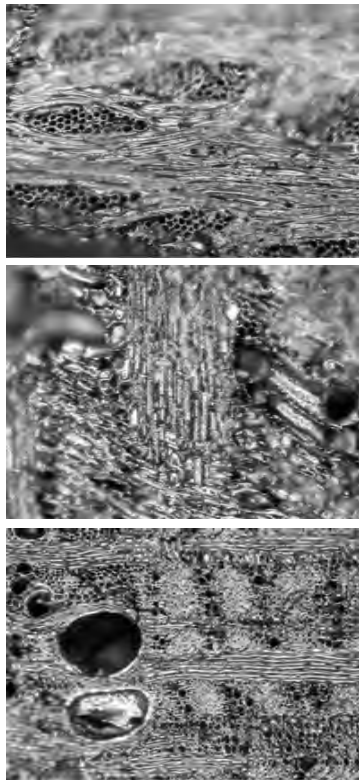
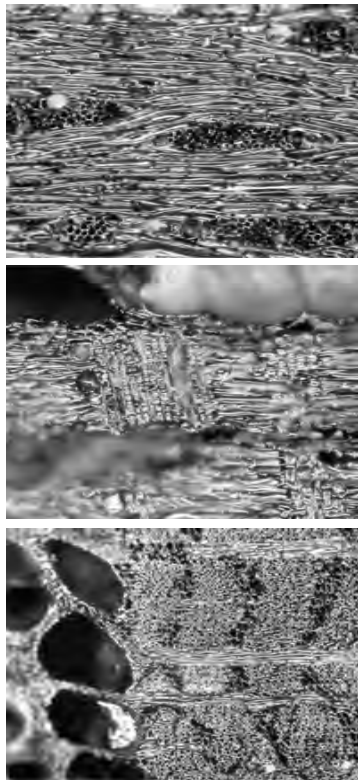
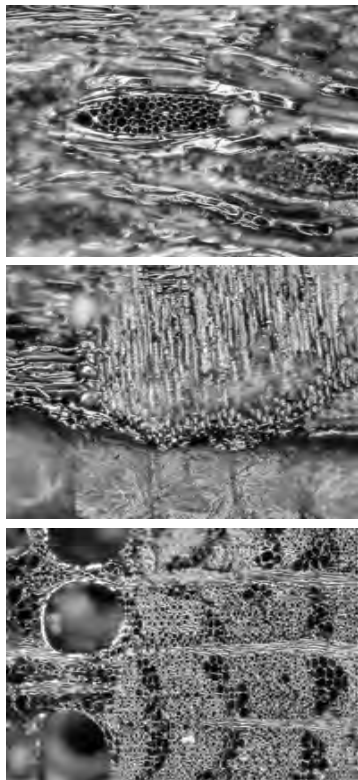


上浦A遺跡の植物珪酸体 (プラントオパール)



第9図 顕微鏡写真(1)

上浦A遺跡の炭化材



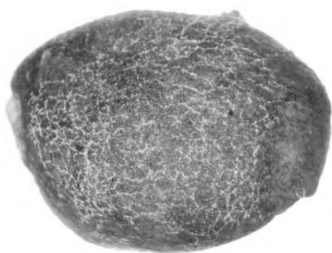
上浦A遺跡の種実



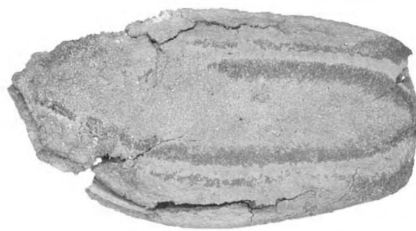
1 オニグルミ核
— 1.0mm



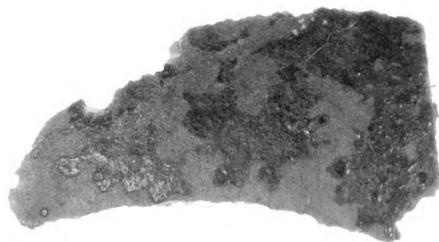
2 トチノキ種子
— 1.0mm



3 アサ種子
— 1.0mm



4 ヒヨウタン種子
— 1.0mm



5 ヒヨウタン果皮
— 5.0mm

第10図 顕微鏡写真(2)

第七章 総 括

発掘調査で得られた情報を総括し、上浦 A 遺跡第 14 次調査について考察する。なお、遺構別の器種構成比率については、遺構出土土器がわずかであり、かつ SE7 に集中するため、第 11 図に示すにとどめ、特に言及しない。必要に応じて参照していただきたい。

第 1 節 土 器

出土土器のうち完形・略完形および形状・法量を復元し得る資料をもとに、その年代的 position 付けについて検討する。対象となる資料が少ないため、遺構・包含層出土に関わらず、掲載遺物で指数の算出が可能なのは全て示した。対象資料は須恵器無台杯 3 点 (11・31・32)、土師器無台椀 4 点 (3・4・16・17) の合計 7 点である。

なお、以下で使用する編年は、春日真実による編年案〔春日 2007〕とし、年代の標記は、ローマ字標記による春日編年と、世紀と四半期で示す実年代を併記した。

1) 須 恵 器

佐渡小泊産 (31) と新津丘陵産 (11・32) がある。器高指数は 11 と 31 が近く、底径指数は 31・32 がまとまる傾向にあるが、法量では 3 点に共通点は見出しえない。胎土について見ると、11・32 が B 類で新津丘陵須恵器窯の操業期間中 (V~VI 1 期 : 9 世紀第 1 四半期~第 4 四半期) におさまると思われる。

無台杯 31

器厚は比較的薄く、底部から口縁まで直線的に立ち上がり、法量・形状は佐渡小泊の下口沢窯段階の特徴を示す。春日編年 V 2 ~ VI 1 期 (9 世紀第 2 四半期~第 4 四半期) にあたると思われるが 32 と底径指数がほぼ同値であり、時期的に近いと考えられる。新津丘陵の窯の操業時期を併せて考えると、V 2 期 (9 世紀第 2 四半期) とするのが妥当であろう。

無台杯 11・32

新津丘陵産であり、時期的には V 1 ~ VI 1 期の時間幅におさまるが、下口沢段階の須恵器 (31) の混入が見られることから、小泊産須恵器の本格的流入が始まる V 2 期と判断する。

2) 土 師 器

無台椀 3・4

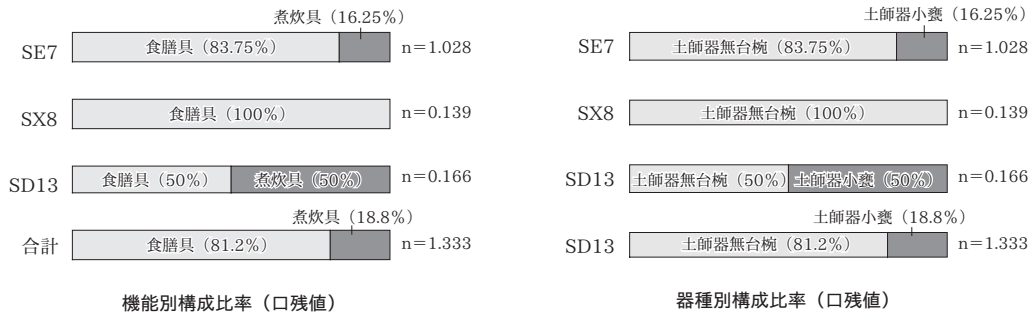
3 は腰高で無台椀の中では新しい様相を示す。形態および器高・底径指数は小丸山遺跡 SD5 や門新 93・94 年度調査出土遺物群等に近い。小丸山遺跡 SD5 は 9 世紀後半から 10 世紀の初頭〔小池 1994〕、門新 93・94 年度調査出土遺物群もおおむね 9 世紀末から 10 世紀初頭を示しており〔田中 1995〕、大きな矛盾はなく、本資料もこの時期と判断する。春日編年の VII 1 期 (9 世紀第 4 四半期~10 世紀第 1 四半期) に相当する。4 は SE7 中より一括廃棄遺物として共伴するため、3 と同時期 (VII 1 期) と判断する。

無台椀 16・17

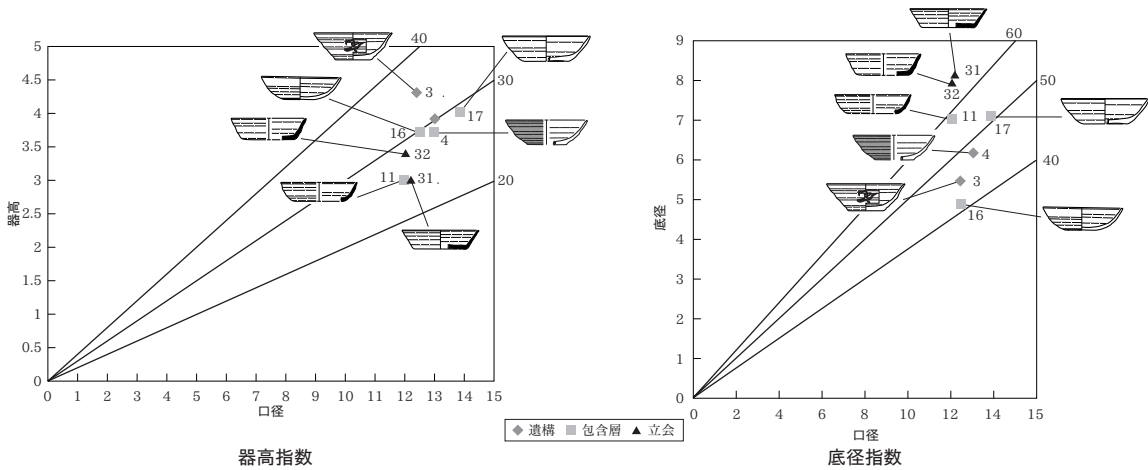
底径・器高指数から見ると、いずれの時代にも存在する法量であるようだが〔春日 1999〕、器高指数と器壁の厚さ、包含層より共伴する須恵器の時期を加味すると、V 2 期に相当すると考えられる。本品と同様の法量・器厚を有する無台椀は第 2 次・4 次・7 次・9 次調査で同時期の須恵器と共伴しており〔川上 1997・坂上 2003〕、本資料もこの段階と考えて大きな矛盾はない。

3) その他の遺物

無台碗 3・4 と共伴する SE7 出土遺物 (1・2・5・6・27～30) は VII 1 期、新津産の有台杯 7・8 は無台杯 11・31・32 とほぼ同時期で V 2 期に位置付けることができる。その他、3・4 と胎土が同じで器壁が薄く、口縁部にかけて外反する無台碗 9 も、VII 期と見て良いのではないだろうか。また、小形で器壁が極めて薄い無台碗 39 は、春日編年 VII 期以降の小形の無台碗もしくは皿に近いものと思われる。



第 11 図 遺構別器種構成比率 (口残値)



第 12 図 器高指数と底径指数

傾向として、包含層出土遺物は V 2 期、遺構出土遺物は VII 1 期が主体であるが、遺物の内容的には第 2 次・4 次・7 次・9 次調査および結・長沼遺跡と概ね共通する時期幅を有している。

第 2 節 遺構

A 遺構の年代

遺物の検討により、一括遺物を有し、今次調査の主な遺構である SE7 の廃棄時期が概ね 9 世紀末から 10 世紀初頭にあたと判断される。SD12 (近代) を除く他の遺構からは遺物の出土がほとんど見られないため時期を明確にしえないが、ある程度のまとまりをもって分布していること、覆土に IV 層をブロック状に含む等の共通点がある。SE7 出土遺物が V 2 期～VII 1 期 (9 世紀半ば～10 世紀初頭) に比定されることから、他の遺構もこの時期幅に対応すると判断するのが妥当であろう。

B SE7 について

当遺構は、井戸枠等の検出はなかったが、祭祀に伴うと思われる一括遺物や埋め戻し方法に人為性が認められる。古代の新潟県下の井戸祭祀については、駒見和夫による総括的な論考 [駒見 1992] のほか、一之口遺跡 [鈴

木俊成 1994)、牛道遺跡〔立木(土橋) 1999〕などで考察がなされている。加えて越後平野では近年Ⅵ期からⅦ期の井戸の詳細な調査例が蓄積されていることもあり、これらとの比較検討により、当遺跡の井戸廃棄について考察してみたい。

比較資料は新潟市内とその周辺市町村の調査事例から、Ⅵ期以降に位置付けられる既報告の遺跡における井戸(SE)で、編年的な位置付けがなされており、掘り方・覆土・出土遺物等が記録されているものを抽出した(第6表)。

1) 一括遺物の検討

井戸からの出土遺物と祭祀の関係については、〔駒見 1992・北田 2000〕等により、遺構のライフサイクルの中で、折々の段階において遺物埋納をはじめとする祭祀行為がなされることが指摘されている。

また、鐘方正樹は、井戸の①構築時、②使用中、③使用停止以降の3段階を想定し、各段階において祭祀行為が伴うとしている〔鐘方 2003〕が、実際は、「3段階のすべてにわたって遺物を埋納した井戸の調査例はほとんどなく、いずれかの段階で遺物が埋納されているのが普通〔鐘方前掲〕」で、「遺物が埋納されない井戸も少なくない〔鐘方前掲〕」と、必ずしも全ての井戸で祭祀行為が行われたわけではないようである。

祭祀に伴って埋納される遺物の種類については、斎串・銭貨・土器・石製品・礫などが一般的なようだが、事例として挙げた新潟市周辺のⅥ・Ⅶ期の井戸では、土器が卓越する傾向にある(第6表、第14図)。

上浦A遺跡SE7を見ると、出土遺物は最下層と中層(水溜の上部)付近で一括検出されており、斎串や形代等の木製品は出土していないものの、井戸底では墨書された無台椀が検出されるなど、遺物の出土に祭祀的側面を考慮して良さそうである。

2) 各段階における遺物の出土状況(第14図)

具体的に、構築時・使用時・廃棄時の遺物の状況について、上浦A遺跡SE7と事例を比較して検討してみる。

①構築時

井戸構築の際に地鎮等の目的で遺物が埋納されることがある。井戸底や井戸枠と掘り方の間から出土することで判断されることが多い。上浦A遺跡SE7では井戸枠が残存しておらず、該当するような出土状況を示す遺物が出土していないため、詳細は不明であるが、小丸山遺跡SE9、馬越遺跡SE9では井戸枠と掘り方の間から地鎮に使われたと思われる斎串が出土している。

②使用時

浄水・防疫・鎮井などが目的とされる〔鐘方前掲〕。完形に近い土器などが井戸底から出土する場合、その可能性はある。特に壺・瓶などは口縁部を打ち欠くことが多いという。上浦A遺跡SE7では底部からの遺物出土が見られるが、井戸底部の覆土は、遺物の設置後すぐに埋没した様相を呈しており、むしろ廃棄時の埋納と判断するのが妥当である。

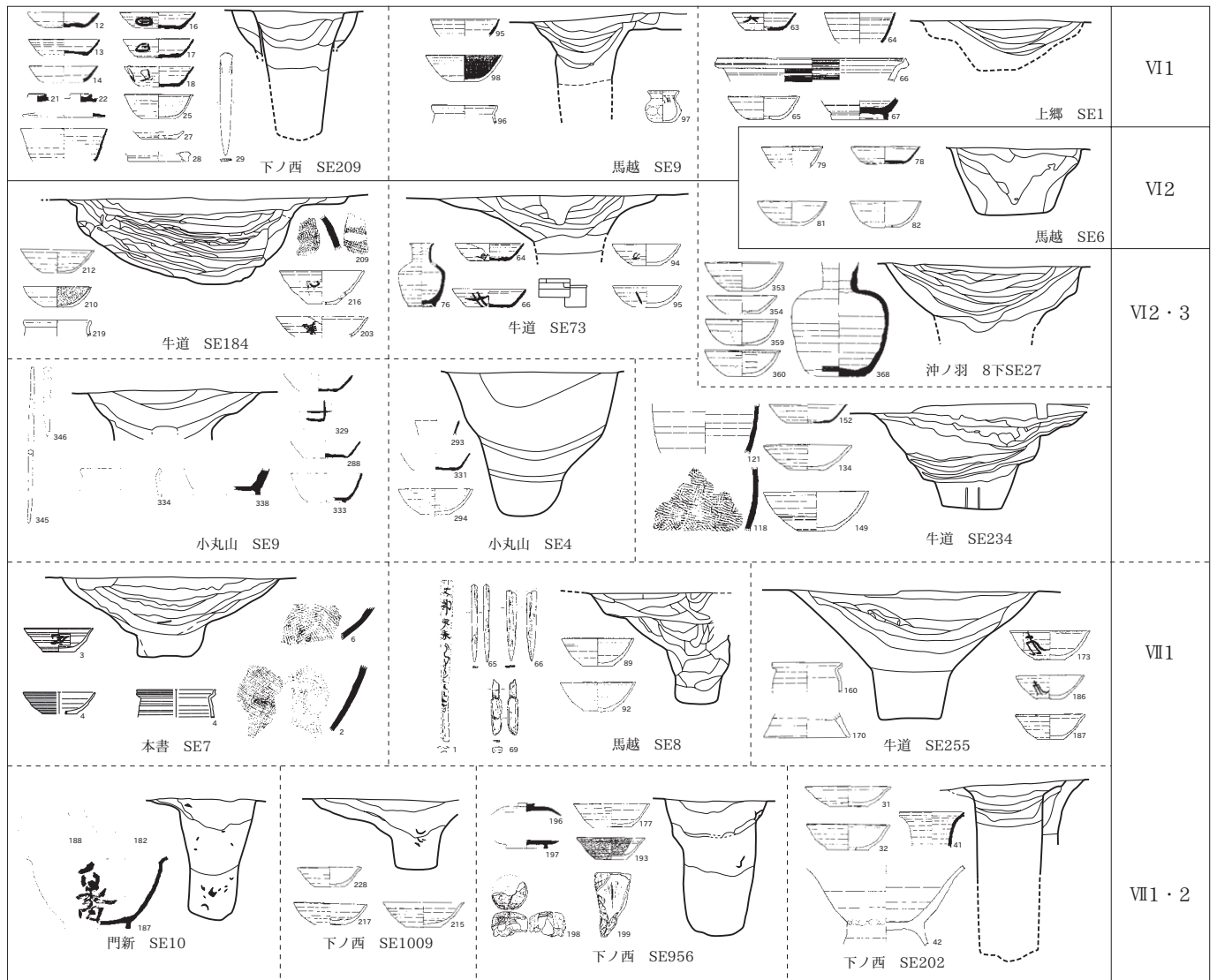
第6表 上浦A遺跡周辺のⅥ～Ⅶ期の井戸

遺跡名	遺構名	所在	年代(春日編年)	断面形状	水溜	覆土	遺物										遺物出土層位				文献
							食膳具	墨書	煮炊具	貯蔵具	祭祀用木製品	石製品	礫	その他	上面/上層	中層	下層/底部	掘り方			
08上浦A	SE7	秋葉区	Ⅶ1	漏斗状	-	A	○	○	○	○	-	-	○	ヒョウタン・木	-	○	○	-	本書		
沖ノ羽	8下SE27	秋葉区	Ⅵ1	漏斗状	-	A	○	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	春日 2003		
上郷	93SE1	江南区	Ⅵ2・3～Ⅶ1	掃鉢状	-	A	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	上野ほか 1997		
牛道	SE73	江南区	Ⅵ2・3～Ⅶ1	漏斗状	曲物	A	○	○	○	○	-	-	○	-	-	○	○	-	立木(土橋) 1999		
	SE184			漏斗状	曲物	A	○	○	○	○	-	-	-	-	井戸側	○	○	-			
	SE234			漏斗状	曲物	A	○	-	○	○	-	-	-	-	-	○	○	-			
	SE255			漏斗状	-	A	○	○	○	○	-	-	-	-	堅果類・イネ	○	○	-			
小丸山	SE4	東区	Ⅵ2・3	漏斗状	曲物	A	○	○	○	○	-	-	-	-	○	○	-	小池ほか 1995			
SE9	Ⅵ2・3～Ⅶ1		漏斗状	井桁	A?	○	○	○	○	○	○	○	ヒョウタン クルミ等	-	○	○	○				
馬越	SE6	加茂市	Ⅵ3	逆台形	-	-	○	-	○	-	-	-	-	鉄滓・モモ	-	-	-	伊藤 2005			
	SE8		Ⅶ1	漏斗状	-	A	○	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-				
	SE9		Ⅵ1	漏斗状	-	-	○	-	○	-	-	-	-	小形壺	-	-	○		-		
門新	SE10	長岡市	Ⅶ2	筒状	-	-	○	○	-	-	-	-	須臾器有台鉢	○	-	○	-	田中 1995			
下ノ西	SE202	長岡市	Ⅶ1	筒状	-	A	○	-	○	○	-	-	-	骸骨	-	○	○	-	田中 1999・ 2006		
	SE203			筒状	-	A	○	○	-	-	○	-	-	鉄製刀子	-	○	○	-			
	SE956			筒状	-	A	○	-	-	-	○	○	-	-	骸骨	○	○	-			
	SE1009			漏斗状	-	A	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○		-	

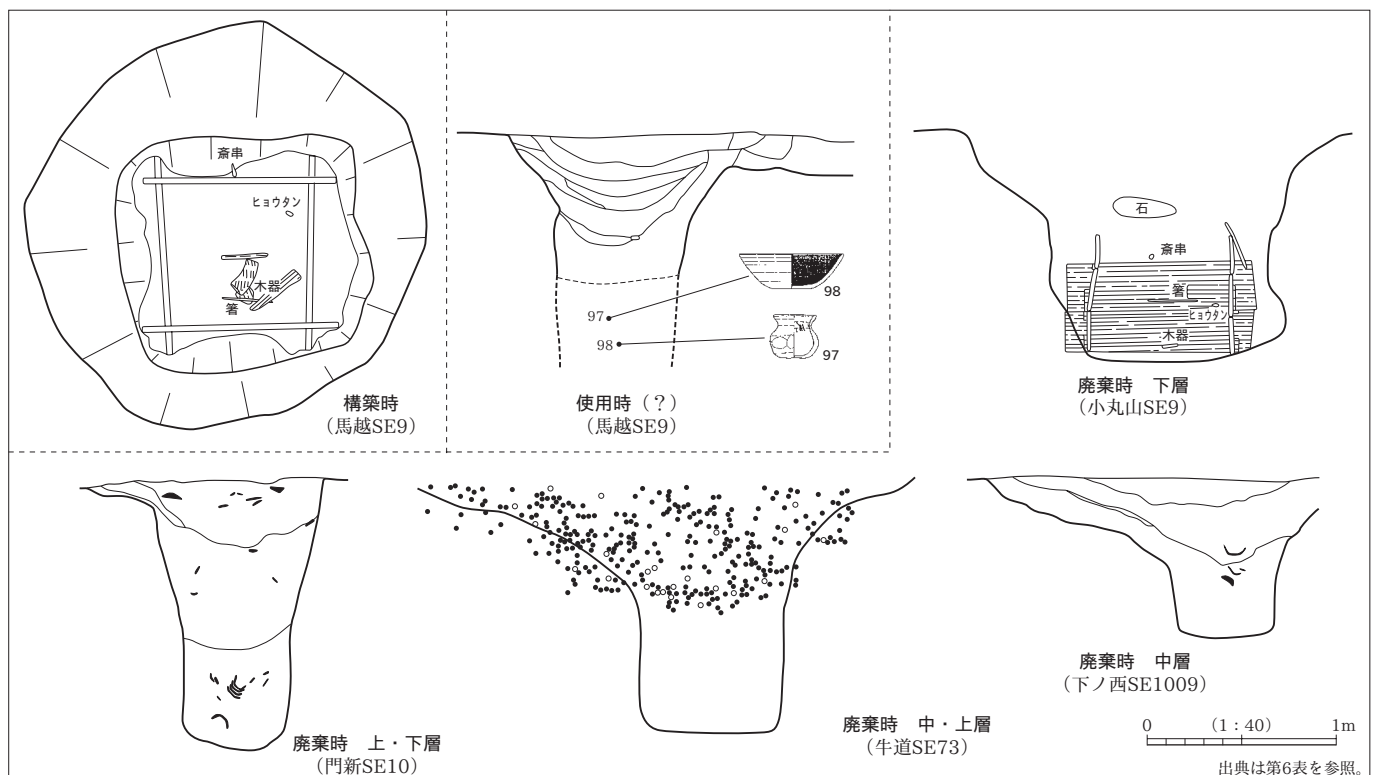
覆土A：埋められた土
 覆土B：自然堆積に近い土
 -：検出されない、もしくは確認できない。

時期の比定は、報告書及び〔上野ほか 1997・春日 2005〕等を参考とした。

第2節 遺構



第13図 上浦A遺跡周辺のVI~VII期の井戸出土遺物と覆土の堆積状況 (遺構 S=1/80 遺物 S=1/12) 原図を一部改変。出典は第6表を参照。



第14図 遺物の廃棄例

事例中では略完形の小形壺が出土した馬越遺跡 SE9・牛道遺跡 SE73、井戸底部付近で完形の土師器無台椀 10 点が出土している下ノ西遺跡 SE202・門新遺跡 SE10 がこの類の儀礼を行っている可能性があるが、廃棄儀礼との明瞭な区別がつけられず、可能性を指摘するにとどめる。

③廃棄時

廃棄時の儀礼には、遺物の埋納と息抜きの設置などがあるが、上浦 A 遺跡 SE7 および周辺事例では後者の痕跡は見あたらず、前者のみが確認されている。遺物の埋納は段階的に行われるようで、上・中・下層に集中する場合が多く、特に中層部で目立って観察されている。

SE7 では下層と中層から遺物の出土があり、いずれも各段階の廃棄儀礼に伴うものと考えられる。この他、牛道遺跡では上・中層のみ、小丸山遺跡・下ノ西遺跡 SE202・203 では中・下層、門新遺跡では上・下層のみであり、比較事例を含めて上・中・下層全てにおいて埋納が行われたと判断し得る例はない。

④覆土の堆積状況

埋め戻しについては、包含層と地山がブロック状に混入し、土が投げ込まれたような堆積様相を示す例（馬越遺跡 SE6・8 など）と、薄い層が何枚もレンズ状を呈して堆積する例がある。前者は明らかに意図的かつ短期間に埋め戻した状況を示す。後者は自然堆積と判断されることもあるが、牛道遺跡 SE184 のように焼土を散布する場合や、上浦 A 遺跡 SE7 のように包含層と地山がブロック状に混入することもあり、時には儀礼等を行いつつ断続的な埋め戻しを行ったことが推定される。つまり、井戸の埋め戻しには、短期間で行う場合と、時間をかけて行う場合が存在し、後者のように時間をかけて埋め戻す場合、雨水による土砂の自然流入も発生し、結果としてレンズ状を呈するのではないだろうか（註 1）。

3) 小括

以上の検討結果を踏まえ、上浦 A 遺跡 SE7 の廃棄時の状況を時間の経過に従って復元すると、以下のとおりとなる。

- ①土師器無台椀 3・4、小甕 5、搬入礫 30 等を底部に埋納する。礫が被熱しているため、火を使った儀礼が行われた可能性がある。祭祀の終了後に水溜部の曲物を撤去すると、土留めを失った透水層は湧水の影響で直ちに崩落を始め、遺物も埋没する。10 層はこの過程で形成され、水溜部はほぼ完全に埋没する。
- ②水溜部の埋没後、土師器鍋 6、須恵器大甕 1・2、搬入礫 27・29 等が廃棄される。ここでも被熱礫が共伴することから、①と同様の儀礼を行ったのであろう。多少の埋め戻しを行うが、完全には埋め戻さず、播鉢状の凹地として残る。
- ③自然の堆積作用で完全に埋没する。

事例によっては、②の行為後直ちに人力で埋め戻す場合（馬越遺跡 SE8）、③で完全に埋没する直前に、遺物の埋納や灰・焼土の散布などを行う場合（牛道遺跡 SE184）もあるようである。また、中層から上層まで遺物が連続して出土する例（牛道遺跡 SE73）、中・上層部分をゴミ穴に転用したと思われる例（牛道遺跡 SE255）もあり、特に下層埋没後の廃棄儀礼について、いくつかのパターンがあるように見受けられる（註 2）。

最後に、これらの儀礼の系譜について考えてみたい。今回挙げた事例には、律令祭祀の影響と捉えられる〔駒見 1992〕遺物の埋納（註 3）と、土器片や焼礫を灰・炭化物と共に散布する（火を使う）陰陽道に連なると思われる〔駒見前掲〕儀礼系譜が存在する。上浦 A 遺跡 SE7 における祭祀は、斎串等の律令祭祀に特徴的な遺物が見られず、底部・中層ともに火を用いた儀礼の痕跡があり、陰陽道の影響が強いと思われるが、牛道遺跡 SE184 では両者が併行して見られるなど、形態は様々である。土橋由理子は、この両者の入り混じった祭祀様相は、律令体制から荘園・国衙領を主体とする支配体制へと変化しつつある当時の社会状況を反映するものとしている〔立木（土橋）前掲〕が、本稿もこの立場を支持したい。

第3節 自然科学分析結果

A 水田耕作（プラントオパール分析結果より）

水田・稲作痕跡の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラントオパールが試料 1g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している [杉山 2000]。ただし、密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 /g とし て検討を行った。

1) 基本層序⑥

Ⅲ a 層・Ⅲ b 層・Ⅳ層について分析を行った結果、Ⅲ a 層とⅢ b 層からイネが検出された。このうち、Ⅲ a 層では密度が 3,200 個 /g と比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Ⅲ b 層では密度が 2,000 個 /g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) SD13 覆土

Ⅲ b 層・2 層・4 層について分析を行った。その結果、すべての層からイネが検出された。このうち、Ⅲ b 層では密度が 5,300 個 /g と高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。4 層では密度が 700 個 /g と低い値であり、2 層でも 2,200 個 /g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、基本層序⑥と同様な理由が考えられる。

3) 想定される堆積環境

おもな分類群の推定生産量によると、概ねヨシ属が優勢である。特に基本層序⑥のⅢ a 層やⅢ b 層で多くっており、基本層序のⅢ a 層やⅢ b 層および SD13 覆土の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていたと推定される。

B 遺跡周辺の植生と環境（花粉分析結果より）

1) 基本層序⑥

Ⅳ層では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

Ⅲ b 層からⅢ a 層にかけては、イネ科、カヤツリグサ科をはじめ、水田雑草のオモダカ属、ミズアオイ属なども生育する湿地的な環境であったと考えられ、調査地点もしくはその近辺では水田稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺には湿地林や河辺林を形成するハンノキ属をはじめ、スギ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、ブナ属、ニレ属 - ケヤキなどの樹木が分布していたと考えられる。

2) SD13 覆土

4 層と 2 層の堆積当時は、イネ科、カヤツリグサ科などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周囲の比較的乾燥したところにはヨモギ属、クワ科 - イラクサ科（カナムグラ、カラムシ）などが分布していたと推定される。また、遺跡周辺には湿地林や河辺林を形成するハンノキ属をはじめ、スギ、ナラ類、ニレ属 - ケヤキなどの樹木が分布していたと考えられる。

以上の結果から、Ⅲ b 層の堆積当時の遺跡周辺は、イネ科、カヤツリグサ科をはじめ、水田雑草のオモダカ属、ミズアオイ属なども生育する湿地的な環境であったと考えられ、調査地点もしくはその近辺では水田稲作が行われていたことを示唆する。同様な結果はプラントオパール分析によっても得られており、当時の堆積環境はおむね結論のとおりであろう。現在の環境と大差ないように思える。

C SE7 出土の種子・炭化材（種子・樹種同定結果より）

種実類では、オニグルミ、トチノキ、アサ、ヒョウタン類種子、ヒョウタン類果皮が同定された。また、炭化材は、いずれもケヤキと同定されている。オニグルミ、トチノキ、アサ、ヒョウタン類は、食用となる有用植物である。このうち、オニグルミは温帯を中心に広く分布し、谷や河川沿いの湿地を好み、トチノキは低山帯の山深い溪流沿いの肥沃地を好む。オニグルミは新津丘陵に現在でも自生するが、トチは極めて少ないようである。アサは南アジアや中央アジア原産とされる1年草の畑作物であり、茎皮の繊維は麻糸になり、種子は油の採取や食用にもなる。ヒョウタン類はアフリカ原産の1年草であり、縄文時代から見られる栽培植物である。

覆土への混入は儀礼、廃棄、自然流入のいずれか判断し難いが、ヒョウタンは被熱による炭化が見られないため、儀礼時の混入でなく、儀礼終了後に井戸が埋まりきらない段階で廃棄されたか、自然流入したのと考えたい（註2）。いずれにしても、周辺で栽培されていた作物と捉えられよう。

ケヤキは、谷沿いなどの適潤な肥沃地に生育する。新津丘陵では自然林としては残っていないが、金津地区ではイヌシデ極相林の林冠を占めていることから、かつては丘陵一帯に分布していたとされ〔平1998〕、平安時代の新津丘陵には自然林として存在した可能性がある。6層で祭祀遺物と共伴していること、被熱により炭化していることから、井戸廃棄に関する儀礼との関連が想定される。

第4節 まとめ

今回の調査で得られた情報をもとに、上浦A遺跡について概観したい。上浦A遺跡は、付近の結遺跡・長沼遺跡などを含めた、小河川のほとりに営まれた遺跡の一部であったと思われる。今回の調査では井戸・土坑など11基が検出されており、井戸には廃棄の際に行われた祭祀痕が残る。役目を終えた井戸は、数回の通過儀礼を経て廃棄に至ると思われる、同様な事例は周辺の同時期の遺跡でも確認しえた。遺構・遺物量から想定するに、今回の調査範囲は遺跡の中心地ではなく、この時代の生活の中心は今回の調査地から500mほど南の第2次・第9次調査区付近と思われる。上浦A遺跡第2次調査・上浦B遺跡第3次調査では能代川から分流すると思われる河跡が検出されており、このような河川を媒介として周辺地域とのネットワークを構築していた可能性がある。

出土遺物は9世紀第2四半期から10世紀第1四半期までと比較的幅があり、多くが1世代程度で廃絶してしまう例の多いこの時代の遺跡の中では、比較的長期にわたる土地利用がなされたようである。物流の目安となる須恵器は、新津丘陵産・阿賀北（笹神）産・佐渡小泊産があり、大きく新津産と佐渡小泊産の併存が見られる時期（Ⅴ2期）と、佐渡小泊産須恵器流通の衰退期（Ⅶ1期）に分けられる。また、Ⅶ1期にあらわれる阿賀北（笹神）産の製品は、衰退した佐渡小泊産に代わるものと考えられることもできよう。河川の流下方向を加味して考えると、流通経路としては、能代川・小阿賀野川方面から前述した河川を通じて上浦A遺跡の中心地域に至り、旧八丁潟を経て市之瀬・覚路津方面から信濃川に至るルートが想定されよう（註4）。

自然科学分析の結果により、水田耕作を行っていた可能性が高いこと、アサ・ヒョウタン等の畑作物やトチ・クルミなどの堅果類の存在が判明している。集落の基本的経済はこれら栽培作物と周辺での資源採取で成り立っていたと思われる。こうした小規模な経済圏が、須恵器に代表される広域流通品等を通じて連結され、より広域な経済圏を形成していたのであろう。

- 1) 井戸は廃棄後、すぐには埋め戻さず、自然埋没を待つという指摘がある〔鐘方2003〕。
- 2) 廃棄後の井戸をゴミ穴に転用したとする例は牛道遺跡SE255に見られるが、SE7は有機遺物の量・覆土の腐植が少なく、ゴミ穴とするには躊躇する。
- 3) これを律令祭祀とすることについては異論もあるが〔鈴木俊成1994〕、儀礼的行為は長く残り得るものなので、本稿では特に問題視しない。
- 4) 結遺跡、長沼遺跡などもこのルート沿いに位置しているのではないだろうか。

引用・参考文献

- ア 朝岡政康 2004 「5 亀田砂丘周辺の様相」『越後阿賀北地域の古代土器様相』41-58 頁 新潟古代土器研究会
- 家田順一郎 1981 「井戸の型式と用材の検討」『曾根遺跡Ⅰ』100・101 頁 北蒲原郡豊浦町教育委員会
- 石川智紀^{ほか} 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 103 集 新保遺跡』新潟県教育委員会
- 石崎真紀子 1993 「新潟県の古墳時代」『新津市史 通史編 上巻』67-81 頁 新津市
- 伊藤秀和 2001 『加茂市文化財調査報告(13) 鬼倉遺跡』加茂市教育委員会
- 2005 『加茂市文化財調査報告(14) 馬越遺跡』加茂市教育委員会
- 井上慶隆^{ほか} 2002 「第 1 章 第 2 節 古代の五泉郷」『五泉市史 通史編』35-43 頁 五泉市
- 今井さやか^{ほか} 2007 『日水遺跡 第 3 次調査』新潟市教育委員会
- 上野一久^{ほか} 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 87 集 上郷遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集 215-231 頁 国立歴史民俗博物館
- 江口友子^{ほか} 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 100 集 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会
- 折原洋一 2004 「第 3 章 新保遺跡の調査」『五泉市文化財報告(11) 新保・住吉田遺跡』9-75 頁 五泉市教育委員会
- カ 籠瀬良明 1990 『自然堤防の諸類型』古今書院
- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂
- 1988 「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究第 2 生業』131-139 頁 雄山閣出版
- 春日真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会会報』第 8 号 24-34 頁 新潟考古学談話会
- 1993 「王朝変遷期の越後」『新潟考古』第 4 号 1-21 頁 新潟県考古学会
- 1995 「古代集落の展開」『研究紀要 1995』66-104 頁 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 1997a 「越後・佐渡における 9 世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第 6 号 73-81 頁 北陸古代土器研究会
- 1997b 「越後における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号 13-21 頁 北陸古代土器研究会
- 1999 「第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』301-310 頁 高志書院
- 2000 「第 5 章 まとめ」『吉田町史 資料編 1 考古・古代・中世』376-418 頁 吉田町
- 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 104 集 梯子谷窯跡』新潟県教育委員会
- 2002 『『古代の土器研究会 第 6 回シンポジウム 須恵器の製作技法とその転換』参加記』『新潟考古学談話会会報』第 27 号 新潟考古学談話会
- 2003a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 123 集 沖ノ羽遺跡Ⅲ(C 地区)』新潟県教育委員会
- 2003b 「消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向」『研究紀要』第 4 号 13-26 頁 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』第 16 号 41-76 頁 新潟県考古学会
- 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第 18 号 9-54 頁 新潟県考古学会
- 春日真実^{ほか} 1999 「越後・佐渡の様相」『北陸古代土器研究 第 8 号』37-44 頁 北陸古代土器研究会
- 加藤 学^{ほか} 2006 「B 中世(Ⅲ～Ⅳ期)の遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 159 集 用言寺遺跡Ⅰ』20-32 頁 新潟県教育委員会
- 加藤 学 2004 「新潟県域における北方系の土師器甕」『越後阿賀北地域の古代土器様相』85-96 頁 新潟古代土器研究会
- 2007 「第Ⅳ章 2-A 井戸(Ⅲ～Ⅳ期)」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 183 集 用言寺遺跡Ⅱ』20-23 頁 新潟県教育委員会
- 鐘方正樹 2003 『ものが語る歴史 8 井戸の考古学』同成社
- 金子拓男 2007 「沼足柵地『沼垂王瀬』説への疑問」『新潟考古』第 18 号 55-80 頁 新潟県考古学会
- 鴨居幸彦 2002 「2 各地の平野地盤」『新潟県地盤図説明書』15-30 頁 新潟県地質調査業協会

- 川上貞夫^{ほか} 1981 『五泉市文化財調査報告(2) 山崎須恵器窯址』 五泉市教育委員会
 1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
 1996 『中組遺跡』 吉田町教育委員会
 1997 『上浦 A 遺跡』 新津市教育委員会
- 川村浩司 2005 「越後の古代集落の素描」『新潟考古学談話会会報』第3号 27-40 頁 新潟考古学談話会
- 北田裕行 2000 「古代における都城祭祀」『考古学研究』第47巻第1号 53-70 頁 考古学研究会
- 北村 淳^{ほか} 2004 『中谷内遺跡Ⅲ・沖ノ羽遺跡Ⅱ・細池寺道上遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 木下 浩 1993 「第2編第3章第1節 水利と新田開発」『新津市史 通史編 上巻』389-402 頁 新津市
- 木村宗文 1989 「第3章 文献 資料解説」『新津市史 資料編 第1巻 原始・古代・中世』238-411 頁 新津市
- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』48-262 頁 角川書店
- 日下 哉 2002 『図解 日本地形用語辞典』 東洋書店
- 小池邦明^{ほか} 1993 『新潟市の場遺跡』 新潟市教育委員会
 1995 『新潟市小丸山遺跡』 新潟市教育委員会
- 小池義人^{ほか} 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池遺跡・寺道上遺跡』 新潟県教育委員会
- 小林巖雄 1995 「I 巻町周辺の地形・地質」『巻町史 資料編 I 考古』1-44 頁 巻町
- 小林正吾 1998 「第3章 森の生い立ちと行方」『里山の植物』105-119 頁 財団法人新潟県都市緑化センター
- 小林昌二 2005 『新大人文選書 1 越の城柵』 高志書院
- 駒見和夫 1992 「井戸をめぐる祭祀」『考古学雑誌』第77巻4号 78-109 頁 日本考古学協会
- サ 坂井秀弥 1989 「北陸型長甕の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 20-26 頁 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥^{ほか} 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会
 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 26-67 頁 新潟県考古学会
- 坂上有紀 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集 上浦遺跡』 新潟県教育委員会
- 笹沢正史 1999 「第2項 窯業」『新潟県の考古学』331-338 頁 高志書院
 2003 「第5章 第1節 時代概説」『上越市史 資料編 2 考古』429-441 頁 上越市
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集
- 島地 謙^{ほか} 1985 『木材の構造』 文永堂出版
- 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラントオパール)」『考古学と植物学』189-213 頁 同成社
- 鈴木邦夫 1989 「第1編 自然」『新津市史 資料編 第1巻 原始・古代・中世』1-17 頁 新津市
- 鈴木浩平 1989 「第5編 地名」『新津市史 資料編 第1巻 原始・古代・中世』455-461 頁 新津市
 1994 「第1節 地形の概観」『新津市史 通史編 上巻』1-6 頁 新津市
- 鈴木俊成 1994 「第Ⅵ章 4B 井戸の祭祀行為について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』227・228 頁 新潟県教育委員会
- 鈴木隆介 1998 『建設技術者のための地形図読図入門 2 低地』 古今書院
- タ 平 慎三 1998 「第5章 植生」『里山の植物』159-206 頁 財団法人新潟県都市緑化センター
- 高橋 学 2003 『平野の環境考古学』 古今書院
- 滝沢規朗^{ほか} 2007 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第175集 谷内 A 遺跡』 新潟県教育委員会
- 田中 靖 1995 『和島村文化財調査報告書第4集 門新遺跡』 和島村教育委員会
 1999 『和島村文化財調査報告書第8集 下ノ西遺跡』 和島村教育委員会
 2003 『和島村文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡』 和島村教育委員会
- 田村 裕 1993 「第3章 荘・保と武士の世」『新津市史 通史編 上巻』129-214 頁 新津市
- 立木宏明^{ほか} 1998 『細池遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
 2004 『山王浦遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
 2008 『沖ノ羽遺跡(Ⅳ) 第15次調査』 新潟市教育委員会
- 立木(土橋)由理子^{ほか} 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第91集 牛道遺跡』 新潟県教育委員会
- ナ 長澤典生^{ほか} 2002 『無頭遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
 2004 『五泉市文化財報告(13) 中田遺跡』 五泉市教育委員会

- 中村 純 1973 『花粉分析』82-110頁 古今書院
 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』187-193頁 日本第四紀学会
 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 21-30頁 日本文化財科学会
 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 大阪自然史博物館
 南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究第4巻生産と流通I』165-174頁 雄山閣出版株式会社
 1992 「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル』No.355 18-22頁 ニューサイエンス社
 1993 「葉・果実・種子」『第四紀試料分析法』276-283頁 日本第4紀学会編 東京大学出版会
 新潟古砂丘グループ 1979 「新潟平野をめぐる地形と特質 - 5 砂丘と平野」『アーバンクボタ』17 2-12頁 株式会社クボタ
 新潟市編 2007 『新・新潟歴史双書2 新潟市の遺跡』新潟市
 能代川改修史編纂委員(編) 1985 『新しい流れをひらく - 能代川改修史 -』新津市役所
 ハ 萩原正博 1986a 「第5章第6節 初期荘園の成立と推移」『新潟県史 通史編I 原始・古代』517-530頁 新潟県
 1986b 「第6章第2節 荘園と国衙領」『新潟県史 通史編I 原始・古代』564-617頁 新潟県
 廣野耕造^{ほか} 1999 『大淵遺跡』新潟市教育委員会
 藤原宏志 1976 「プラントオパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9 15-29頁 日本文化財科学会
 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラントオパール分析法の基礎的研究(5)-プラントオパール分析による水田址の探査-」『考古学と自然科学』17 73-85頁 日本文化財科学会
 星野信明^{ほか} 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第80集 沖ノ羽遺跡II (B地区)』新潟県教育委員会
 細野高伯^{ほか} 2002 『沖ノ羽遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
 マ 向井裕知 1999 「井戸における貯蔵具の使用」『北陸古代土器研究 第8号』93-102頁 北陸古代土器研究会
 望月精司 1997 「第2章第4節 北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』111-138頁 真陽社
 1999 「第5章 須恵器生産関連遺物」『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会
 2001 「須恵器甕の製作痕跡と成形技法」『北陸古代土器研究 第9号 須恵器貯蔵具を考えるII つぼとかめのつくり方』27-52頁 北陸古代土器研究会
 2002 『二ツ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会
 森田信博^{ほか} 2003 「第3章 十二田遺跡」『吉田町文化財調査報告書第11集 十二田・江添E遺跡』11-17頁 吉田町教育委員会
 ヤ 山崎 天 1999 『五泉市文化財報告(4) 小実山遺跡』五泉市教育委員会
 山崎 天^{ほか} 2004a 『五泉市文化財報告(10) 新田遺跡』五泉市教育委員会
 2004b 『五泉市文化財報告(12) 笥下遺跡』五泉市教育委員会
 2004c 『五泉市文化財報告(14) 巳ノ明遺跡』五泉市教育委員会
 2004d 『五泉市文化財報告(15) 住吉田遺跡・住吉田南遺跡』五泉市教育委員会
 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別1号 植生史研究会
 横山浩一 2003 『古代技術論攷』岩波書店
 ワ 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
 渡邊朋和^{ほか} 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書II』新津市教育委員会
 1998 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書III』新津市教育委員会
 2001 『寺道上遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
 2002 『中谷内遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
 渡邊ますみ 1990 「新潟県における古代・中世の井戸」『新潟考古学談話会会報』第6号 13・14頁 新潟考古学談話会
 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』黒埼町教育委員会

別表1 上浦A遺跡 遺構計測表

覆土A類 自然堆積によると思われるもの。遺構の埋没原因は主に土砂の流入による。埋没まである程度の期間を要するため、土層断面がレンズ状・ラミナ状を呈する。
 覆土B類 短時間に埋め戻したと思われるもの。地山がブロック状に混入する。A類のような堆積は確認できないが、土砂の投げ込み方向やその単位を観察できる場合がある。

図版No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規 模 (cm)					底面座標 (m)	形 態		覆土	遺物の有無	遺物図版頁
						上 端		下 端		深 度		平 面	断 面			
						長軸	短軸	長軸	短軸							
SK2	6J21		平安	IV	N-10°-W	46	38	40	31	6	1.76	楕円形	皿形	B		
SX3	6I20・25, 6J16・21		平安	IV	計測不能	-	-	-	-	48	1.33	不整形	不整形	B		
SK4	6I13・18		平安	IV	N-38°-W	62	(54)	29	25	9	1.71	不整楕円形	皿形	B		
SX5	6I13・14		平安	IV	N-10°-W	104	94	92	(84)	10	1.66	不整形	不整皿形	B		
SE7	6I11・12・16・17		平安	IV	N-67°-W	277	210	44	30	95	0.85	楕円形	漏斗形	B	○	
SX8	7I2・3・7・8		平安	IV	N-2°-W	-	-	-	-	12 (16)	1.68	不整形	皿形	A	○	
SX9	6H13・18・23		平安	IV	N-7°-W	224	144	182	92	47	1.31	不整楕円形	不整皿形	B	○	
SX10	6H17・22・23, 7H2・3		平安	IV	N-23°-W	445	166	350	88	62	1.24	不整形	逆台形	B		
SX11	6G20・25		平安	IV	N-80°-W	168	(156)	148	(140)	9	1.59	不整形	不整皿形	B		
SD12	6G17~19・23~25, 6H217G4・5・9・10, 7H2・6・7・11・12		近代	II	N-47°-W	-	324	-	東:54 西:90	東:34 (85) 西:49 (97)	E:1.30 W:1.18			B		
SD13	7F15, 7G11~13		平安	III b	N-8°-W	-	(134)	-	(52)	23 (32)	1.38	溝状	不整皿形	A	○	

別表2 上浦A遺跡 遺構出土古代土器器種構成率

1 平安時代の遺構から出土した土器（土師器・須恵器）の構成比率を示した表である。
 2 土器の計測法は口縁部残存率法（宇野1992、春日1994）とそれを応用した底部残存率法により計測した。また、併せて口縁数・底部数を示した。
 3 口縁・底部残存率によって得られた数値は7/36を示し、それぞれ口縁値・底残値と略記した。

遺構名	種別 計測法	食膳具		煮炊具					貯蔵具		合 計				
		土師器		土師器			須恵器		須恵器						
		無台碗		長囊	小囊	鍋	大囊	長頸壺							
SX3	口残値														
	口縁数(点)														
	底残値														
	底部数(点)														
	総点数(点)	1	100%										1.0	100.00%	
SE7	口残値	0.861	83.75%		0.167	16.25%							1.028	100.00%	
	口縁数(点)	2.0	66.67%		1.0	33.33%							3.0	100.00%	
	底残値	1.250	100.00%										1.250	100.00%	
	底部数(点)	2.0	100.00%										2	100.00%	
	総点数(点)	10.0	52.63%	4.0	21.05%	1.0	5.26%	1.0	5.26%	2.0	10.53%	1.0	5.26%	19	100.00%
SX8	口残値	0.139	100.00%										0.139	100.00%	
	口縁数(点)	1.0	100.00%										1.0	100.00%	
	底残値														
	底部数(点)														
	総点数(点)	1.0	100.00%											1.0	100.00%
SX9	口残値														
	口縁数(点)														
	底残値														
	底部数(点)														
	総点数(点)	1.0	33.33%	1.0	33.33%							1.0	33.33%	3.0	100.00%
SD13	口残値	0.083	50.00%		0.083	50.00%							0.166	100.00%	
	口縁数(点)	1.0	100.00%										1.0	100.00%	
	底残値														
	底部数(点)														
	総点数(点)	1.0	50.00%			1.0	50.00%							2.0	100.00%
総 計	口残値	2.0	60.61%	5.0	15.15%	3.0	9.09%	1.0	3.03%	2.0	6.06%	2.0	6.06%	33.0	100.00%
	口縁数(点)	20.0	60.61%	5.0	15.15%	3.0	9.09%	1.0	3.03%	2.0	6.06%	2.0	6.06%	33.0	100.00%
	底残値														
	底部数(点)	20.0	60.61%	5.0	15.15%	3.0	9.09%	1.0	3.03%	2.0	6.06%	2.0	6.06%	33.0	100.00%
	総重量(g)	186.2	16.71%	93.9	8.43%	23.7	2.13%	109.9	9.86%	678.4	60.88%	22.2	1.99%	1,114.3	100.00%

※ SD12は近代の遺構のため、除外した。

別表3 上浦A遺跡 遺物観察表(土器)

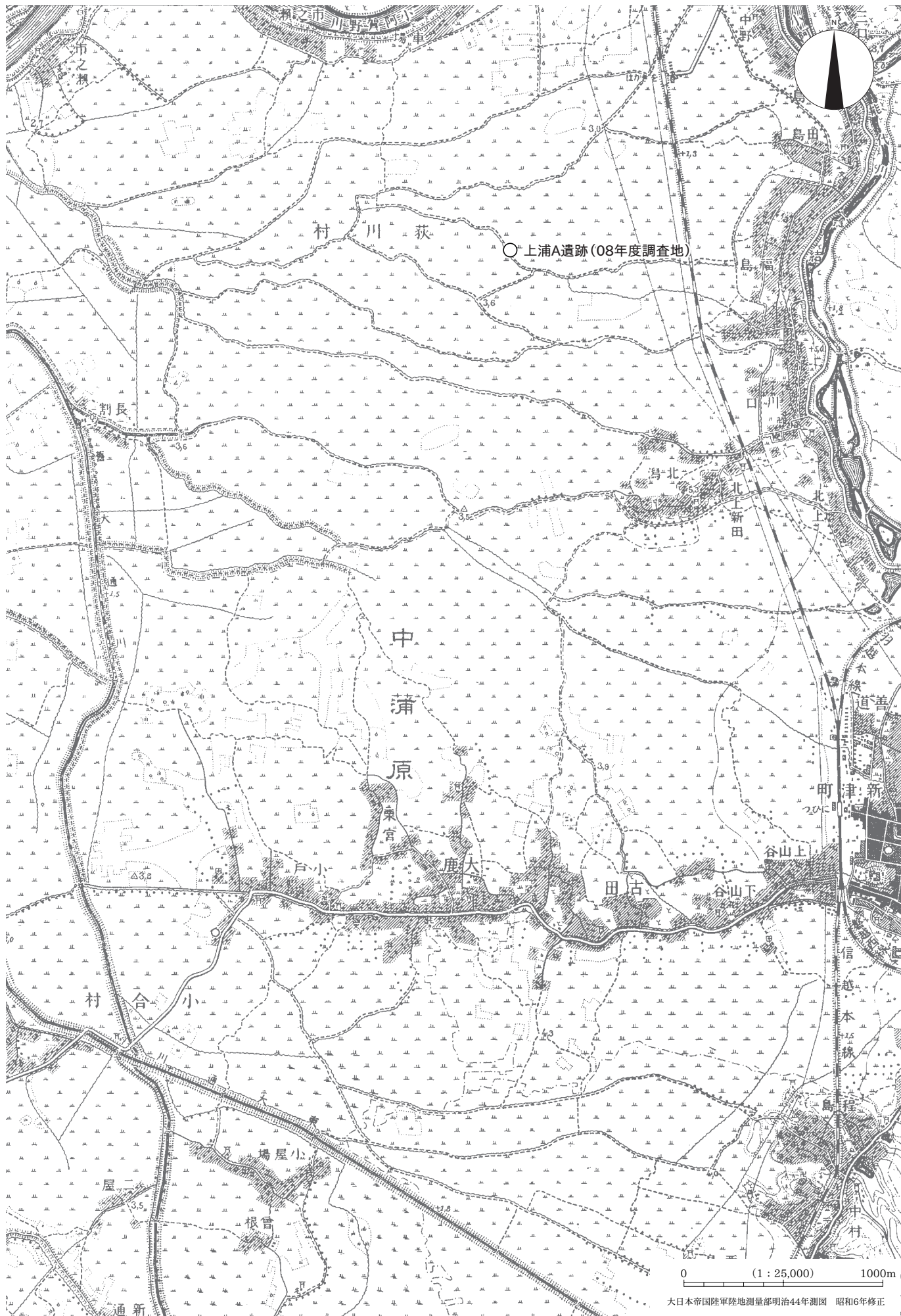
凡例

- 1 出土位置 遺構名・グリッド名を記した。
- 2 出土層位 遺物の出土した層位について記載した。アラビア数字のものは遺構出土、ローマ数字は包含層を示す。
- 3 器高指数 器高/口径×100
- 4 底径指数 底径/口径×100
- 5 法量 口径・底径・器高を示す。遺存率が低く、推定値によるものは、括弧を付けた。
- 6 胎土 須恵器・土師器について胎土中に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰石、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。
- 7 色調 『新版標準土色帳』(小山・竹原 1967)の記号を記した。
- 8 焼成 酸化炭焼成・還元炭焼成の区別を記した。須恵器で酸化としたものは褐色あるいは橙色の色調で軟質なものを表す。白色・灰白色のものは含めていない。
- 9 手法 特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「糸切り」「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。「無調整」はそれが認められないもの。回転方向は回転台の回転方向を表す。底部調整やロクロケズリ・ロクロナデから判断した。
- 10 遺存率 分数表示(36分割)で遺存割合を示した。

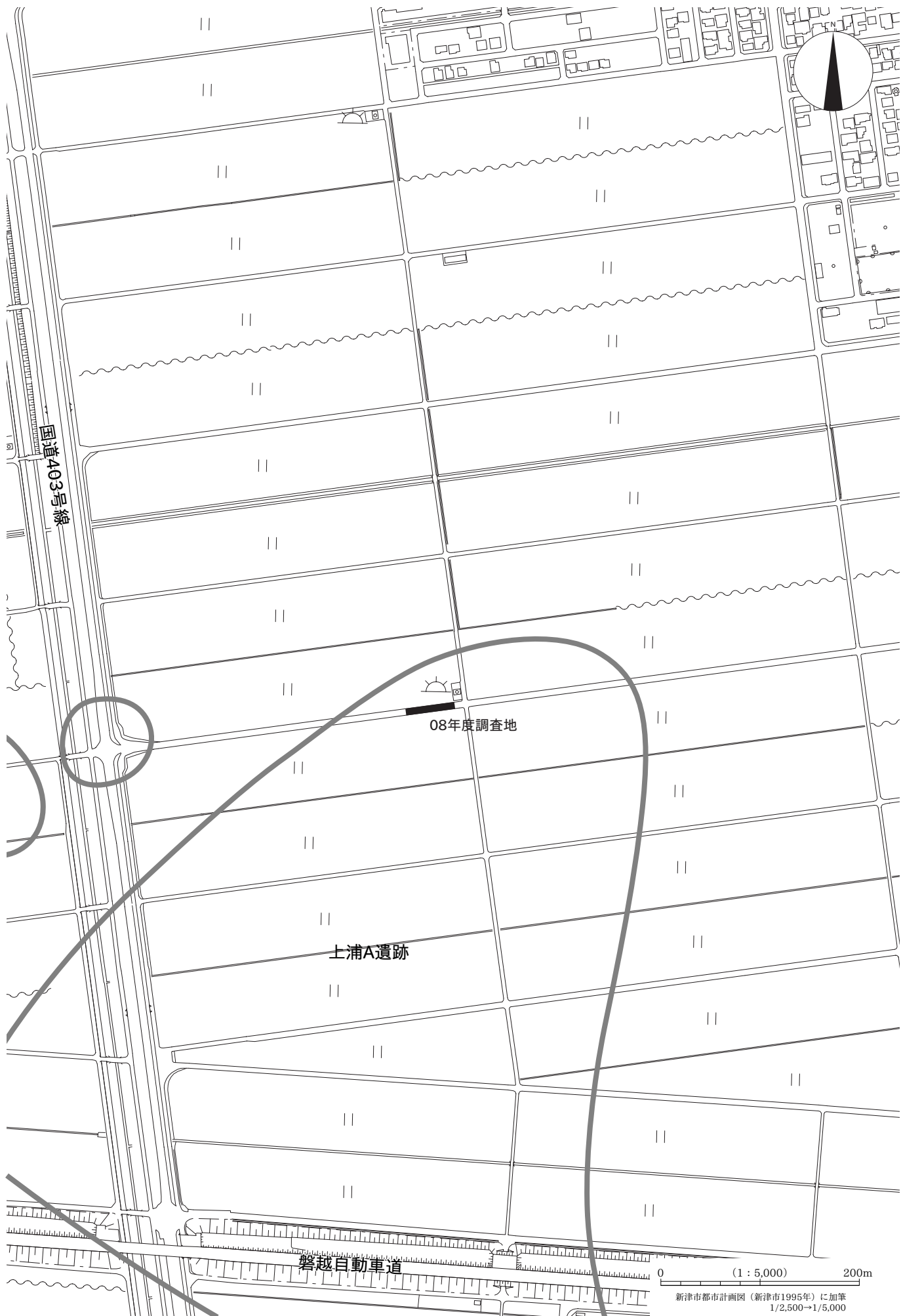
図版No.	報告No.	出土位置		層位	種別	器種	法量(cm)				器高指数	底径指数	胎土		色調		焼成	手法			遺存率(36)			備考			
		遺構名	グリッド				口径	底径	器高	含有物			分類	産地	色記号	色名		外面	内面	底部	回転方向	口縁部	底部		全体		
1	SE7	6117	6	須恵器	大甕	(24.0)	-	-	-	-	-	石・長	C1	阿賀北	2.5Y5/2	暗灰黄	酸化	タタキメ(平行)	当て具痕(同心円)	-	-	-	-	-	-	口縁部打ち欠き	
2	SE7	6117	6	須恵器	大甕	-	-	-	-	-	-	長・チ	A2	小泊	5PB5/1	青灰	還元	タタキメ(格子)、ナデ	当て具痕(同心円・平行)	-	-	-	-	-	-	胴部破片	
3	SE7	6117	10	土師器	無台碗	12.4	5.5	4.3	34.7	44.4	-	長・雲・焼・角	E	新津	10YR5/3	にぶい黄褐	-	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	26	36	-	-	外面タール付着	
4	SE7	6117	10	土師器	無台碗	13.0	6.2	3.9	30.0	47.6	-	石・雲・角	E	新津	7.5YR6/2	灰褐	-	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	左	3	8	-	-	外面タール付着	
5	SE7	6117	10	土師器	小甕	13.8	-	-	-	-	-	雲・焼	E	新津	7.5YR6/4	にぶい褐	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	5	-	-	-	-	
6	SE7	6117	10	土師器	鍋	-	-	-	-	-	-	石・長・雲	C1	阿賀北	7.5YR4/1	褐灰	-	タタキメ(平行)→ナデ	当て具痕(平行)	-	-	-	-	-	-	胴部破片	
7	SD12	7G5	1	須恵器	有台杯	(13.0)	-	-	(3.5)	-	-	石・雲	B1	新津	2.5Y6/1	黄灰	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	3	-	-	-	-	
8	SD12	7G5	1	須恵器	有台杯	(13.5)	(6.7)	(3.7)	(28.4)	(51.5)	-	長	B2	新津	2.5Y7/2	灰黄	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	3	-	-	-	-	
9	SX8	716	1	土師器	無台碗	(13.0)	-	-	-	-	-	雲・焼・角	E	新津	10YR8/3	浅黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	4	-	-	-	-	
10	SD13	7G11	2	土師器	無台碗	(13.8)	-	-	-	-	-	雲・焼	D1	新津	2.5Y7/2	灰黄	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	
11	包含層	6G21	III b	須恵器	無台杯	(12.0)	(7.0)	(3.0)	(2.5)	(58.3)	-	長・雲	A1	小泊	N5/0	灰	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	4	5	-	-	口縁破片	
12	包含層	6J25	III b	須恵器	無台杯	-	(6.8)	-	-	-	-	長・海	A1	小泊	10Y6/1	灰	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	不明	-	7	-	-	-	口縁破片
13	包含層	6I20	III b	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	-	-	長・雲	A1	小泊	N6/0	灰	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	-	-	蓋身破片	
14	包含層	6H24	III b	須恵器	広口壺	-	-	-	-	-	-	長・雲	A2	小泊	10YR6/1	褐灰	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	-	-	-	頸部破片
15	包含層	6I23	III b	須恵器	横瓶	-	-	-	-	-	-	長・雲	A2	小泊	N6/0	灰	還元	タタキメ(平行)→ナデ	当て具痕(同心円)、指圧痕	-	-	-	-	-	-	-	胴部破片、閉塞痕あり。
16	包含層	7G2	III b	土師器	無台碗	12.5	4.9	3.7	29.6	39.2	-	長・雲・焼	D1	新津	10YR8/3	浅黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちケズリ	左	36	36	36	-	-	
17	包含層	7F9	III b	土師器	無台碗	(13.8)	(7.1)	(4.0)	(28.9)	(51.4)	-	長・雲・チ・焼	D1	新津	10YR7/2	にぶい黄褐	-	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	右	2	18	-	-	-	-
18	包含層	6I18	III b	土師器	無台碗	12.8	-	-	-	-	-	雲・焼・角	F	新津	7.5YR6/4	にぶい橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	口縁破片
19	包含層	6J12	III b	土師器	無台碗	-	(6.0)	-	-	-	-	長・雲	D2	新津	2.5Y7/3	浅黄	-	ナデ	ナデ	ケズリ→ナデ	不明	-	5	-	-	-	底部破片
20	包含層	6J8	III b	土師器	長甕	(21.7)	-	-	-	-	-	石・長・雲・焼	D2	新津	10YR8/4	浅黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	口縁破片
21	包含層	6K2	III b	土師器	長甕	(21.0)	-	-	-	-	-	長・雲・焼	D2	新津	10Y8/6	明黄褐	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	口縁破片
22	包含層	6J23	III b	土師器	長甕	(22.0)	-	-	-	-	-	長・雲・焼・角	D2	新津	10YR7/3	にぶい黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	-
23	包含層	6J17	III b	土師器	小甕	-	(6.0)	-	-	-	-	長・雲・角	E	新津	7.5YR6/3	にぶい褐	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ→ナデ	-	4	-	-	-	-	-
24	包含層	6J21	III b	土師器	小甕	-	(7.1)	-	-	-	-	石・長・雲・チ	D2	新津	2.5Y7/3	浅黄	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	6	-	-	-	-	-
25	包含層	6J23	III b	土師器	小甕	-	(7.0)	-	-	-	-	長・雲・焼	D2	新津	10YR6/4	にぶい黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	不明	-	5	-	-	-	内面被熱
26	包含層	6I24	III b	土師器	鍋	(38.0)	-	-	-	-	-	石・長・雲	D2	新津	10YR7/3	にぶい黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	口縁破片
31	立会	7J7	III	須恵器	無台杯	(12.2)	(8.2)	(3.0)	(24.6)	(67.2)	-	長・雲	A1	小泊	2.5GY6/1	オリーブ灰	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	不明	3	7	-	-	-	-
32	立会	6M14	III	須恵器	無台杯	(12.0)	(8.0)	(3.4)	(28.3)	(66.7)	-	長・雲	B2	新津	2.5Y6/1	黄灰	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	2	9	-	-	-	-
33	表採	不明	-	須恵器	無台杯	-	(8.1)	-	-	-	-	長・雲	B2	新津	7.5YR6/4	にぶい橙	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	右	-	8	-	-	-	-
34	立会	5Q21	III	須恵器	無台杯	-	6.8	-	-	-	-	石・長・雲	C1	阿賀北	10Y8/1	灰白	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	左	-	13	-	-	-	-
35	立会	6J2	III	須恵器	杯蓋	-	-	-	-	-	-	石・長・雲	A1	小泊	N7/0	灰白	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	-	-	-	蓋身破片
36	立会	6M14	III	須恵器	長頸壺	-	-	-	-	-	-	長・雲・角	A1	小泊	5Y7/1	灰色	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	-	-	-	肩部破片
37	表採	不明	-	須恵器	大甕	-	-	-	-	-	-	石・長・雲・角	A2	小泊	2.5Y6/1	黄灰	還元	タタキメ(平行)	当て具痕(同心円)	-	-	-	-	-	-	-	-
38	立会	6J5	III	土師器	無台碗	(14.0)	-	-	-	-	-	長・雲・焼	D1	新津	10YR7/3	にぶい黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	口縁破片
39	立会	6J5	III	土師器	無台碗	-	(5.0)	-	-	-	-	石・長・焼	F	新津	10YR7/3	にぶい黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	不明	-	12	-	-	-	器壁薄い
40	立会	6J2	III	土師器	長甕	(21.5)	-	-	-	-	-	長・雲・焼	D1	新津	7.5YR7/6	橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ→ナデ	不明	-	1	-	-	-	口縁破片
41	立会	7J7	III	土師器	長甕	(19.8)	-	-	-	-	-	石・雲	D1	新津	10YR8/3	浅黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	1	-	-	-	-	口縁破片
42	立会	6N12	III	土師器	鍋	(38.0)	-	-	-	-	-	長・雲・焼	D2	新津	10YR8/4	浅黄橙	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	2	-	-	-	-	口縁破片

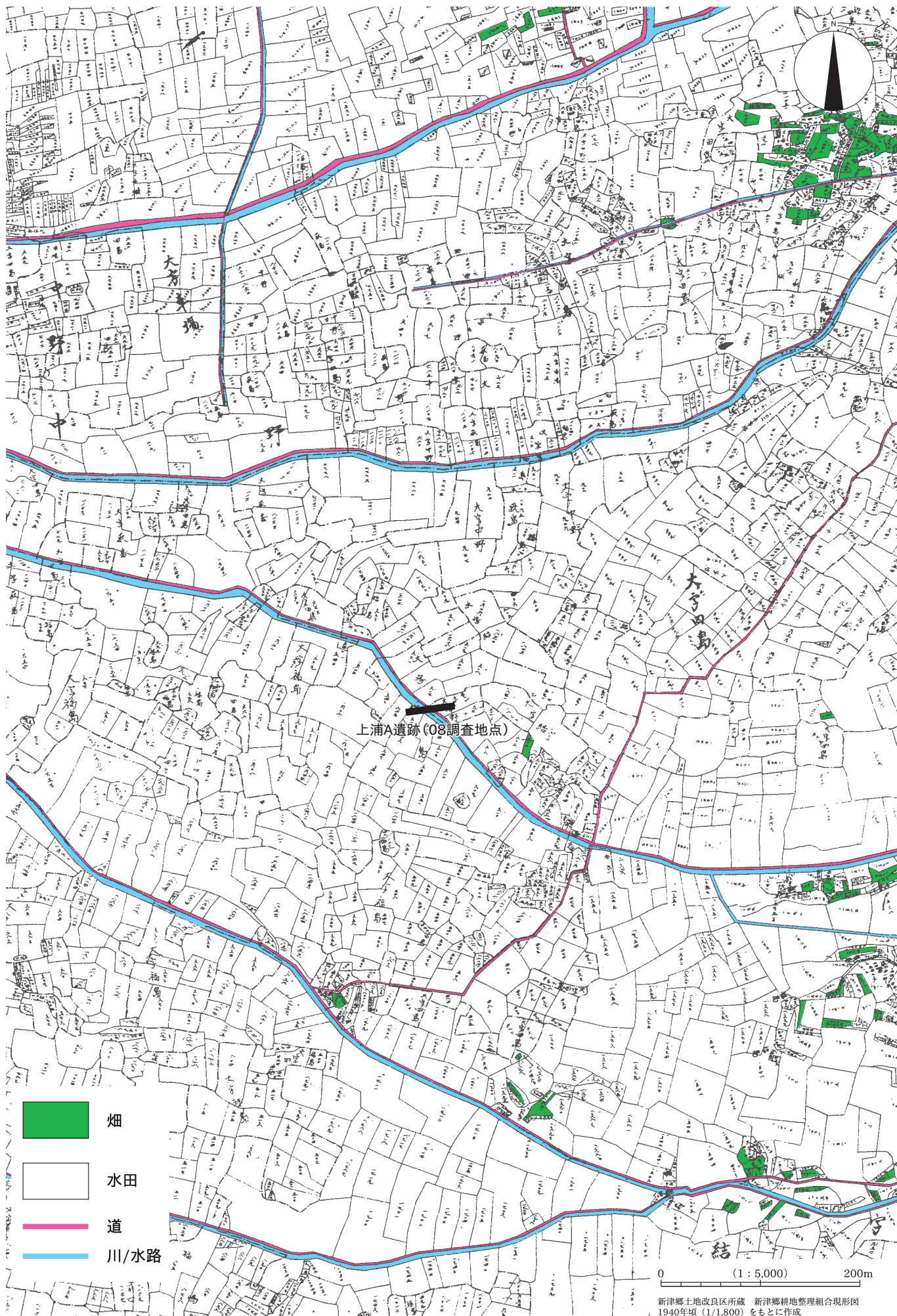
別表4 上浦A遺跡 搬入礫観察表

図版No.	報告No.	遺構	グリッド	層位	石材	法量				備考
						長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
27	SE7	6117	6	安山岩	266.00	104.00	87.00	3,400	全体に被熱	
28	SE7	6117	2	頁岩	88.50	87.00	75.00	603		
29	SE7	6117	6	流紋岩	87.00	42.00	32.00	102	短軸方向に折断	
30	SE7	6117	10	流紋岩質凝灰岩	168.00	162.00	117.00	1,920	被熱により劣化	

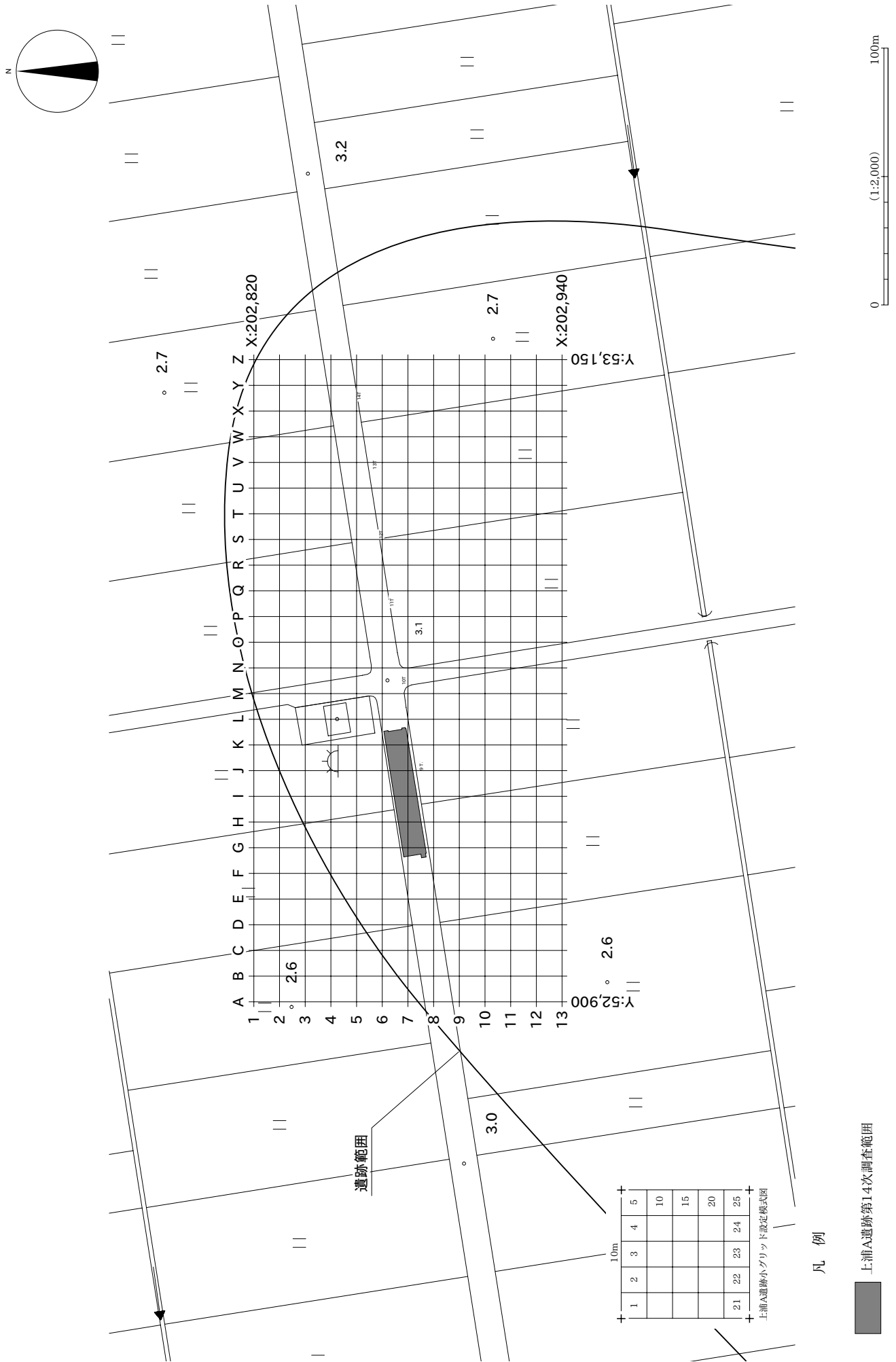


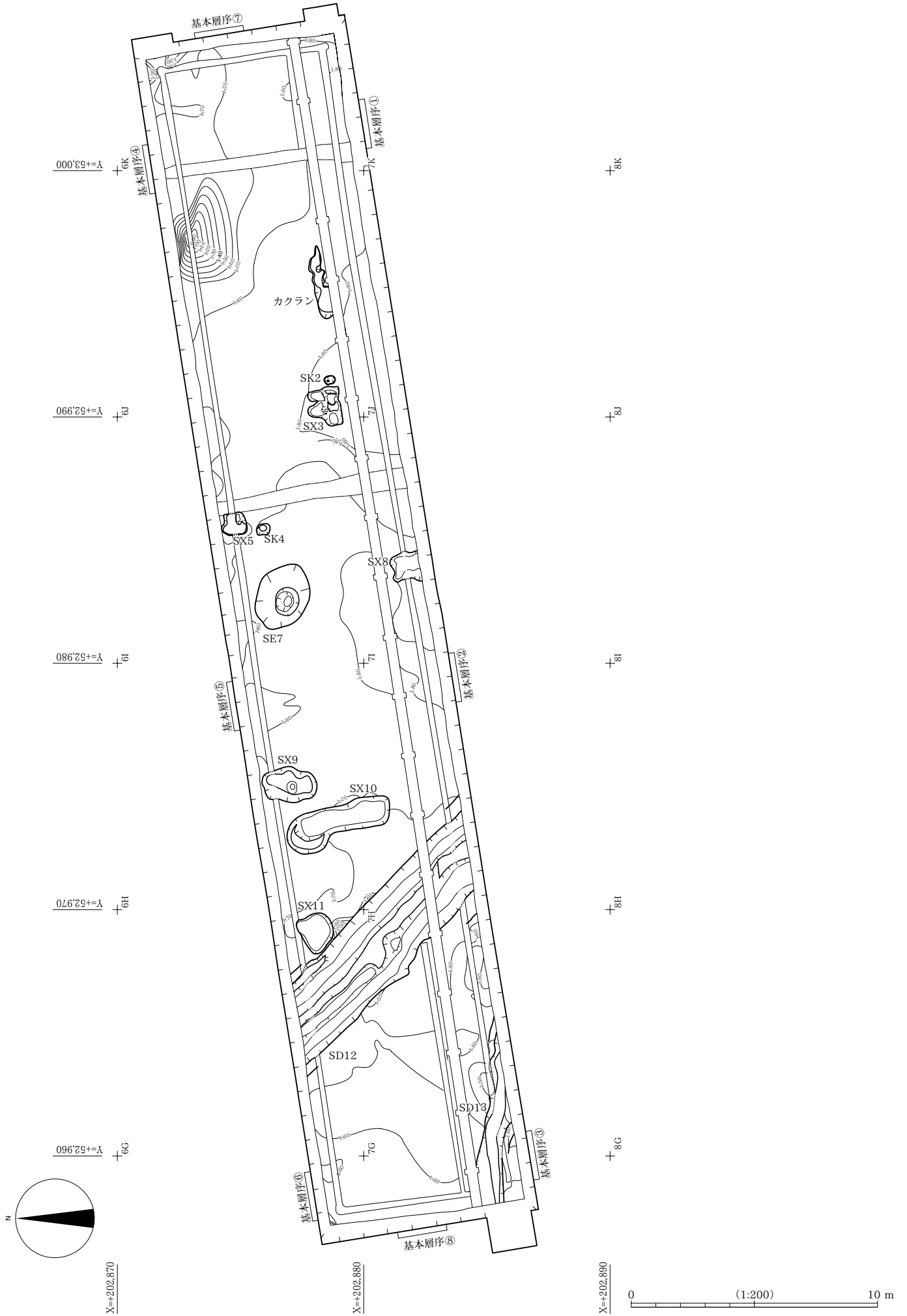


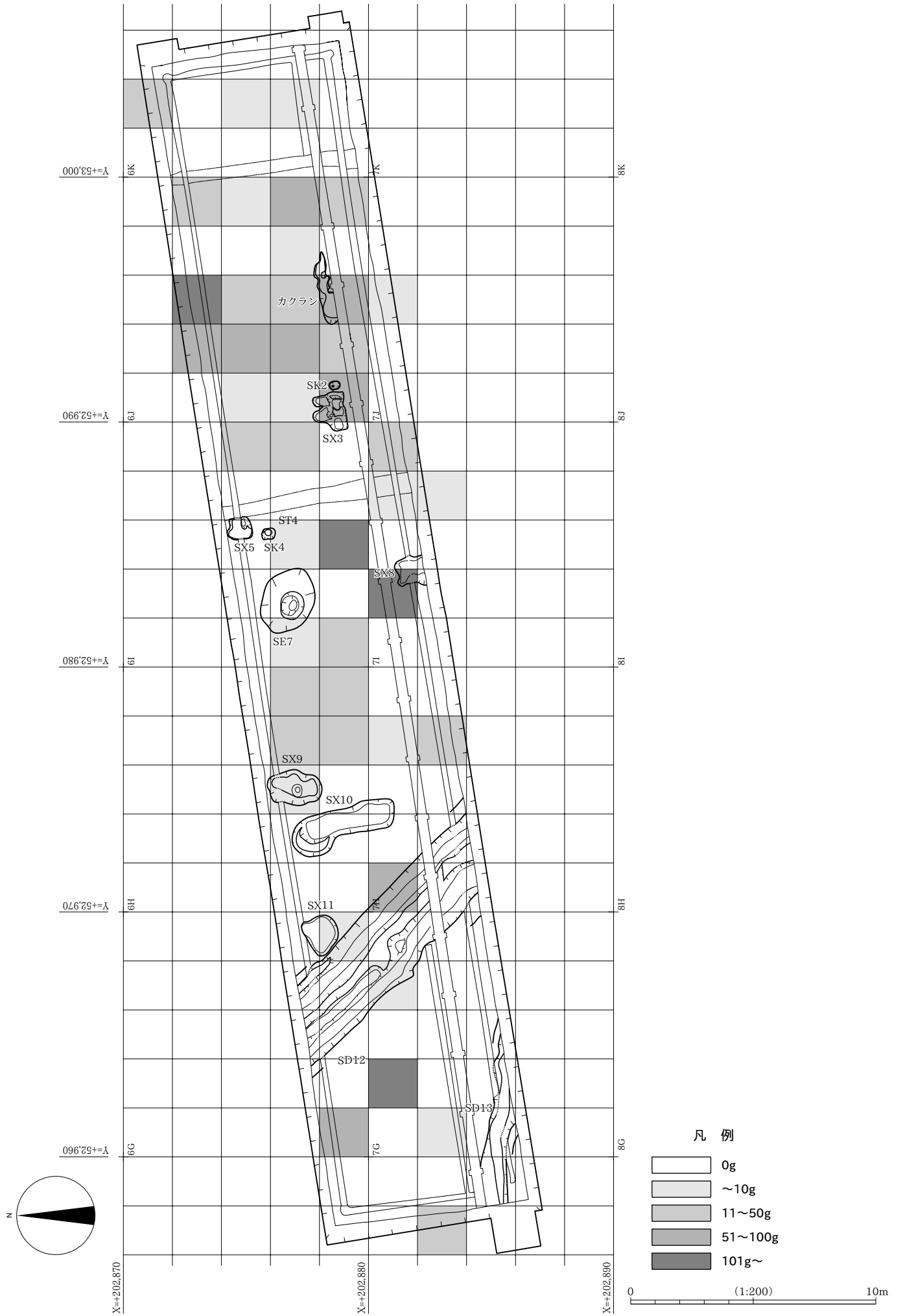


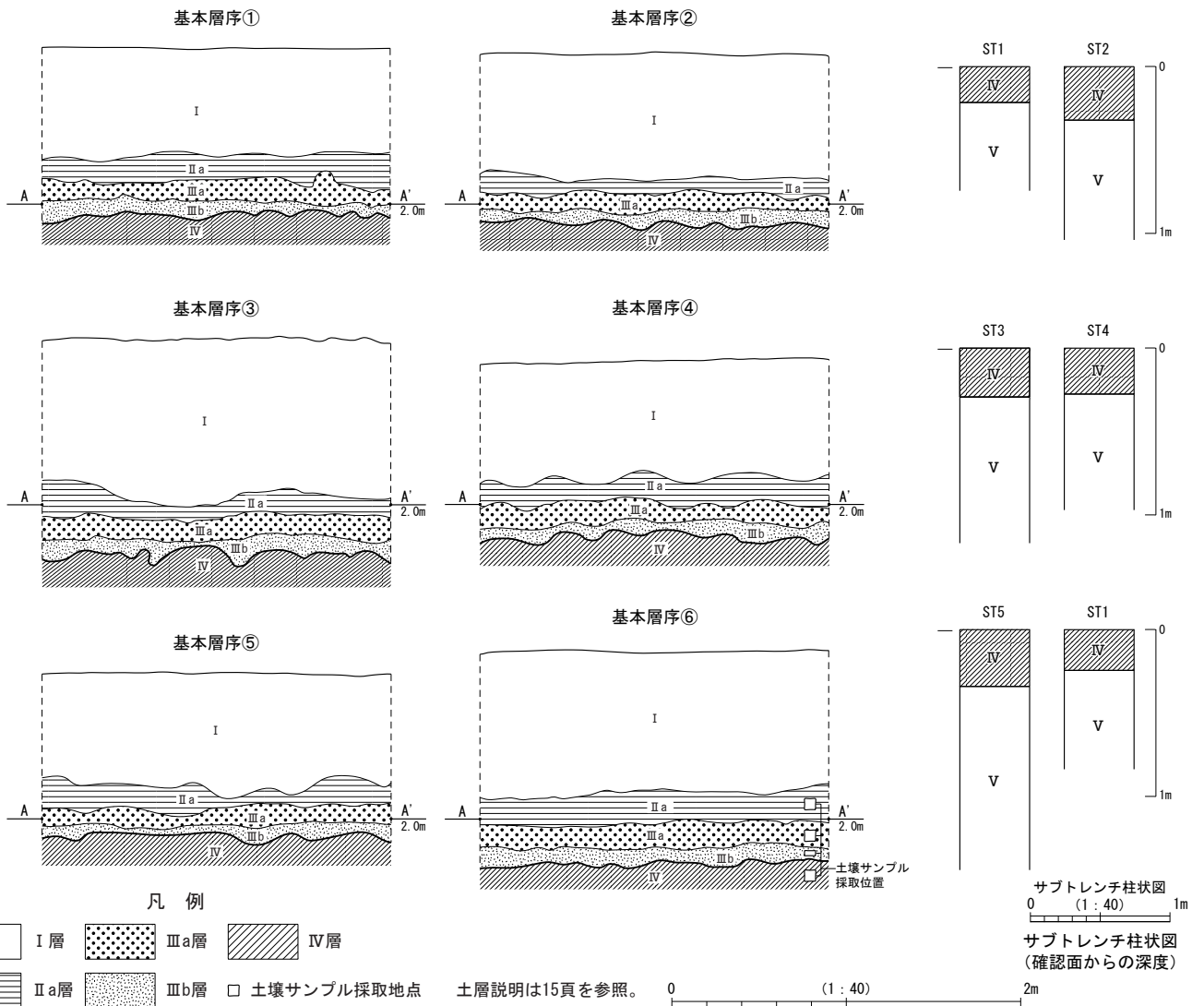
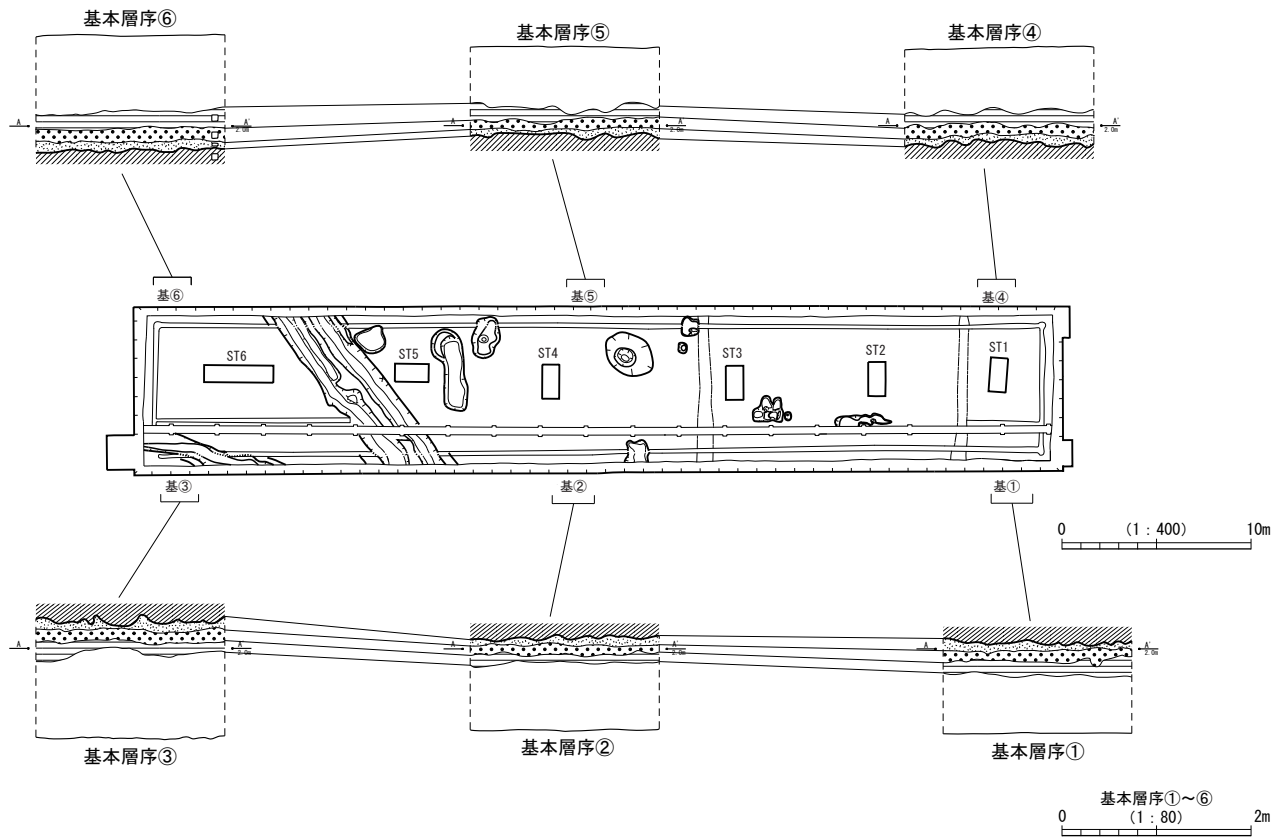


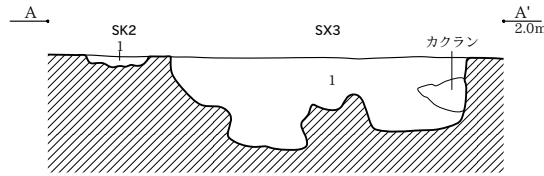
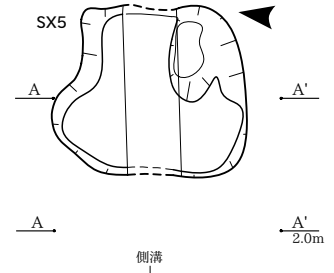
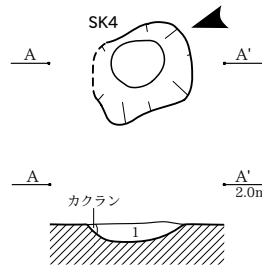
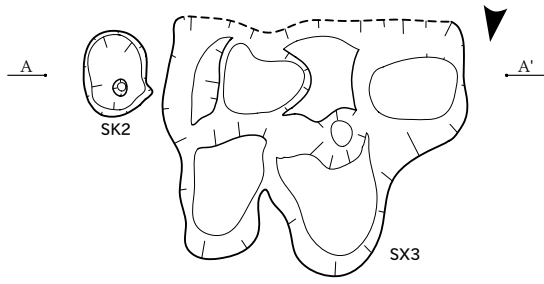
0 (1:5,000) 200m
新津郷土地改良区所蔵 新津郷耕地整理組合現形図
1940年頃 (1/1,800) をもとに作成









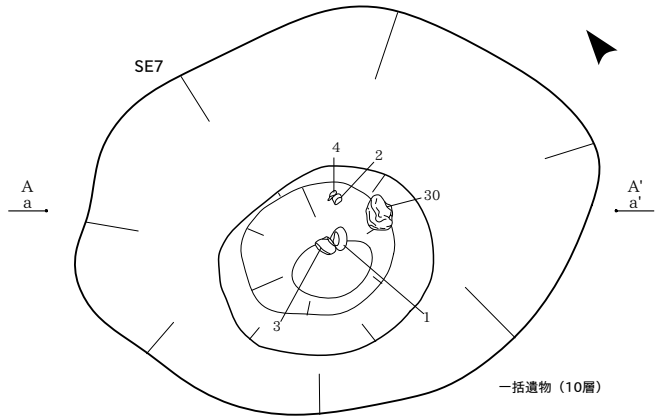
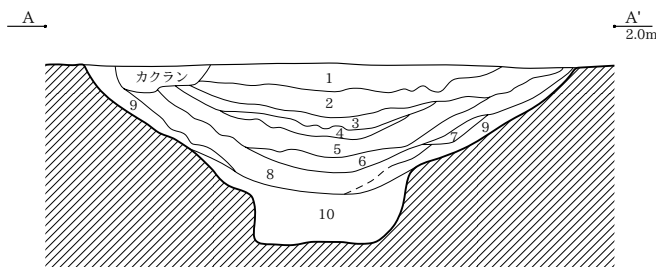
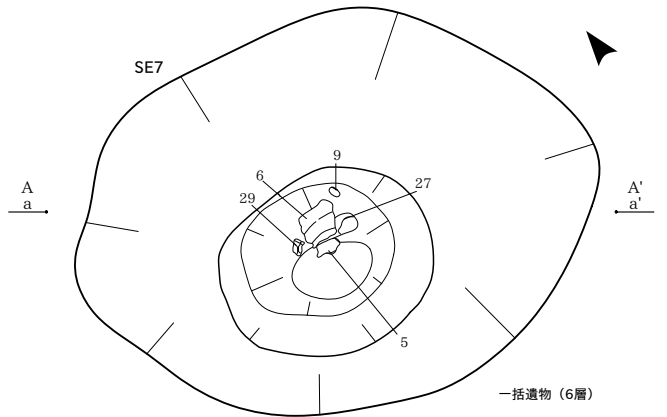
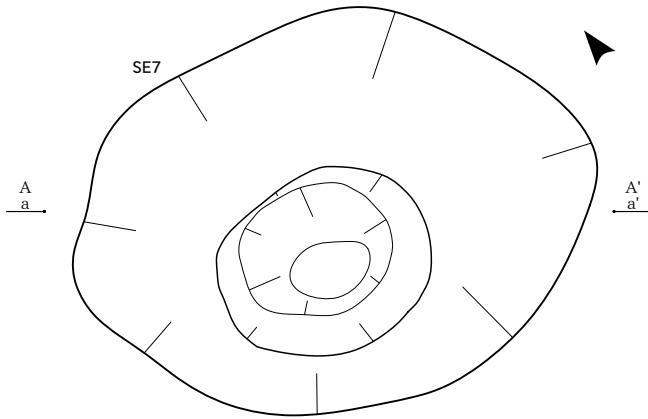


SK4
1.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性・しまり非常にあり。IV層土 (シルト) ブロック状にやや多く混入。

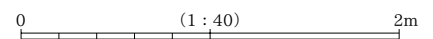
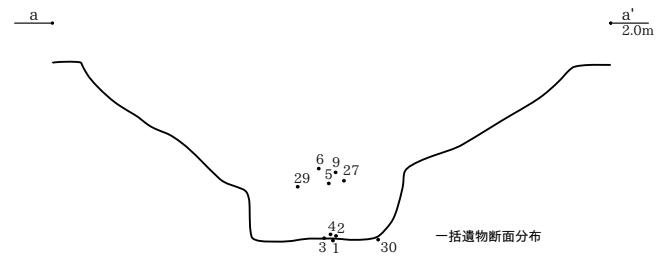
SX5
1.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性非常にあり。しまりあり。IV層土 (シルト) マール状に混入。褐色鉄鉱混入。

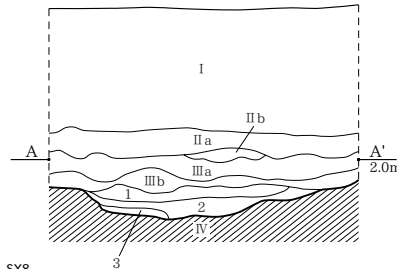
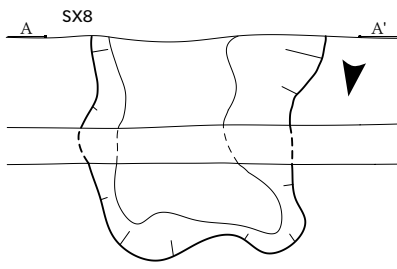
SK2
1.黒褐色粘質シルト (10YR3/1) 粘性・しまりあり。IV層土 (シルト) 小ブロック状に少量混入。

SX3
1.黒褐色粘質シルト (10YR3/1) 粘性・しまりあり。IV層土 (シルト) 大ブロック状に多く混入。褐色鉄鉱混入。人為的な埋戻し土。

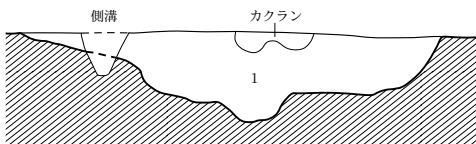
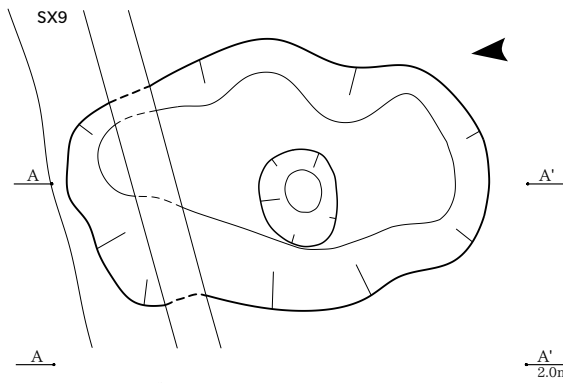


SE7
1.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性非常にあり。しまりあり。φ1mmの炭化物少量混入。IV層土 (シルト) 小ブロック状に少量混入。
2.黒色粘質シルト (2.5Y2/1) 粘性非常にあり。しまりあり。灰混入。
3.黒色粘質シルト (2.5Y2/1) 粘性非常にあり。しまりあり。2層より灰の比率が高く。色調暗い。
4.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性非常にあり。しまりあり。IV層土 (シルト) が粒子状に少量混入。
5.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性非常にあり。しまりあり。φ1mmの炭化物少量混入。4層よりやや暗い。
6.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) と黒色粘質シルト (2.5Y2/1) の互層堆積 粘性非常にあり。しまりあり。灰が層状に混入。
7.黄褐色粘質シルト (2.5Y4/1) 粘性・しまりあり。IV層土 (シルト) が混入。
8.黄褐色粘質シルト (2.5Y4/1) 粘性・しまりあり。φ1mmの炭化物少量混入。
9.黄褐色粘質シルト (2.5Y4/1) と細砂の混合層 粘性・しまりややあり。IV層土の崩落土。
10.オリブ灰色細砂 (2.5GY5/2) 粘性ややあり。しまりあり。壁面崩落土を基質とし、8・9層がブロック状に少量混入。





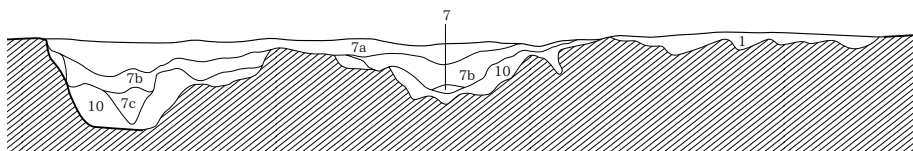
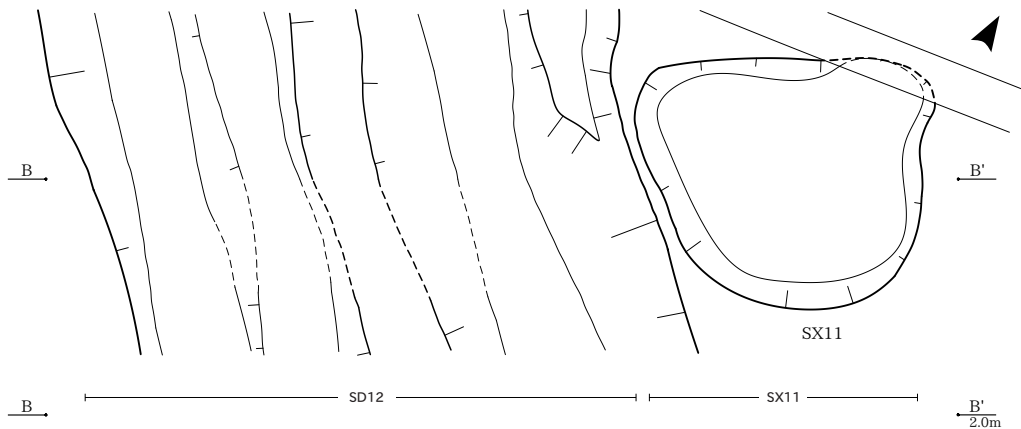
- SX8
- 1.黒色粘質シルト (2.5Y2/1) 粘性非常にあり、しまりあり。
φ1mmの炭化物ごく少量混入。褐色鉄銹混入。
 - 2.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性非常にあり、しまりあり。
φ1mmの炭化物ごく少量混入。褐色鉄銹混入。
 - 3.黄灰色粘質シルト (2.5Y4/1) 粘性非常にあり、しまりあり。
φ1mmの炭化物ごく少量混入。褐色鉄銹混入。
IV層土(シルト) マーブル状に混入。



SX9

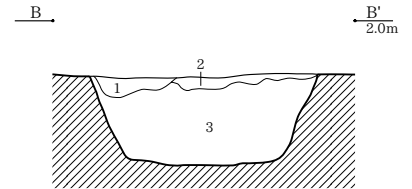
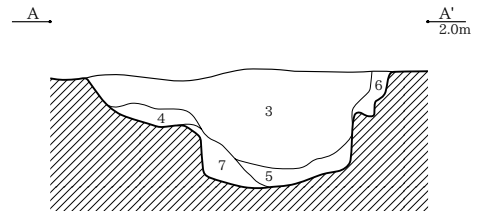
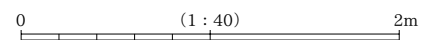
- 1.黒褐色粘質シルト (10YR3/1) 粘性・しまりあり。IV層土(シルト) 大ブロック状に多く混入。
褐色鉄銹混入。人為的な埋戻し土。

SX11・SD12



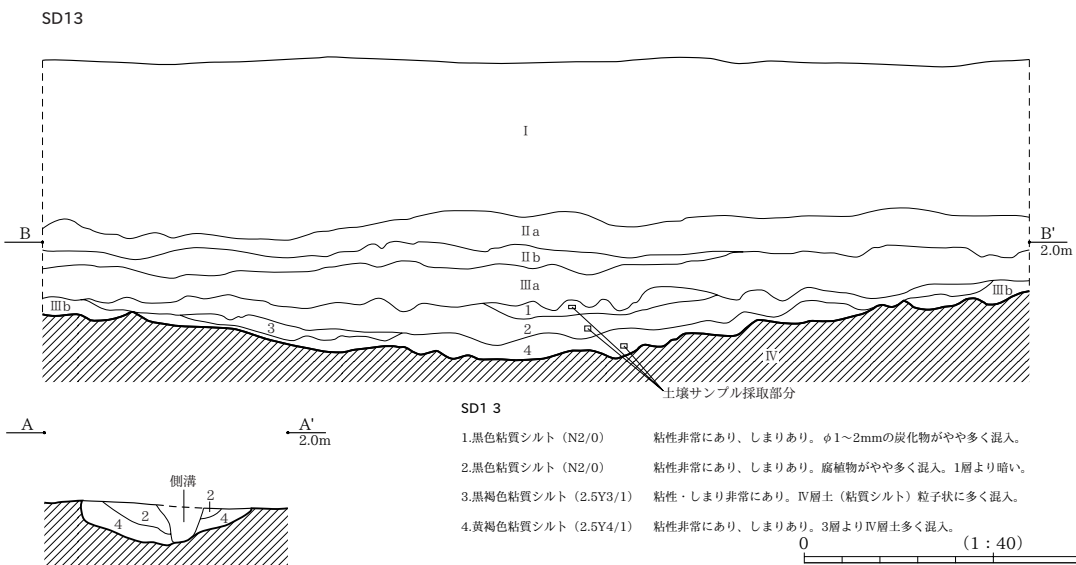
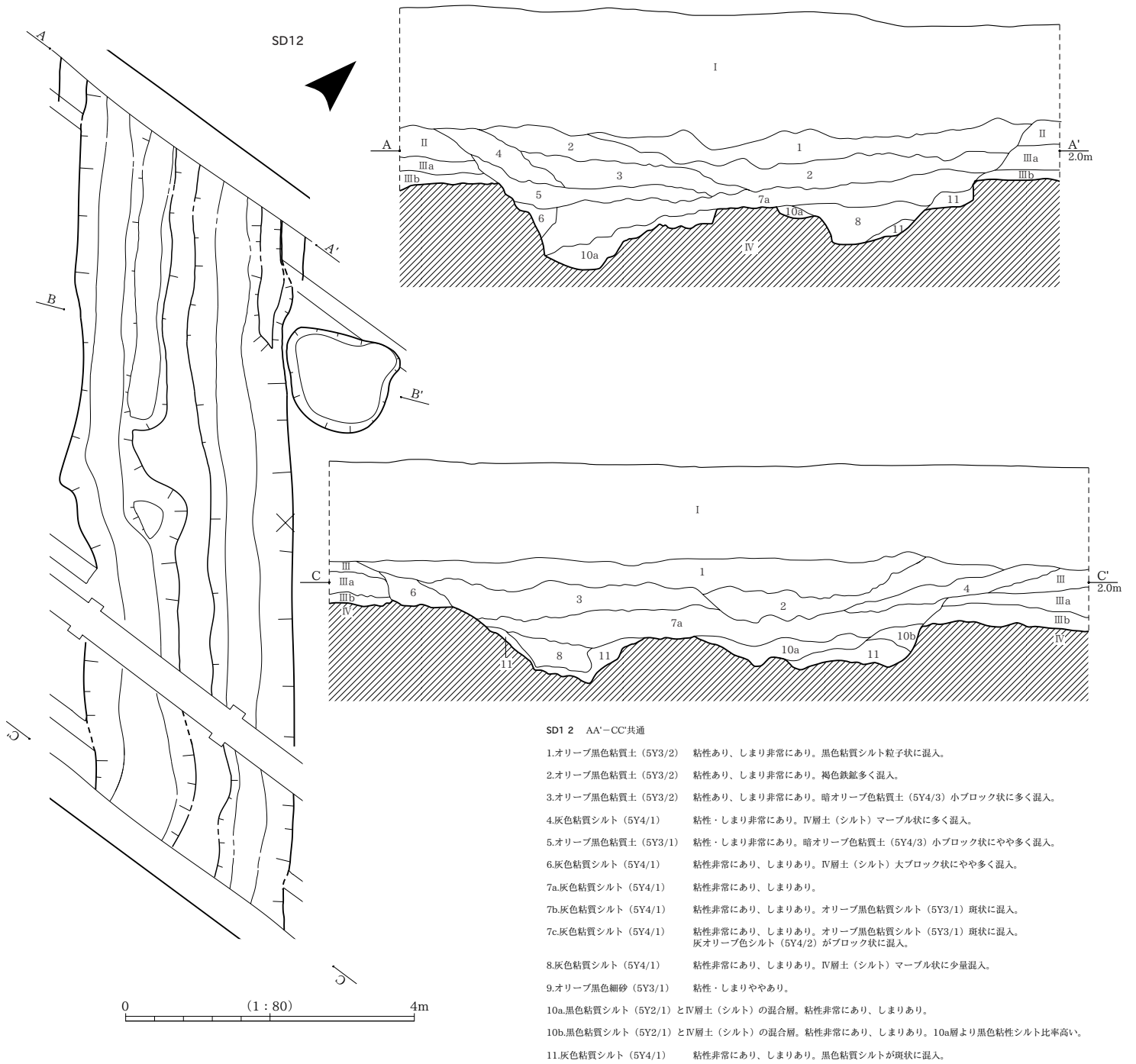
SX11

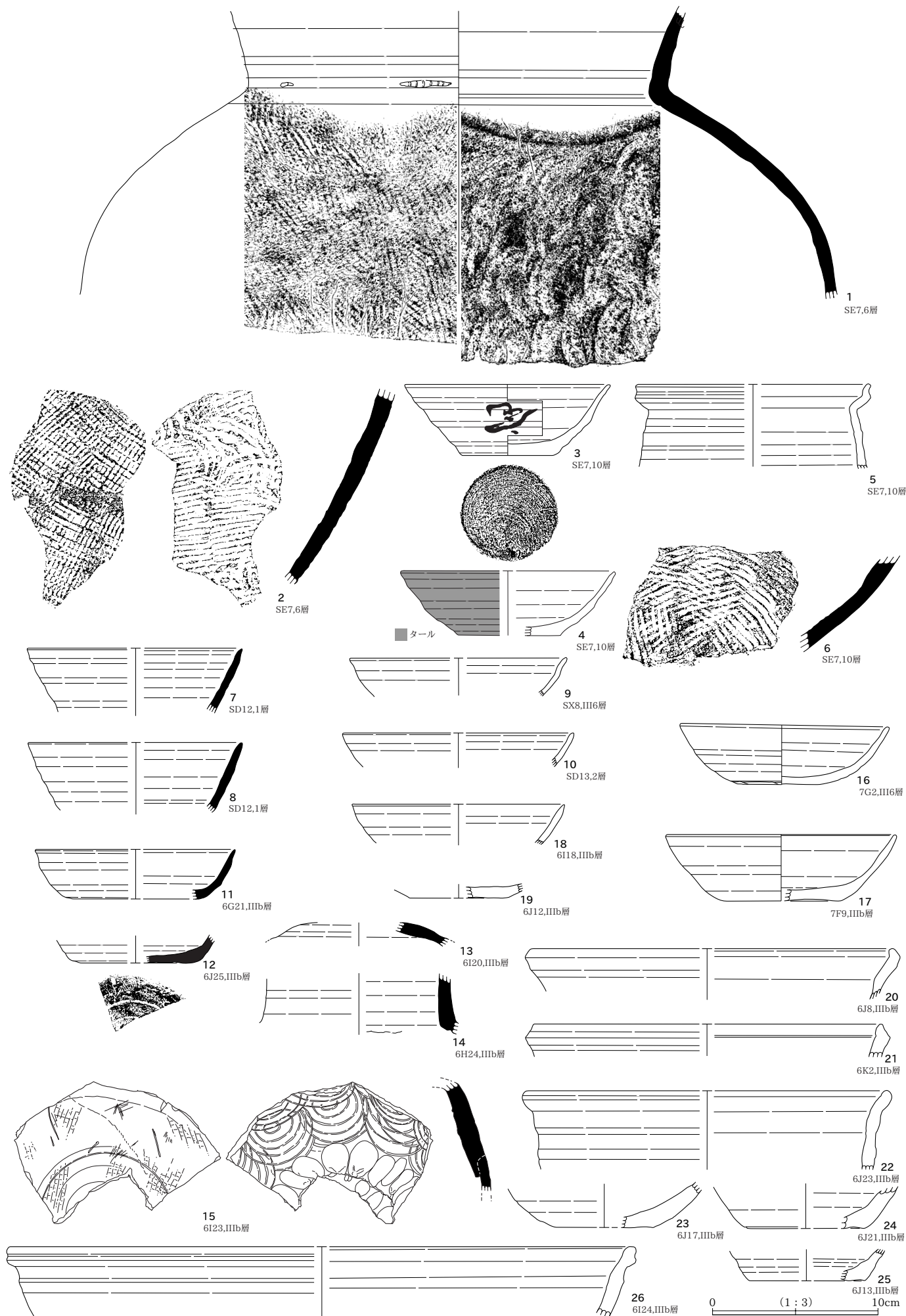
- 1.オリーブ黒色粘質シルト (5Y3/1) 粘性・しまりあり。IV層土(シルト) マーブル状に多く混入。
- SD12の土層注記は図版11と共通。

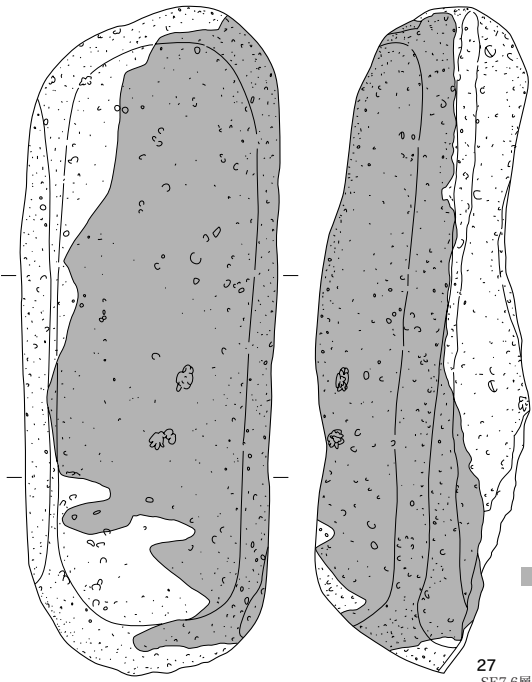


SX10A-A'、B-B'共通

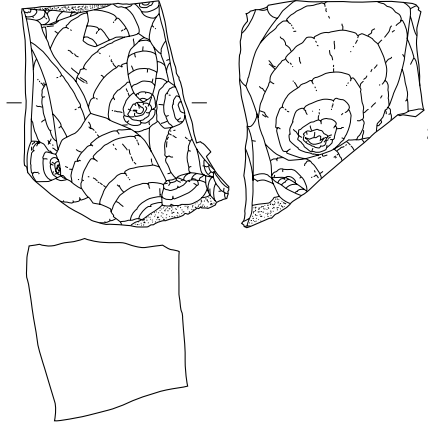
- 1.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性・しまり非常にあり。IV層土(シルト) マーブル状に多く混入。人為的な埋戻し土。
- 2.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性・しまり非常にあり。IV層土(シルト) マーブル状に少量混入。人為的な埋戻し土。
- 3.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) ブロックとIV層土(シルト)の混層。
粘性・しまり非常にあり。人為的な埋戻し土。
- 4.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) とIV層土(粘質シルト)の混層。粘性・しまり非常にあり。黒褐色粘質シルトの比率が高い。人為的な埋戻し土。
- 5.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 粘性・しまり非常にあり。IV層土(粘質シルト) 少量混入。人為的な埋戻し土。
- 6.灰オリーブ色シルト (5Y4/2) 粘性ややあり、しまり非常にあり。
IV層土(シルト)の崩落土。
- 7.黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) とIV層土(シルト)の混層。IV層土の比率が高い。粘性・しまり非常にあり。
IV層土の比率高い。人為的な埋戻し土。



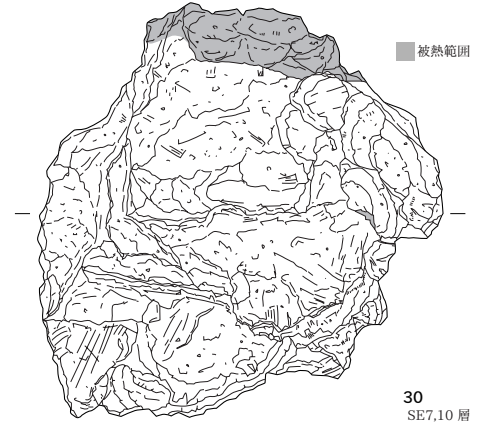




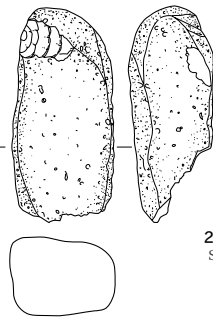
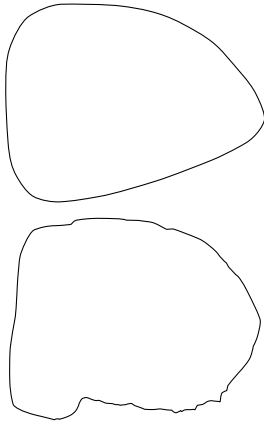
27 SE7.6層



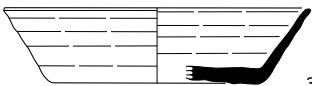
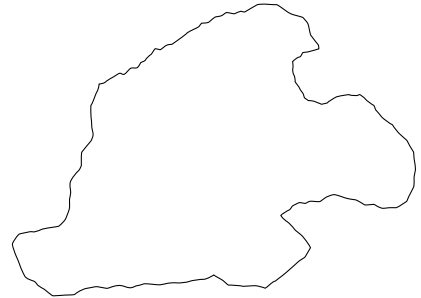
28 SE7.2層



30 SE7.10層



29 SE7.6層



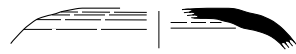
31 7J7Ⅲ層



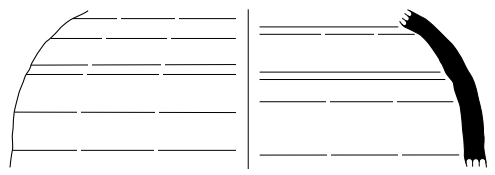
32 6M14Ⅲ層



33 表採品



35 6J2Ⅲ層



36 6M14Ⅲ層



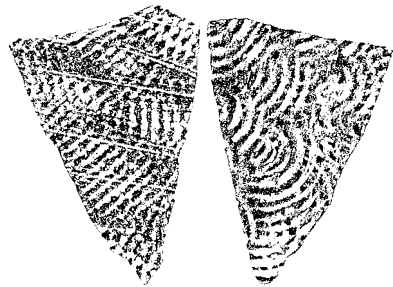
33 表採品



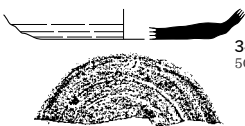
34 5Q21Ⅲ層



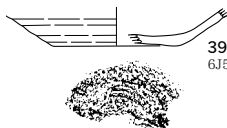
38 6J5Ⅲ層



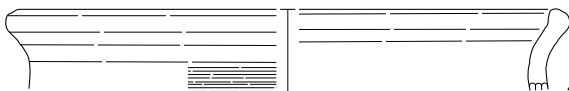
37 表採品



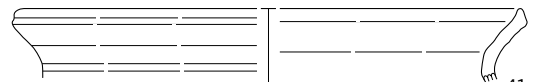
34 5Q21Ⅲ層



39 6J5Ⅲ層



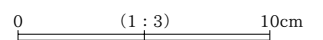
40 6J2Ⅲ層

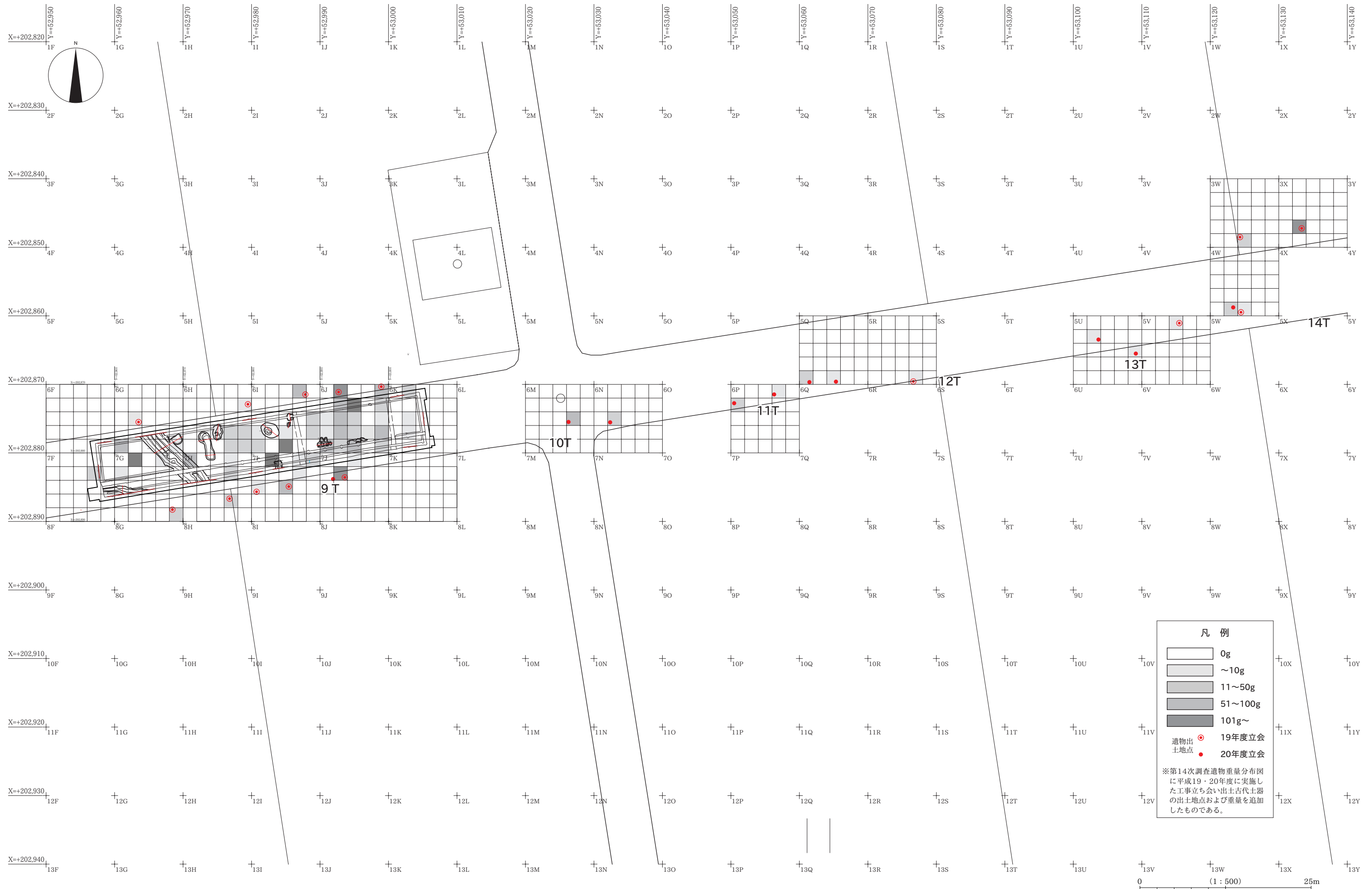


41 7J7Ⅲ層



42 6N12Ⅲ層







調査地



長沼遺跡

結遺跡

調査地

中田遺跡

上浦A遺跡

上浦B遺跡

国道403号線

北河



着手前 西から



完掘状態 西から



基本層序①



基本層序⑥



SK2 断面 北から



SK2 完掘 北から



SX3 断面 北から



SX3 完掘 北から



SK4 断面 北から



SK4 完掘 北から



SX5 断面 西から



SX5 完掘 西から



SE7 断面 西から



SE7 遺物出土状態（上部） 西から



SE7 遺物出土詳細（上部） 西から



SE7 遺物出土状態（下部） 西から



SE7 遺物出土詳細（下部） 西から



SE7 完掘 西から



SX8 断面 北から



SX8 完掘 北から



SX9 断面 西から



SX9 完掘 西から



SX10 断面 AA' 南から



SX10 断面 BB' 南から



SX10 完掘 南から



SX11 断面 南から



SX11 完掘 南から



SD12 ベルト (BB') 及び北壁断面 南から



SD12 完掘 南から



SD12 完掘 北から



SD13 南壁断面 北から



SD13 ベルト (AA') 西から



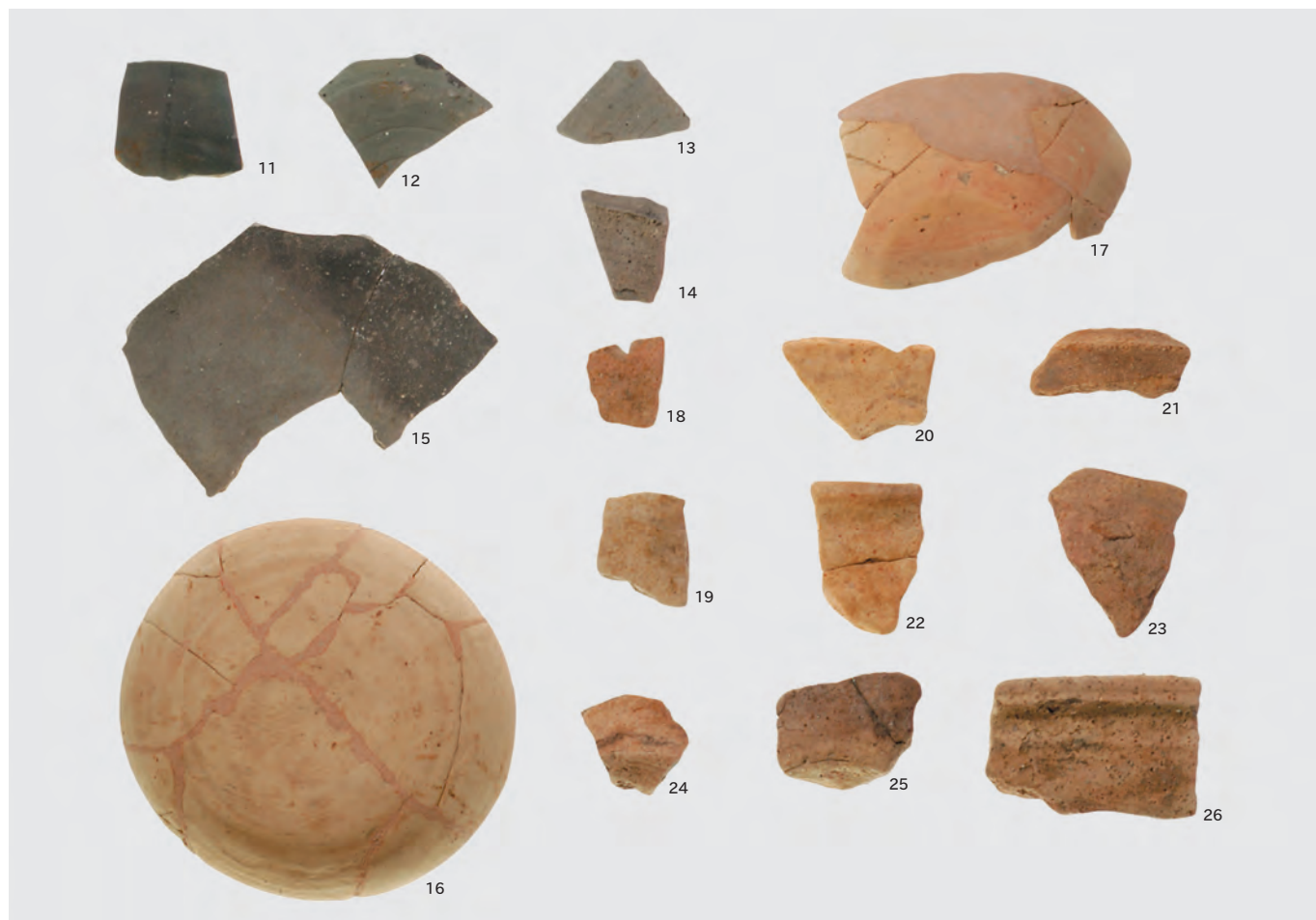
SD13 完掘 西から



土師器無台碗 (16) 出土状態 西から



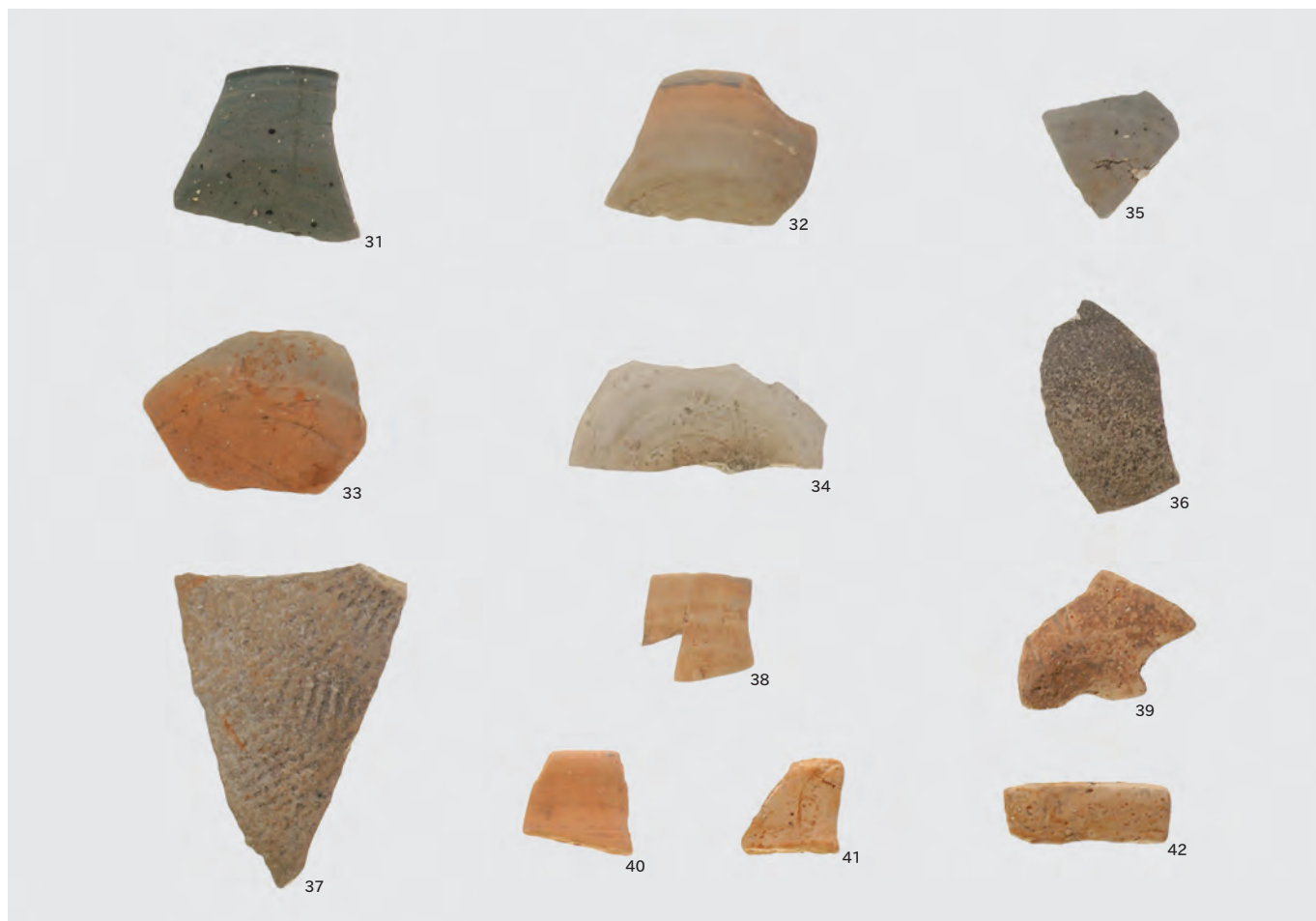
遺構出土遺物



包含層出土遺物



SE7 搬入礫



工事立会出土遺物



3 (SE7)



4 (SE7)



16 (7G2)



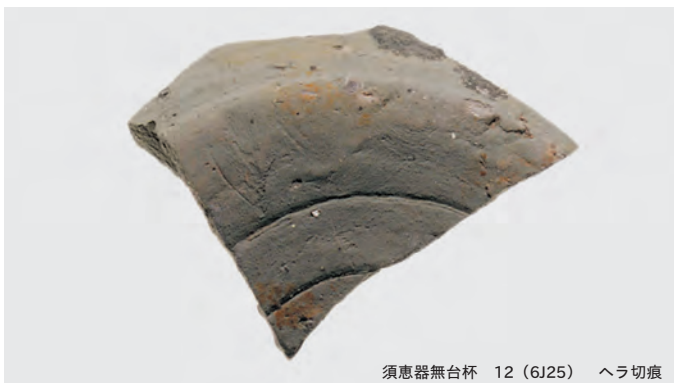
17 (7F9)



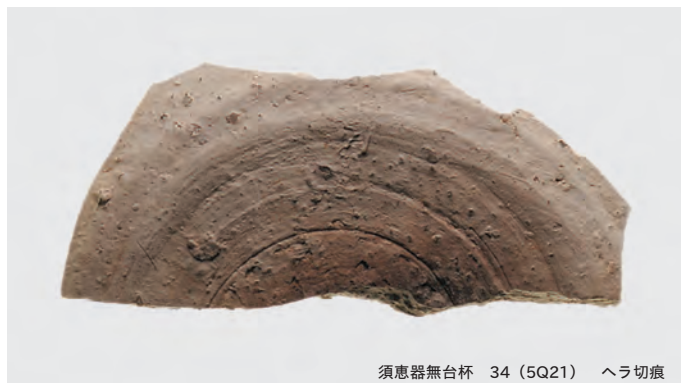
31 (7J7)



32 (6M14)



須恵器無台杯 12 (6J25) ヘラ切痕



須恵器無台杯 34 (5Q21) ヘラ切痕



土師器無台椀 3 (SE7) 糸切痕



土師器無台椀 4 (SE7) 糸切痕



須恵器大甕 2 (SE7) あて具・指頭痕



横瓶側面閉塞部 15 (6I23) 内面あて具痕および指頭痕



須恵器大甕 1 (SE7) 外面タタキメ



須恵器大甕 1 (SE7) 内面あて具痕



須恵器甕 37 (表採品) 外面タタキメ



須恵器甕 37 (表採品) 内面あて具痕



土師器鍋 6 (SE7) 内面あて具痕



土師器無台椀 16 (7G2) 底面ケズリ痕



墨書 拡大写真(宅)



SE7 10層出土 ヒョウタン

報告書抄録

ふりがな	かみうらえーいせき だいじゅうよじちようさ							
書名	上浦 A 遺跡 第 14 次調査							
副書名	市道結第 6 号市之瀬線改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	潮田憲幸・早田 勉							
編集機関	新潟市埋蔵文化財センター							
所在地	〒 950-3101 新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地 TEL 025-255-2006							
発行年月	西暦 2010 年 (平成 22) 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみうらえーいせき 上浦 A 遺跡	にいがたけんにいがたしあき 新潟県新潟市秋 葉区荻島 479 ほんち 番地 1 ほか	15105	153	37° 49' 44"	139° 06' 03"	20081015 ~ 20081106	442	道路改良
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
上浦 A 遺跡	遺物包含地	平安時代 (9 世紀 末 ~ 10 世紀初頭) 近代		井戸・溝状遺構・ 土坑・性格不明遺 構 計 11 基		須恵器・土師器・ 搬入礫・有機遺物	工事立会時に出土 した遺物を掲載	
要約	能代川・小阿賀野川に囲まれた沖積地に立地。自然堤防上に営まれたと推定される平安時代の遺跡である。調査の結果遺構 11 基、遺物 9 箱 (テンバコ P18 換算) が出土した。遺構の多くはその性格が不明であるが、井戸 (SE7) より 10 世紀初頭の遺物が一括で出土しており、他の遺構も時期を同じくすると思われる。遺物は、須恵器・土師器がほとんどで、井戸出土遺物を除き破片が多い。10 世紀代のもと、9 世紀前半の遺物があり、遺跡が比較的長期にわたり営まれたことを示す。自然科学分析の結果から水田耕作の痕跡が得られており、稲作を主体とした低地集落が想定される。							

上浦 A 遺跡 第 14 次調査

—市道結第 6 号市之瀬線改良工事に伴う発掘調査報告書—

2010 年 3 月 27 日印刷

2010 年 3 月 31 日発行

編集 新潟市埋蔵文化財センター
新潟県新潟市北区太郎代 2554 番地
〒 950-3101 TEL 025 (255) 2006

発行 新潟市教育委員会
新潟県新潟市中央区学校町通一番町 602 番地 1
〒 950-8550 TEL 025 (228) 1000

印刷 株式会社セビラス
東京都新宿区大久保 1-10-8
〒 169-0072 TEL 03 (5285) 3430